

YAPOO, THE HUMAN CATTLE
Ejawa Tatsuya x Numa Shozo

家畜 ヤブ 六

かちく
じん

Y
A
P
O
O

作画 **江川達也**
原作 **沼正三**

BIRZ
COMICS

家
か
畜
ち
人
じん
ヤ
ブ
六

Ejawa Tatsuya x Numa Shozo

原作 作画
沼正三 江川達也

発行
幻冬舎
コミックス



9784344806238



1929979005900

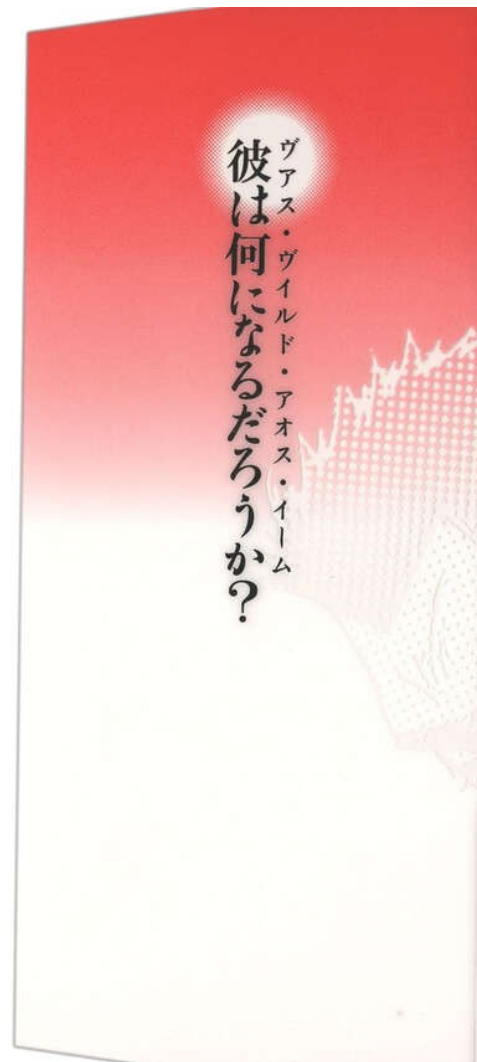
ISBN4-344-80623-9

C9979 ¥590E

雑誌 54244-23
定価：本体590円＋税
発行＝幻冬舎コミックス
発売＝幻冬舎



BIRZ
COMICS





PROO, THE HUMAN GATILU

BIRZ

家畜人ヤプ

六

江川達也

作 江川達也
作 沼正三

発行 幻冬舎
コミックス

YAP

YAPOO, THE HUMAN CATTLE
Egawa Tokyoya X Numa Shozo

家畜

からく
じん

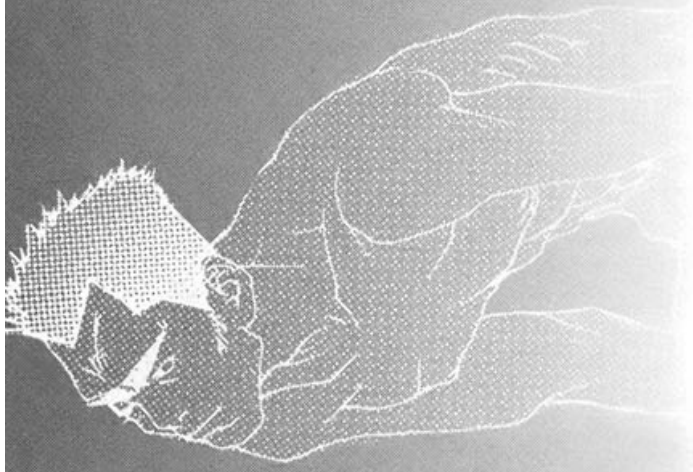
ヤブ

Y
A
P
O
O

六

幻冬舎アウトロー文庫「家畜人ヤブイ」より

作画 **江川達也**
原作 **沼正三**



第十一章 別荘到着第一歩

第一話 ————— 5

第二話 ————— 41

第三話 ————— 77

第十二章 水晶宮の上階と地階で

第一話 ————— 97

第二話 ————— 115

第三話 ————— 151



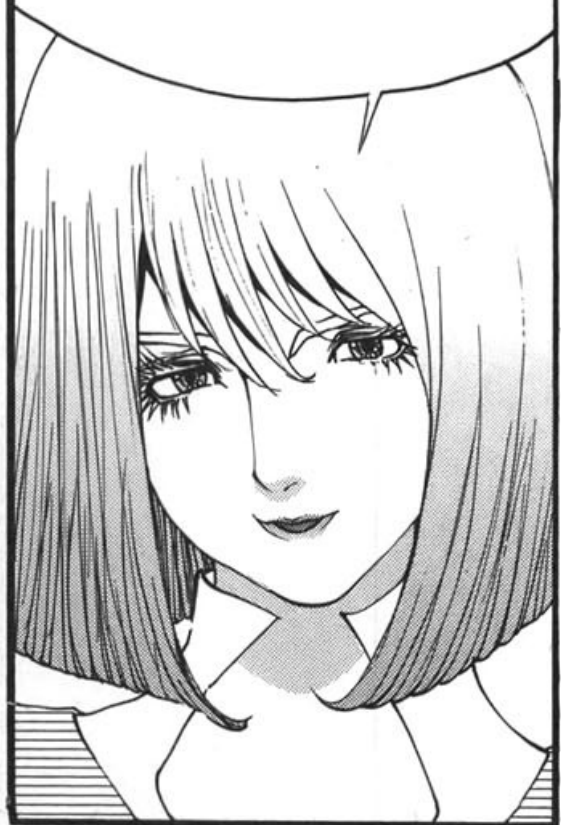
ポーリーンは
笑って

クララが
尋ねた

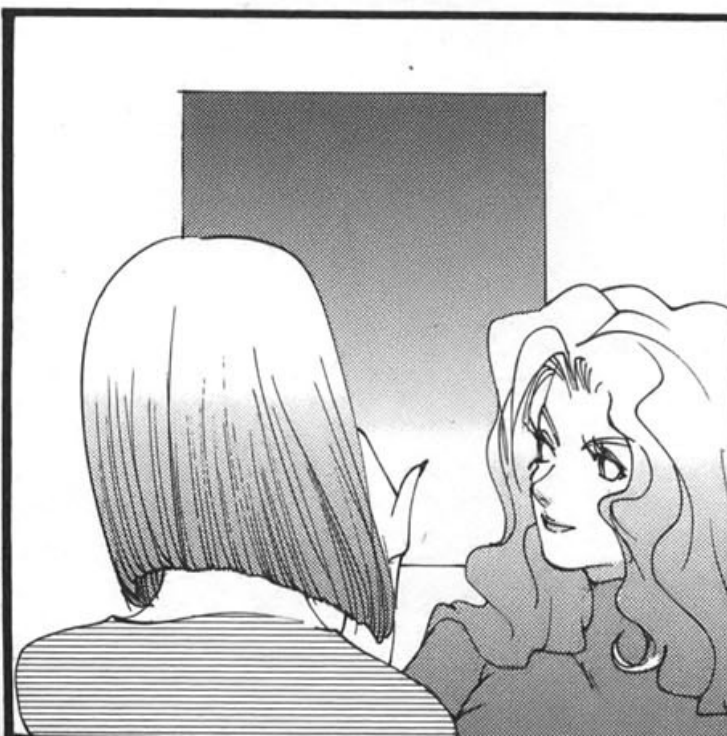


さあ
自分で
ご覧なさい

別荘は
どこに
ありますの？



あ
シシリ島
……



壁が開いて
隣室の
立体レーターが
現われた

地図で
見慣れた
長靴の先が
見える

第十一章 別荘到着第一歩 第二話

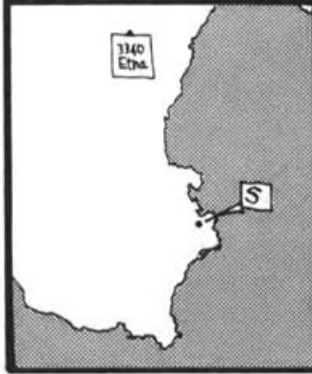




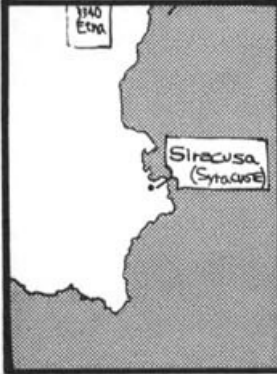
東海岸
エトナの山が
大きくなった



さらに
その南



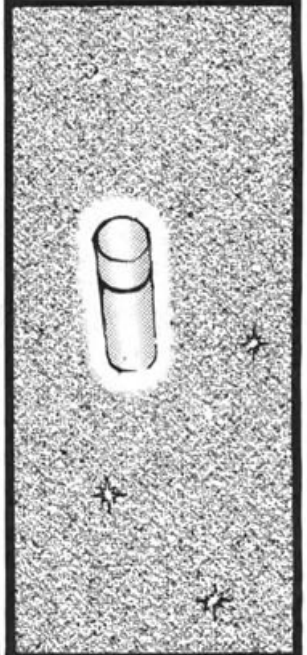
シラクエーズに
近いあたりか



半島の
先端部だが
人江らしい
水面が光る



それから
かなり
離れた地点だ



まあ
美しい……



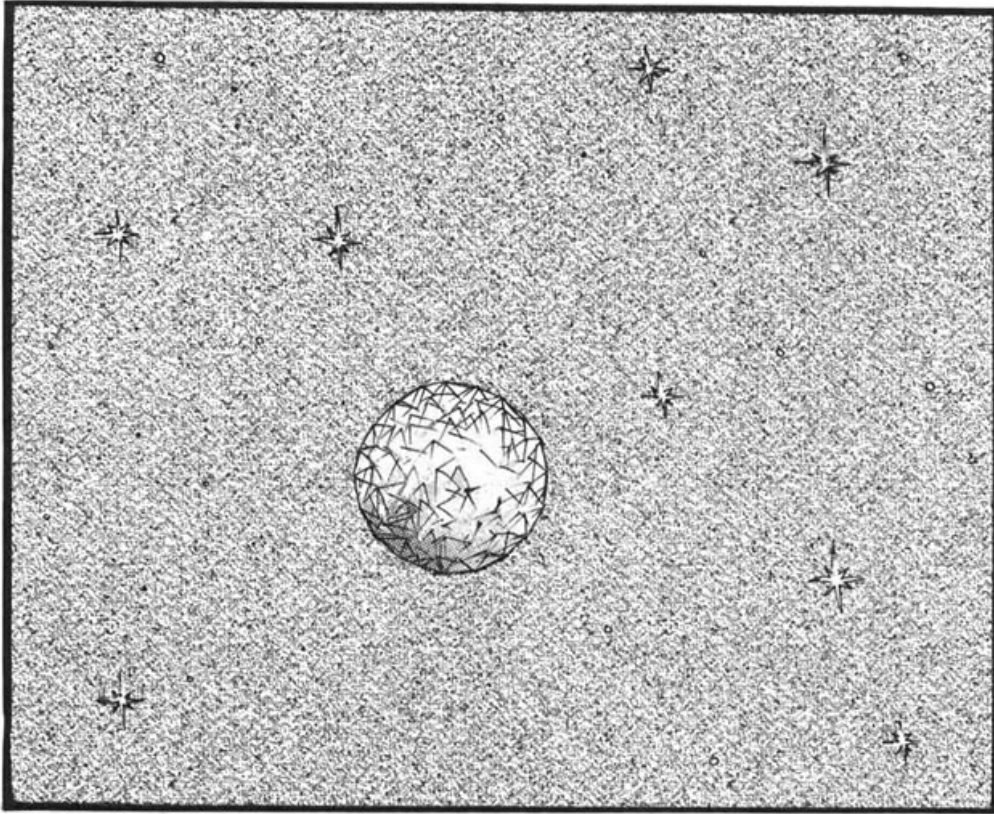
クララは
思わず
嘆賞の声を
放った



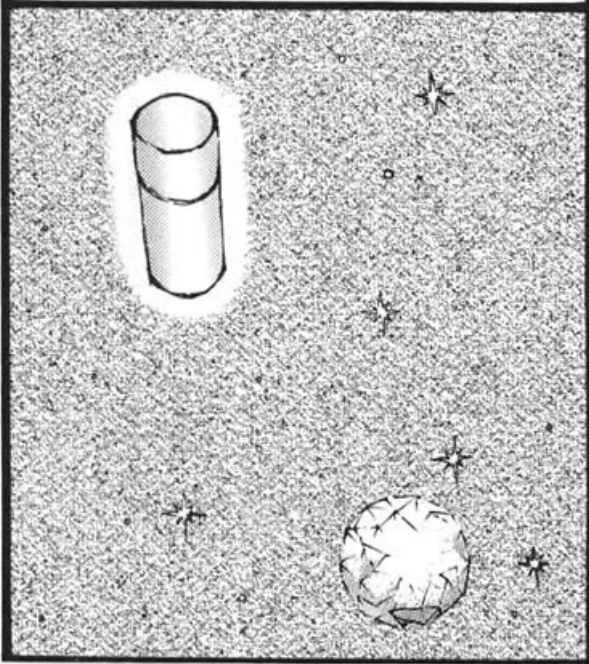
緑の絨毯に
大粒のダイヤを
落したとても
比喩したいような



広々とした
芝生に囲まれた
正多面体の
クリスタルパレス
水晶宮が



円筒の
シリンドリ
はるか斜め下方に
陽の光を受けて
キラキラと
輝いていたのだ



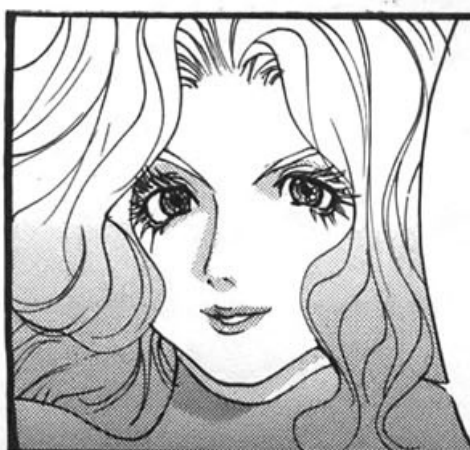
光は
西から
射して
来ていた



今
原球面は
秋の午後なの
だった



この島には
別荘が多いの



この辺
六十キロ四方
くらいが
うちの地所よ

ポーリーンが
説明しているうちに
円筒船は
下降し続け

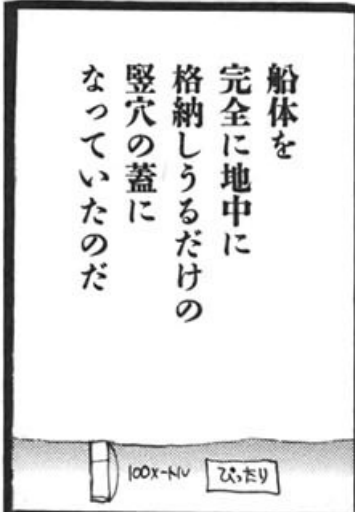
二つ目の
地球別荘だけど
前のよりいい

隣は
卿^{シグ}アグネス・マック
とって
私の親しい
公爵の地所

ちようど
彼女も地球に
来てるところなの



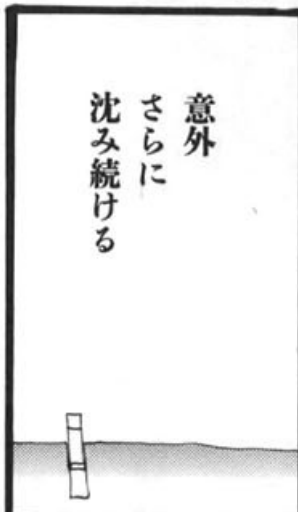
水晶宮からは
だいぶ離れて



船体を
完全に地中に
格納しうるだけの
堅穴の蓋に
なっていたのだ



金属板は
深さ百メートル



意外
さらに
沈み続ける



芝生の中に
径三十メートル
ほどに光る
金属板上に
着陸した



……と
思うと

出入口の
扉が開くと

立派な
地下街があつた

地上は
芝生でも

下は
驚くべき
文明世界が
開けていた

一別荘とはいえ
地下には
一都市があるのだ
……

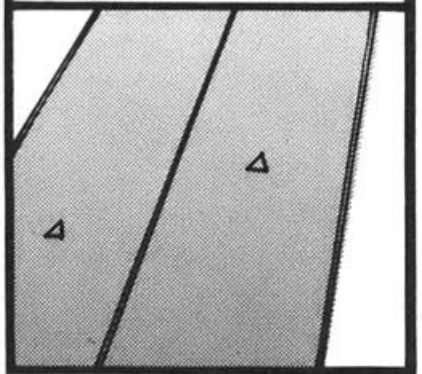
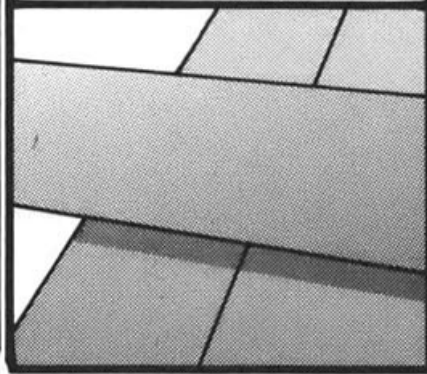
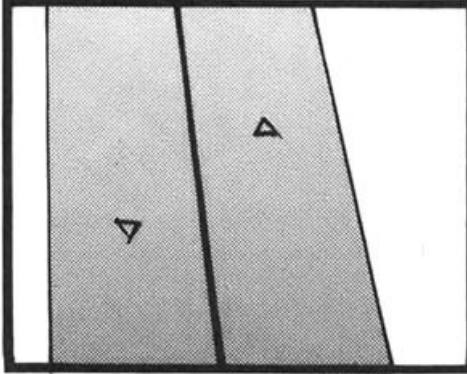
地下街の
床が
そのまま
動いている

それは
床にいくつかの
帯状の
仕切りがあり

一定方向に
絶えず
動いているの
だった

帯と帯が
交差するところでは
立体交差させて
停滞しないように
なっている

そして
一方方向には
必ず逆方向のが
隣り合っていた



エスカロード
動路で
行こうね

ポーリーンが
いった

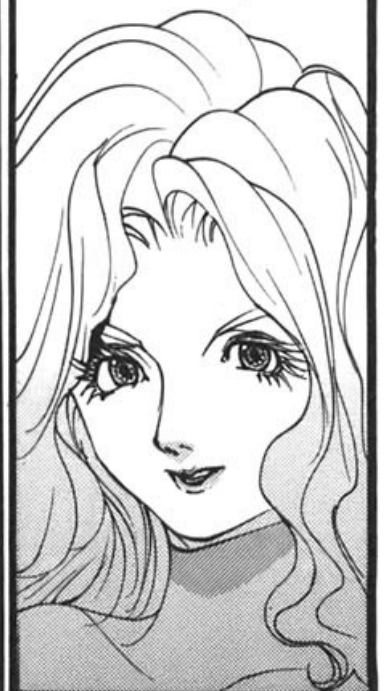
エスカロード？



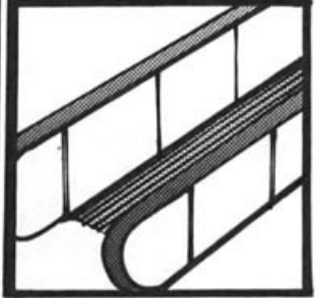
では
これは
一種の道路
なのか！



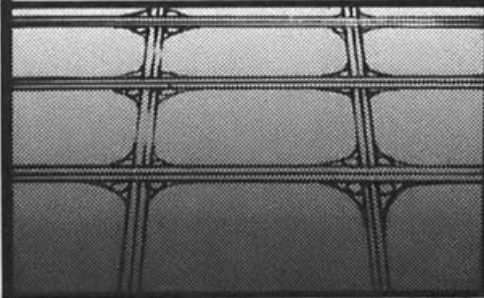
なるほど
前史時代の
都市でも



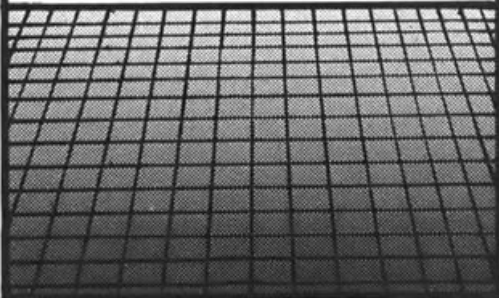
似たものが
開発されては
いた



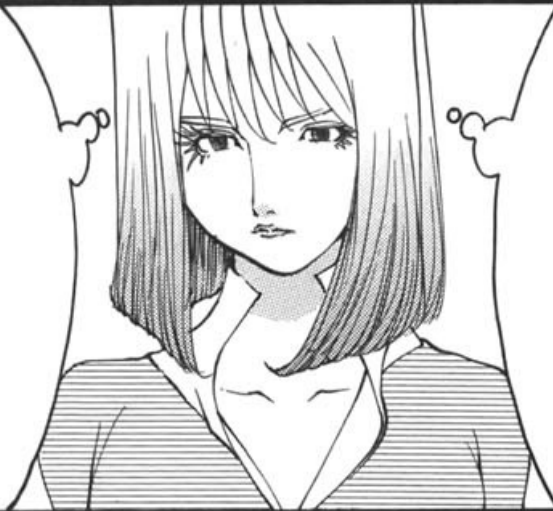
しかし
これほどの
規模で
これほどの
様式をもって



都市機能を
コントロールしている
状態を見ることは
なかった

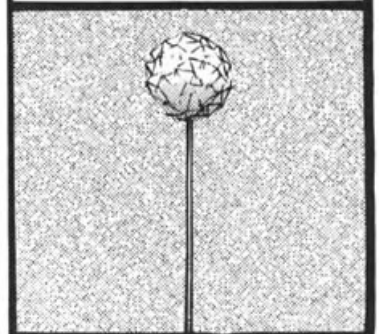


この
地下都市は
いったい
どれほどの
規模なのか？



その
全人口が
ただ一族に
奉仕しているの
だろうか？

一行はまず
水晶宮のほうに
走っているらしい
動路に



ニューマを
先立てて
近づいた

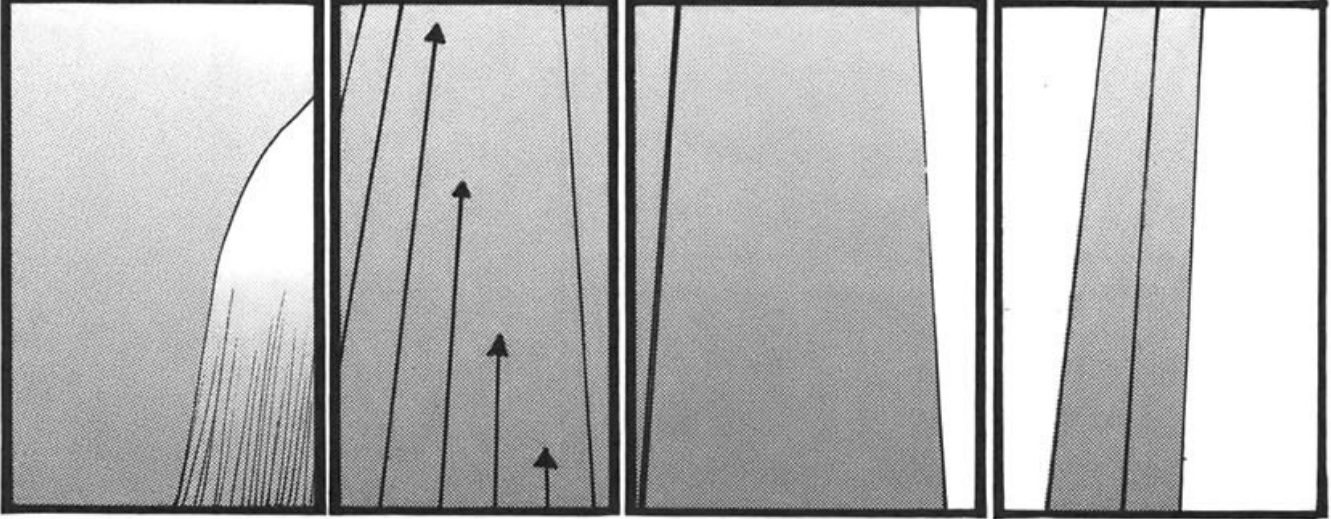


遠くからでは
わからなかったの
だが

帯は
速度を異にする
いくつかの
移動路面で
できていて

端から
だんだん
速度が
増している

しかも
各部分の
仕切りが
見当たらない

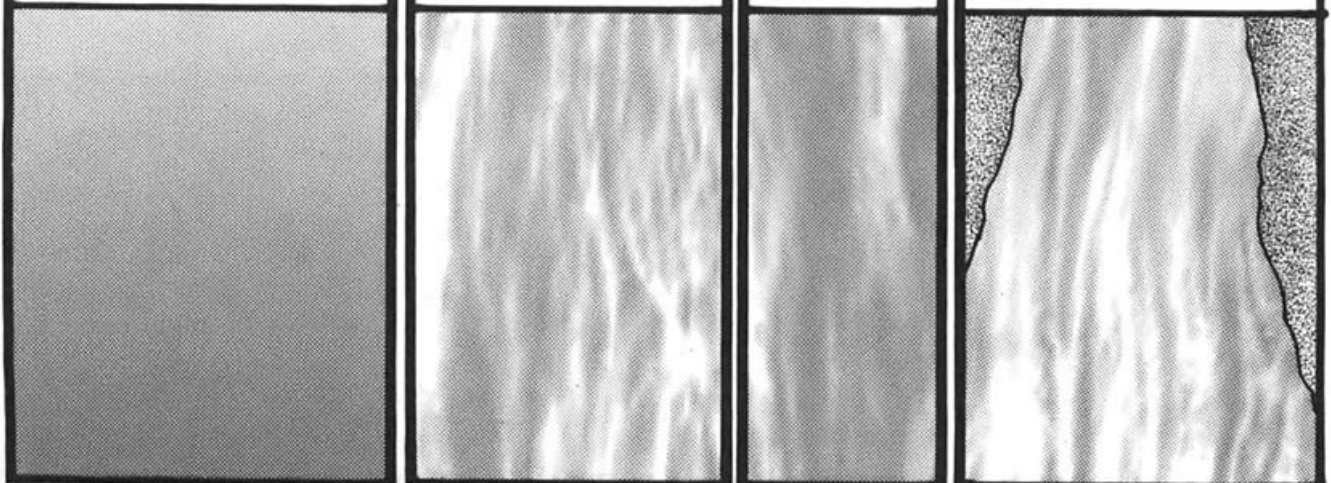


ちようど
河の水が
岸辺で
ゆるやかに
流れ

中流では
速く流れ

しかも
水面に区切りが
ないような
ものだ

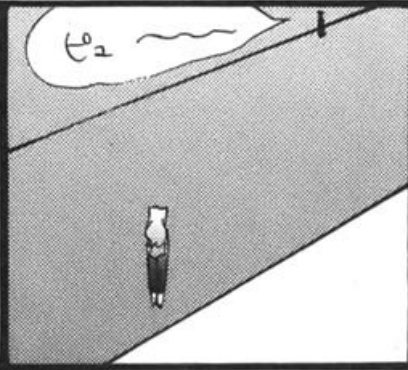
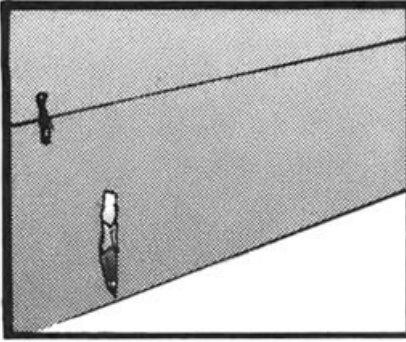
この路面は
高密度粘性動体で
作られているので
ある



そこでまず
端の緩速の
帯に乗り

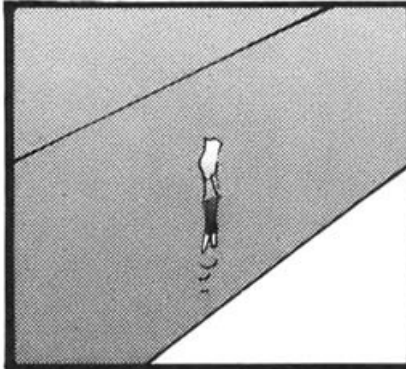
次々に
乗り換えて
最後に中央の
高速路面に
達するように
なっている

端の
路面から
奥の
中央路面を
見ると



ひどく
速くて
とても
乗り移れそうも
ないが

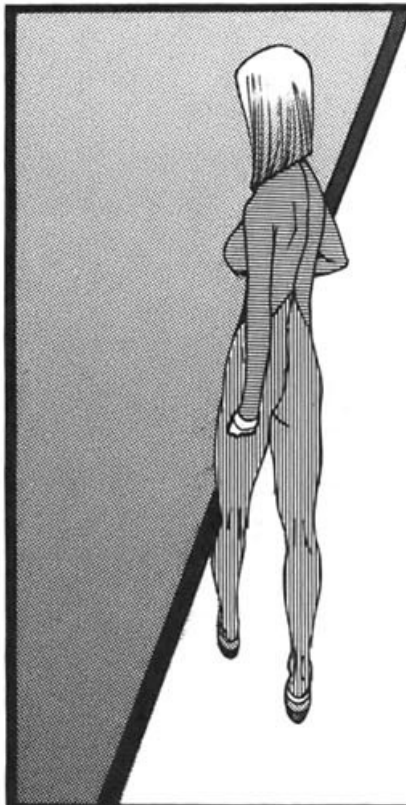
すぐ隣の
路面からは
楽に
移れるのである



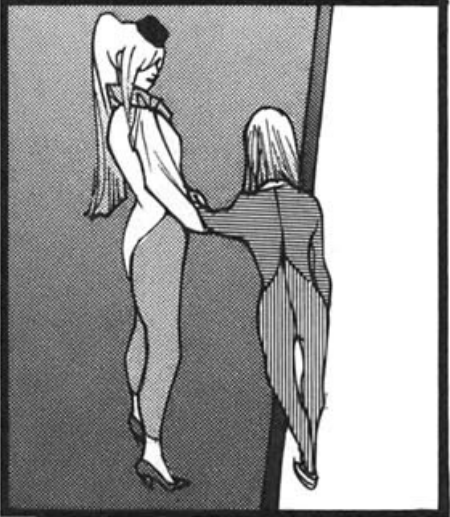
これを
複式動路フツシキドウロという

もつとも
慣れれば
無造作に
乗り移れるの
だろうが

初めての
クララは
やはり
足を取られそうな
気がして



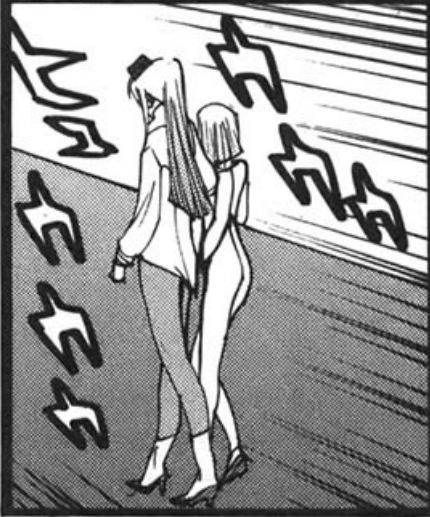
思わず
手を伸ばして
ウイリアムに
ささえてもらった



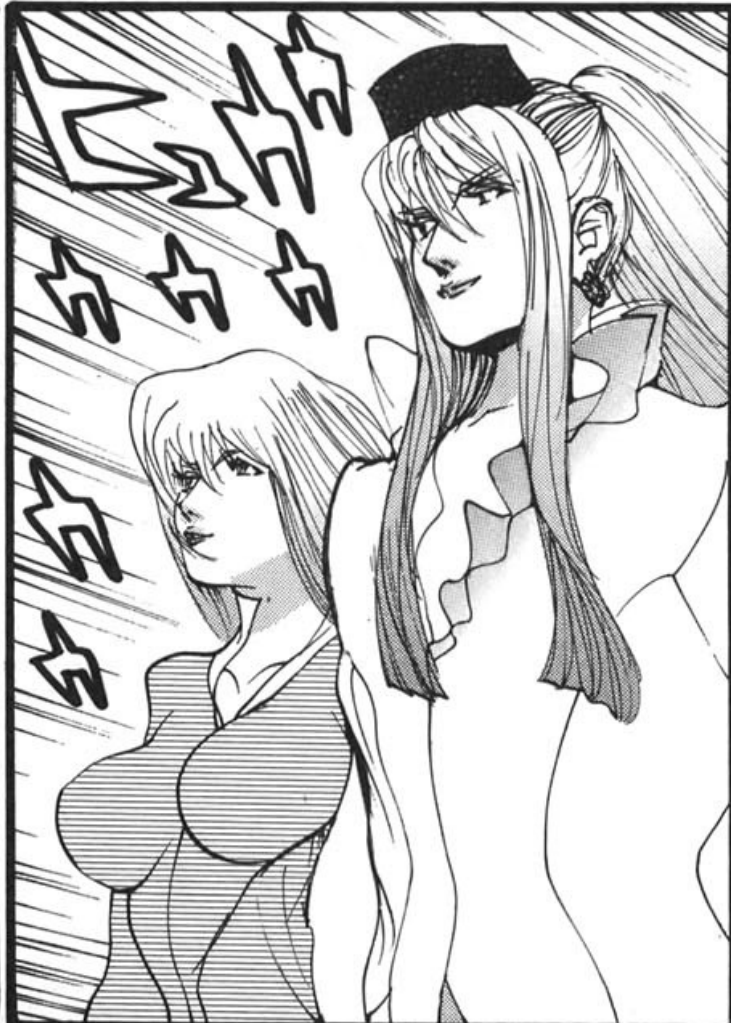
彼独特の
香水の匂い^{におい}が
快く
鼻をついた



中央路面は
相当な快速だ

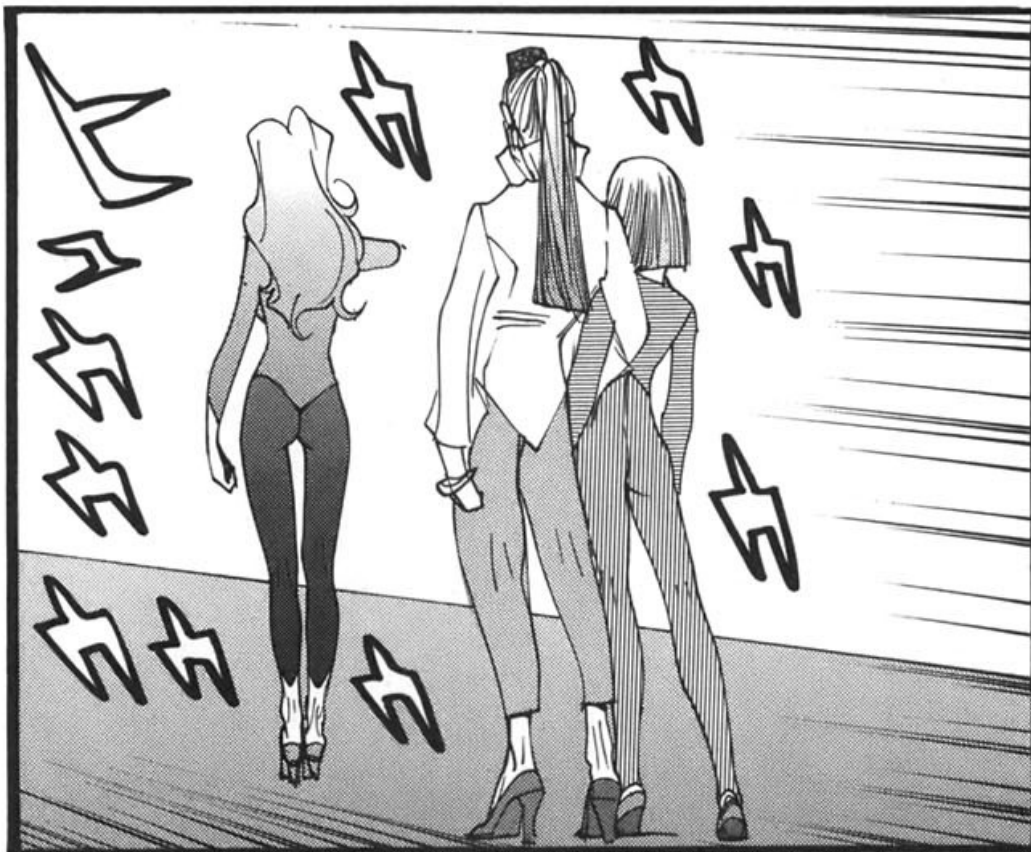


美青年と手を組んだまま
金髪を風になびかせて



足元の
路面の動きを
楽しんでいる
クララの耳に





前に立つ
ポーリーンの声が
とぎれとぎれに
はいつて来た



……から
獣医科手術室に
入れ……

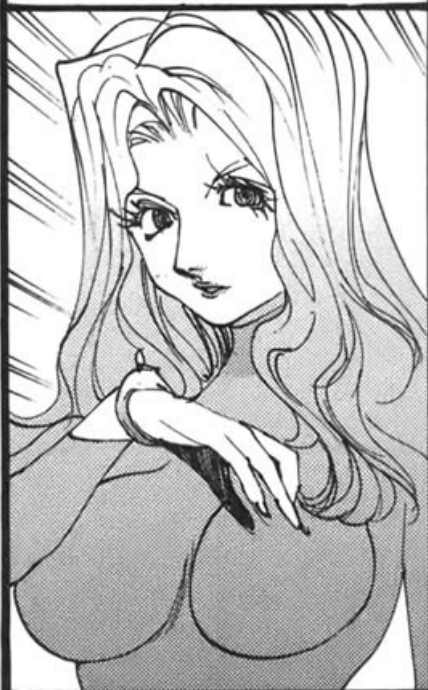


……
緩解薬の
合成に
かかるよう……



……つぎ
ニューマに
咬まれたばかり
……

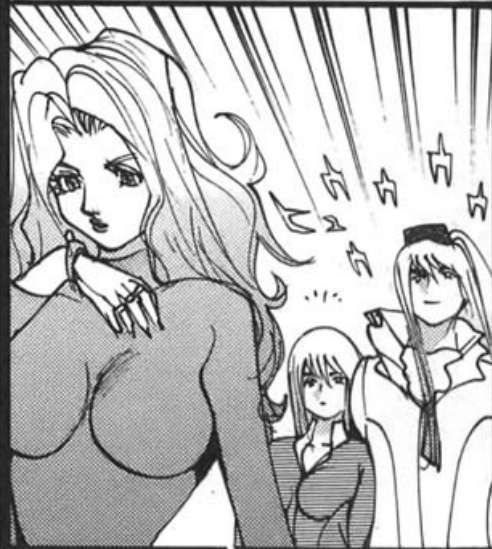
ポーリーンは
自分の
リスト・マイク
腕送話器で



さつそく
鱗一郎の
取扱い方を
指令している
のであった



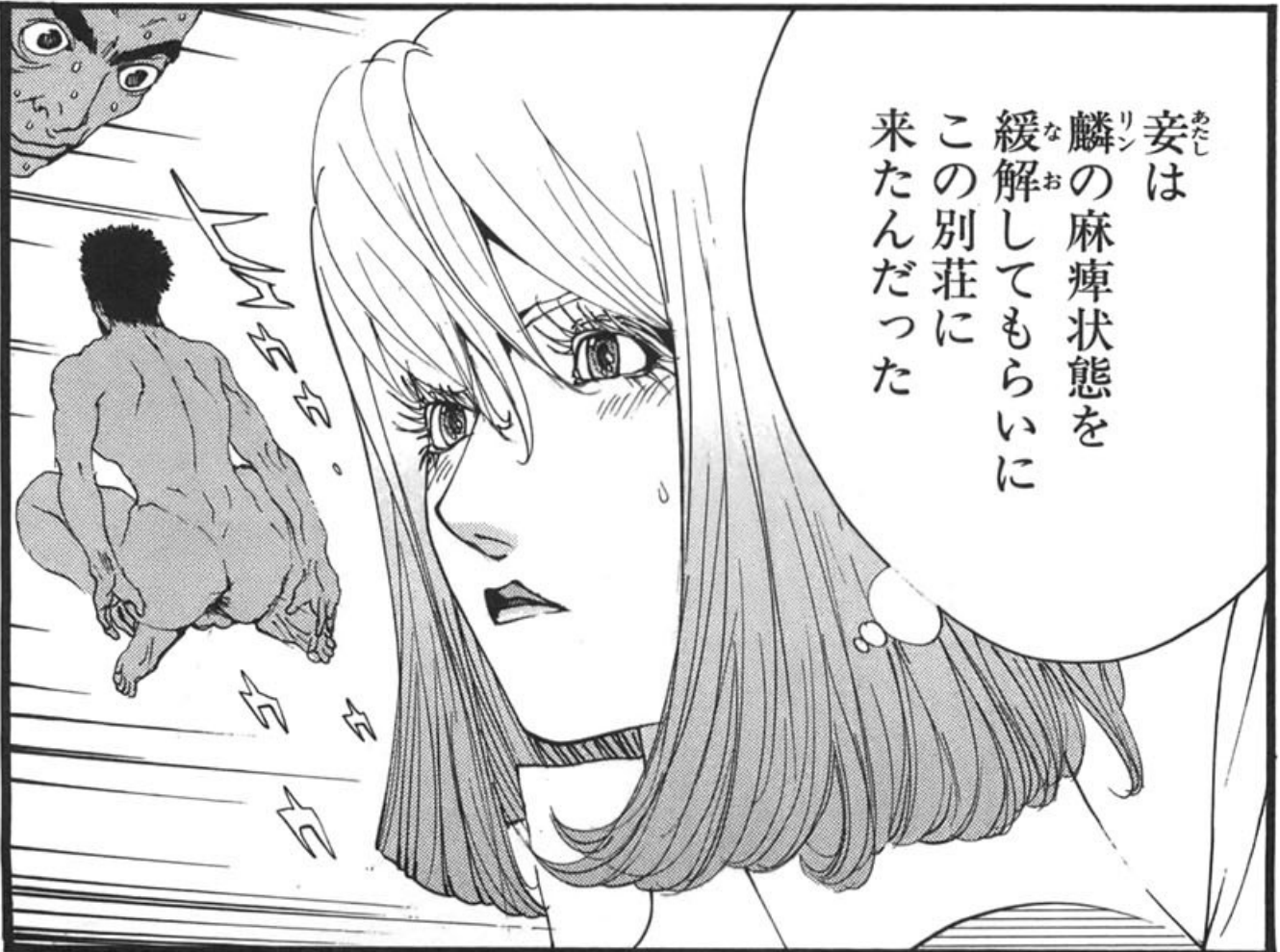
クララは
ハツと
彼のことを
思い出した



—
そうだ



妾は
鱗の麻痺状態を
緩解してもらいに
この別荘に
来たんだった



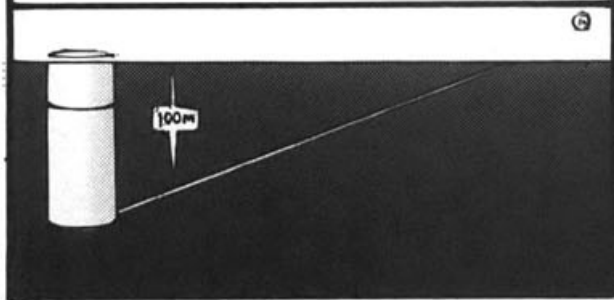


この動路を
後から
来るのかしら？

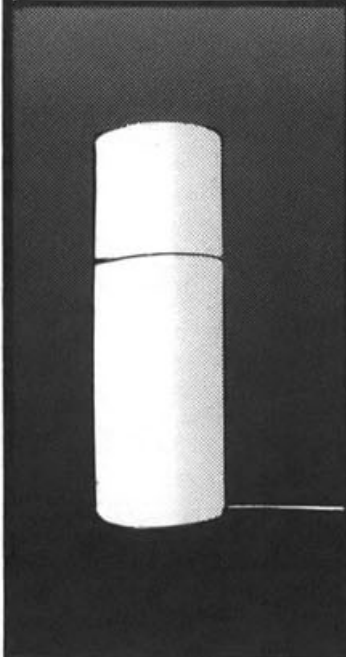


いったい
麟は
どうしてるの
かしら？

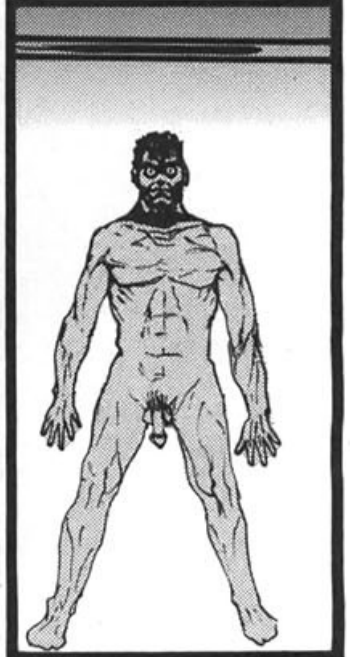
水晶宮の
地階に通ずる
地下百メートルの
深さの
地下道があり



「氷河号」の
船底部から
外に出たところに



麟一郎は
隧道車の中
にいた



これが
「氷河号」
乗組黒奴たちの
通路なのだ



鱗一郎の耳に
二人の会話が
聞えて来た

さっき
このヤブーの
背中に鞭を
あてたことな

あれ
黙ってて
くんなよ

頼む
な……

頼むよ
なア

俺は
うっかり
してたんだ

こんなことで
死にたくねエ

俺は
ボーリング・ピンに
されちまうかも
知れねエんだぜ

さアて
俺も
公売されるのは
嫌だでなア

※ 白人のみを指す点に注意

この会話を
理解して
いただくため



黒奴刑法第十九条

※
人間ノ権利ヲ
侵害シタル者ハ
死刑三級ニ処ス



黒奴犯罪に
対する
「刑法典」の条文を
紹介しておこう

同第二十五条

デイリー・レポート
日記報告ニ
嘘言アルモノハ
オーション・マテリシテ
私刑公売
auction for lynch
ニ処ス

同第二十六条

他ノ黒奴ノ
犯罪ヲ知りテ
報告セザルトキハ
嘘言アルモノト
看做ス

同第三百三十一条

死刑三級ハ
ボーリング・ボール
十柱戯ノ球ヲ以テ
執行ス

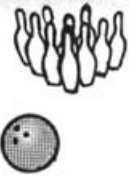
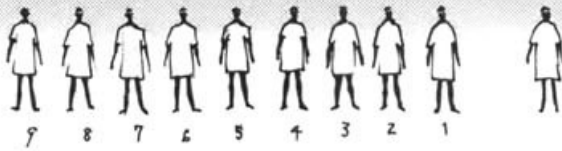
同第九百九十二条

公売セラレタル
黒奴ノ処遇ハ
ヤブイ
畜人ト同様トス

ボーリング・ボールによる
死刑というのは

犯行黒奴を
縮小し

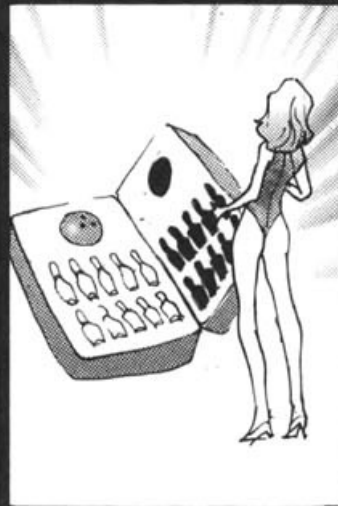
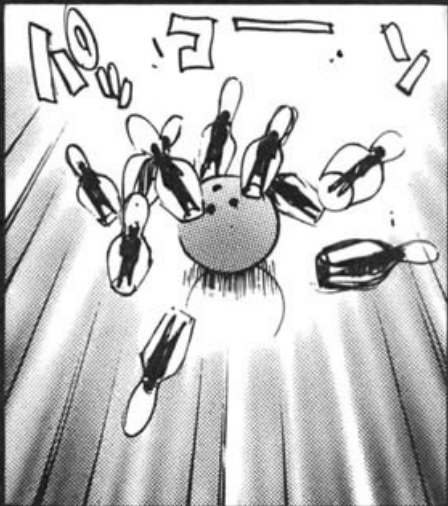
生体複写に
よって
意識が
ないだけで
肉体的条件の
同じ写しを
九体作り

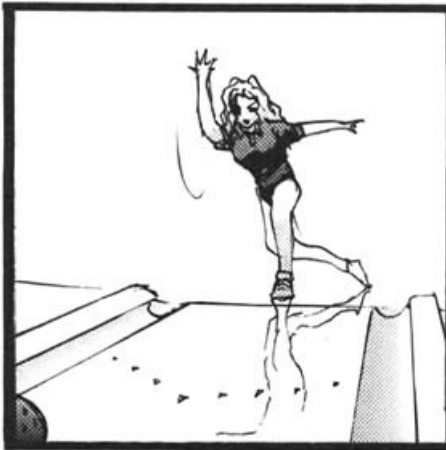


本物を
合わせて
十体を
ボーリング・ピンの
中に
閉じ込めて
しまい

これを
権利を侵害された
白人に
ボールと
ワンセットにして
交付する

ボールで
ふっとばされることに
意識を失う
ショックを受け



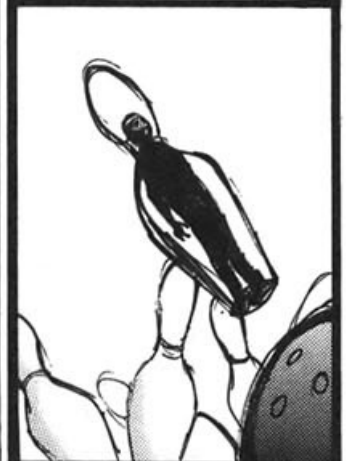
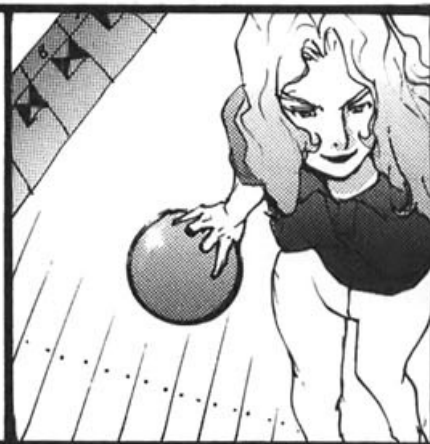


白人は
ボーリングを
楽しみながら

何百回となく
繰り返されるうちに
結局死亡するのだが

また
また
回復し
また
ふっとばされ

忘れてしまったころ
刑の執行を
完成することになる



貴族は
黒奴の生命を
奪うことが
できるが

次に
私刑公売に
ついて
いま少し
補足すると

身を以て
慰謝料を
支払わされること
になるのだ

犯行黒奴は
被害白人に
その楽しみを
与える点で



ヤブーと
同じに
扱うことまでは
できないし



平民は
一般に
黒奴の生命を
尊重せねば
ならない



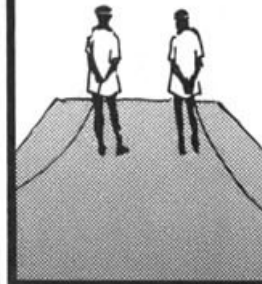
つまり
黒奴は
半人間としての
法律の保護を
受ける



この保護を
公に奪って
ヤブー並にするのが
私刑公売の
刑であって



私刑用として
せり・売りにされる



※
落札者は
この黒奴に
どんなリンチを
加えてもよい



これで
民衆の
サディズム本能を
満足させている
ことが



戦争競技の
存在と並んで



イース世界に
内乱などの起らぬ
心理的根拠だと
いわれている

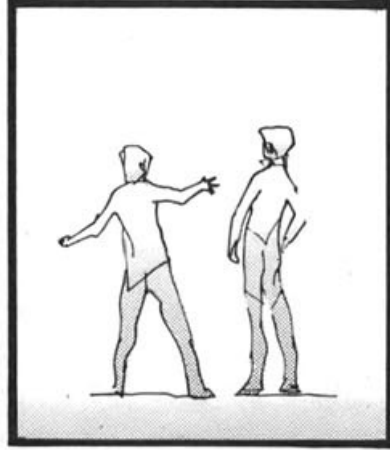


※ もちろん白人に限る。平民が多い

黒奴や
ヤプーを
殺すことに
よって



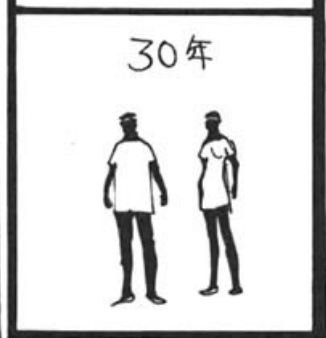
白人同士の
殺し合いを
防止しているのが



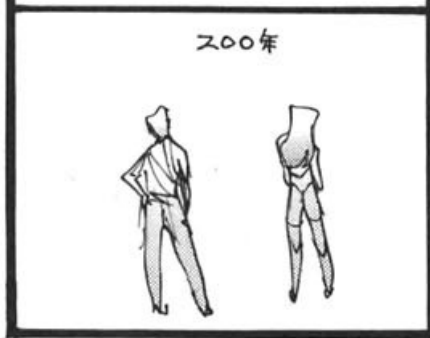
※
「イ・ス・の・平・和」
なのだ



イース黒奴の
平均寿命は
三十年である



——一方
白人は
天寿
ほぼ二百年を
享受している



——が
それは
こうして
簡単に
殺されるから
なのである



——
つまりんことを
いつている





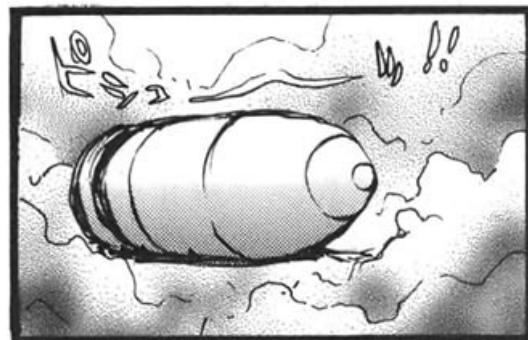
よほど重大な
犯罪じゃないか



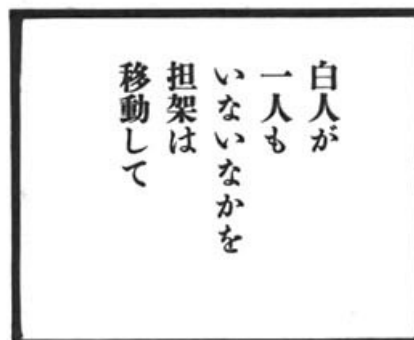
俺を
釜の中に入れて
あんなひどい目に
あわせたことの
ほうが



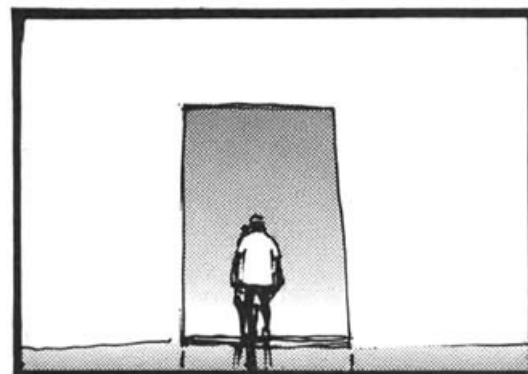
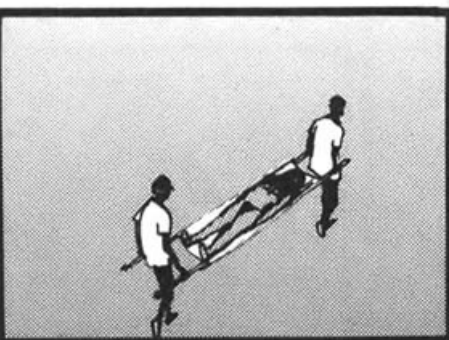
俺の背中を
ちよつと
鞭打ったことより



その時
車が停って
降ろされた



白人が
一人も
いないなかを
担架は
移動して

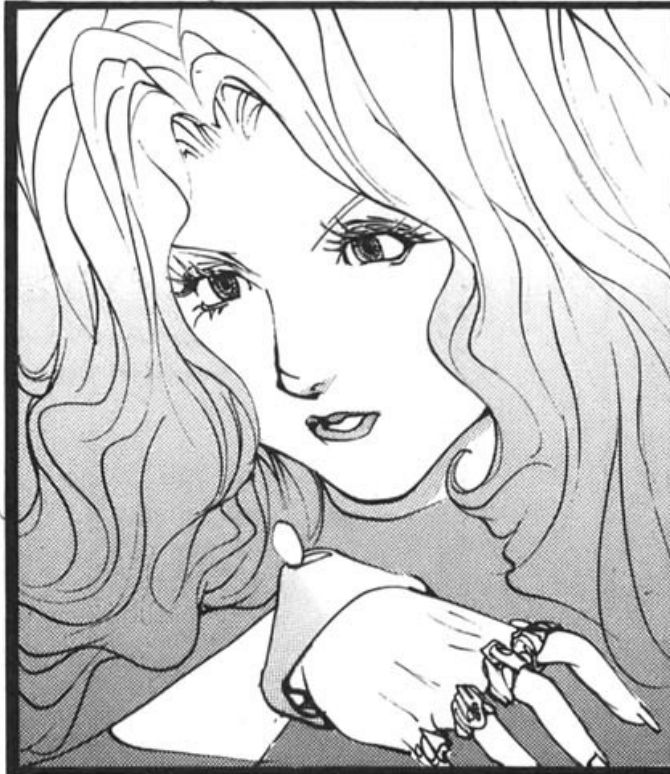


獣医科手術室に
着いた



後で
体が利くように
なったら
此奴ら
ただじゃ
おかないから
……

この行先については
先のポーリーンの命令が



※
黒奴看護婦が
鱗一郎を寝台に
仰向けに寝かせた



召使頭しやくしやうだうに
中継されて
護送の
二船員に
伝達されていた
のである



ヤプー専用の
寝台で

デルマトコンを
避けて
薄い金属板で
張ってある
冷たい寝台
だったが

彼の皮膚は
もはや
その冷たさを
感じないの
だった

獣医せんせいは今
お薬を作っ
てらっしゃるから



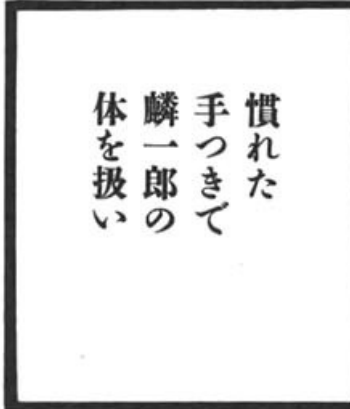
※黒奴社会には女権制はないので、黒奴女は昔のように「女らしい」のである。



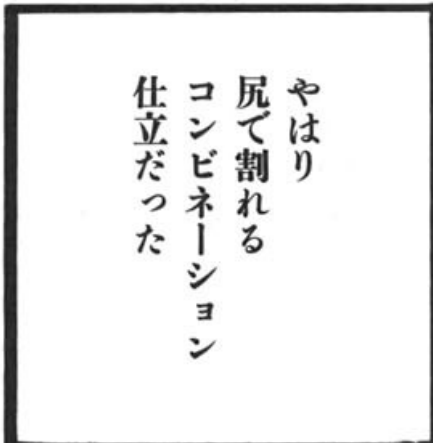
カテーテル
導尿管を
挿入した



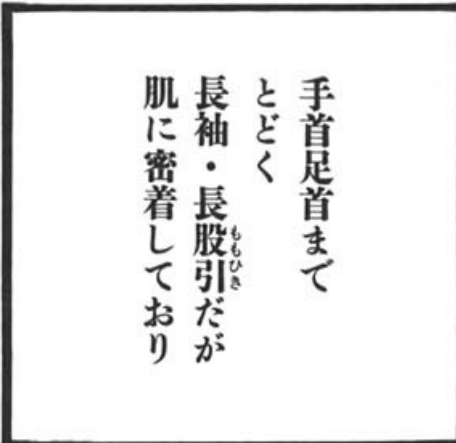
看護婦は
護送の
両黒奴に
そう
いいながら



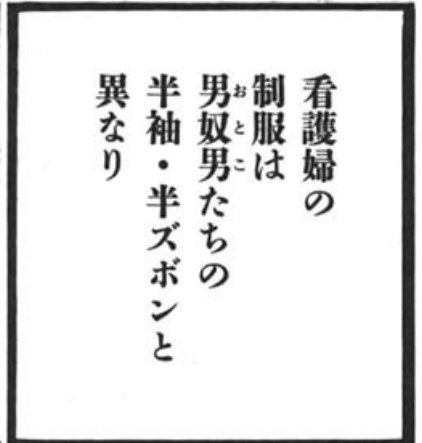
慣れた
手つきで
鱗一郎の
体を扱い



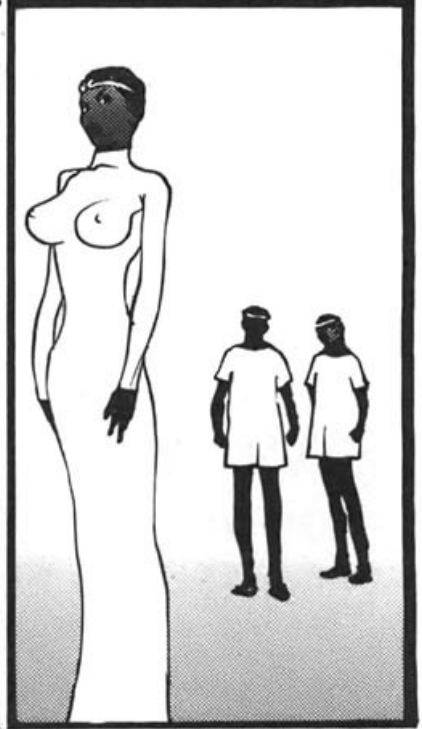
やはり
尻で割れる
コンビネーション
仕立だった



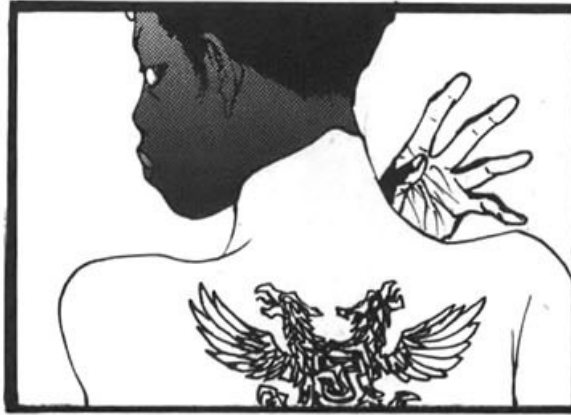
手首足首まで
とどく
長袖・長股引だが
肌に密着しており



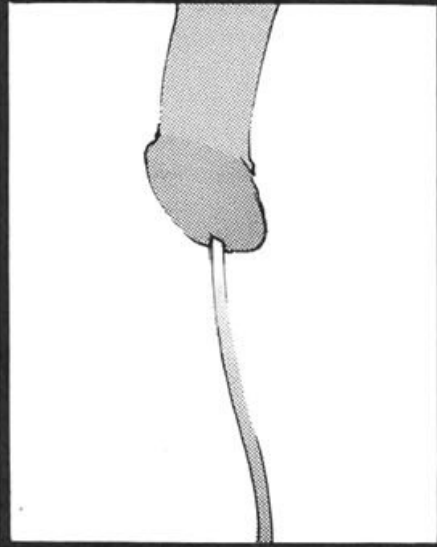
看護婦の
制服は
男奴男たちの
半袖・半ズボンと
異なり



背中
の
ジャンセン家の紋や



ヤプーに
導尿したので



胸のN5号の
繡取も
色が派手
女性好みて
あった

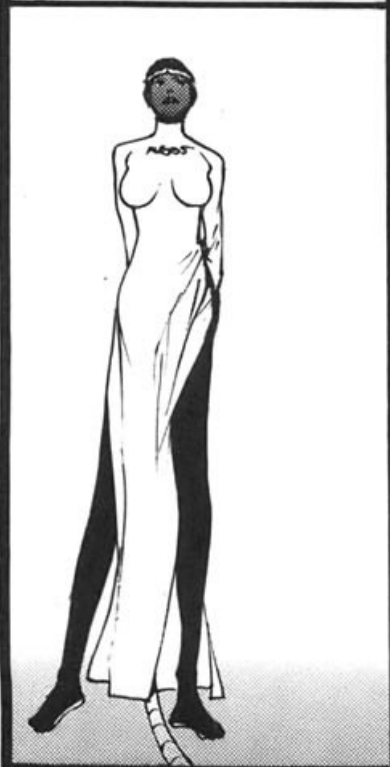


つられて
自分も尿意を
もよおした
彼女は

椅子のわきに
引っ掛けてあった
真空便管の
先端器を



股にはさんだ



取りあげて





これは
彼女の
専用器で

コンピネーション仕立
だから
挿入に不便はない

黒奴の股には
孔^{（しやあまゐ）}釘はないが



これがあから
一日中
この部屋を
離れないでよい



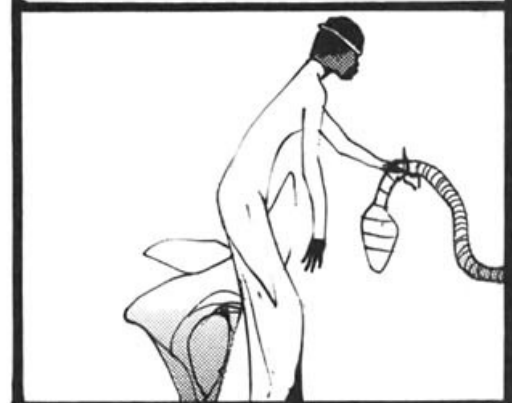
また
離れては
ならない



先端器を
元にもどすと
またヤブーの
検査である

その
便利とは結局
黒奴を使用する
白人のための
便利さに
すぎないのだ

便利で
あるが



口から
胃内鏡を
さし込み

エンジン虫の
頭部が
幽門の
適正部位に
附着してるか
どうかを
調べた

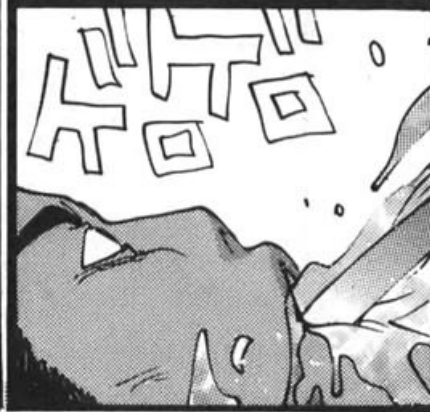
異常なし



伝声管で
その旨
獣医に
報告すると

胃内鏡挿入の
刺激で
鱗一郎が
嘔吐した

麻痺したままの
口から
汚物が
あふれ出すのを
認めて

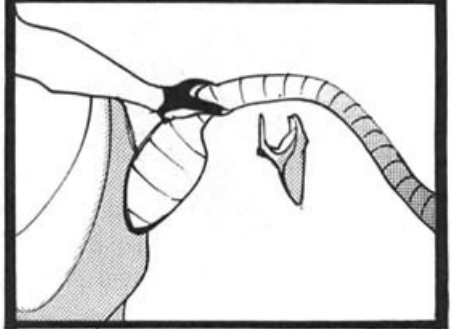


汚ならしい

舌打ち
しながら



つい今
自分が
使ったばかりの
先端器を
椅子のわきから
はずして



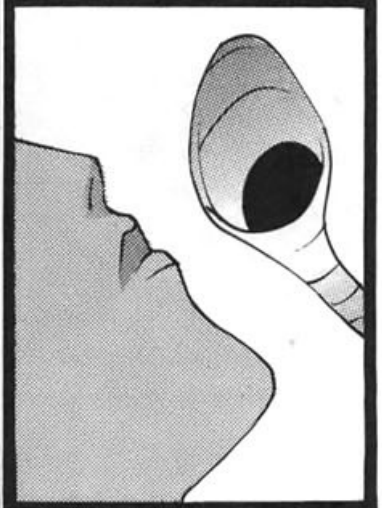
股当部を
鱗一郎の
口に当てて
汚物を
吸い取り
掃除したうえ



消毒器に突っ込んだ



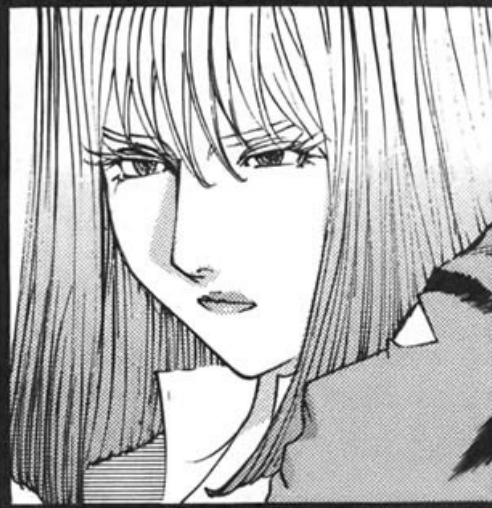
その接触で
汚れたのは
ヤブーの唇
ではなく
先端器なのだから



……
黒奴用の
便器に
接吻させられた
とは知らぬ
鱗一郎は



クララが
いっこうに
姿を見せない
ので



だんだん
心細く
なってきた



円筒の船倉内から
四人の白人と
愉快そうに
談笑しつつ去った
彼女の姿が

いまだに
目に浮かぶ

あれほど
誓ってくれたのに
来ないのは
何かあったのか

彼女の身に
……

それとも
俺のことを
忘れたのか
心変りしたのか



そんなはずは
ない……



疑心は
暗鬼を生み



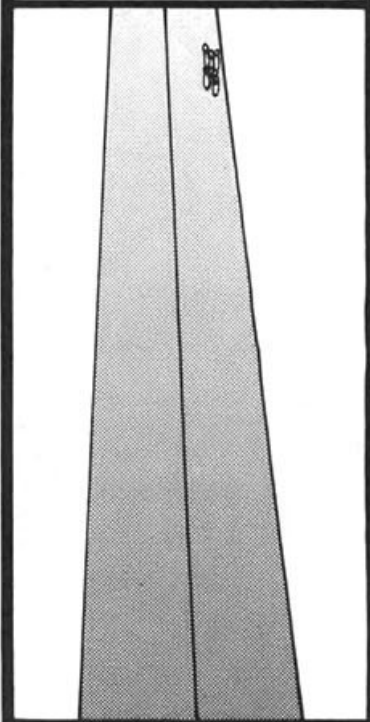
思いは
千々に
乱れるばかり
だった



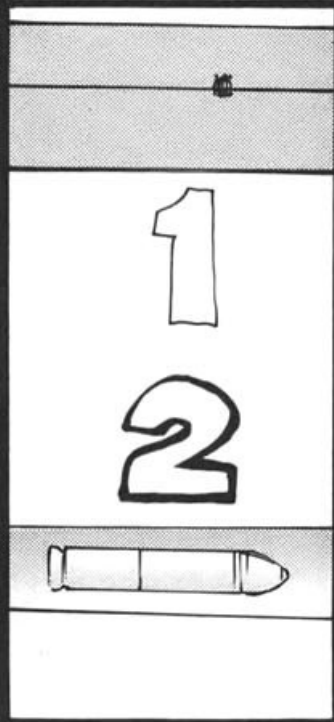
鱗一郎が
寝台に
横たえられたころ



クララたちの乗る
中央路面は
ようやく
地階第一階の
ステーションに
達した



速い
といっても
道路は
隧道車の
半分くらいしか
速度が出ない

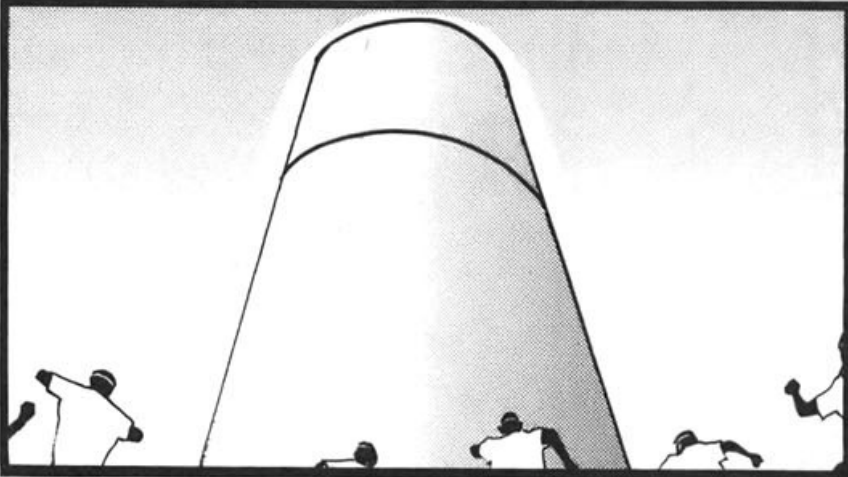


その代り
気まぐれな
白人たちが急に
「氷河号」を
使う気にな
った時にも

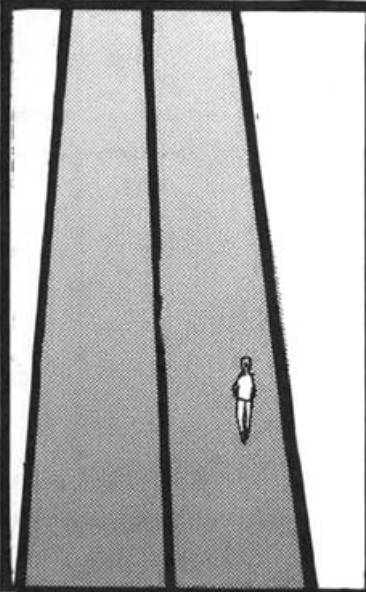


知らせを
受けて
後から出た
船員たちが







先に
円筒に乗り込んで
諸般の準備を
してしまえる等の
便利があった




速いばかりが
能てはない



イース人は
生活の
快適さをこそ
求めるので
ある



——
麟はほんとに
ヤブーなの
かしら？



一度
麟一郎のことに
考えが
向いてからは



フント
人犬

バンク
肉足台



シユトウール
肉便器

円盤内て
見た

この問題が
ずっと
心を占領し続けて
クララを
悩ましていた



これらに
対して
イース白人と
同様な
感じを持ち

そして
彼女は
このヤブーには
同類としての
意識も同情も
持てそうにない

ヤブーと
称ばれる
似而非人類の
存在は
疑えない

などから
考えて



同様な
行動に出る
心理的準備が
整っている



矮人^{シム}に
対しても
それは
同じである



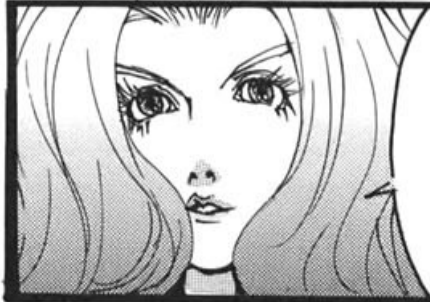
ただ
気がかりなのは
そのヤブーが
日本人の
末裔らしい
ことだ



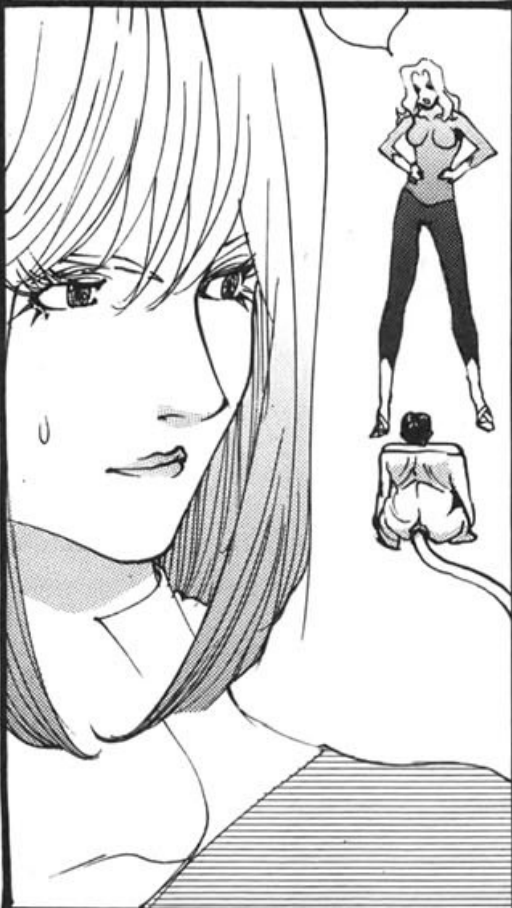
なぜなら
麟一郎は
まぎれもない
日本人だから
である



たしか
ジャパニーズとか
ジャバニーズとか
いう……



壁から
出て来た
奇形の
便器人間を
叱りつけた
ときの言葉も
日本語だった
ようだし



と
ポーリーンは
いった



「黄色い猿」



ともいった

どうも
日本人のこと
らしい



矮人は
死ぬとき
彼女の
バンザイを
祈ったが

これは
日本語として
聞いた
記憶がある

……もし
日本人は
すべてヤプーだと
いうのなら

……
もし麟が



——
ポーリーンたちは
このことに
何の疑念も
もってないが

クララは
まだ心から
そう
信じる気には
なれなかった

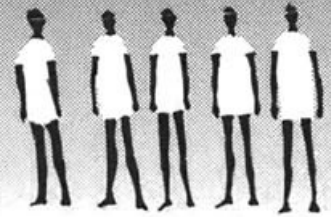
——
ほんとうにヤプー
だったら……

円筒の中では
芝居をする
必要上

麟一郎を
ことさらに
ヤプー扱いは
したもの

しかし
ヤプーでないと
言い切る自信も
ゆらいできて
いるのだった
……

五人の
黒奴が
出迎えて
いた



制服は
同じく
コンビネーション
でも



色が
船で見た
召使いたちと
違って
桃色であつた



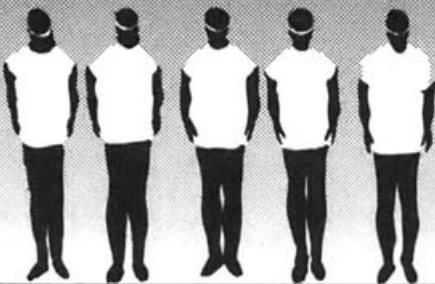
これは特に
主人の身の回りの
世話をする
名譽の召使いを
示す色で



従者フットマンと
称よばれる



一人一人が
自分の主人を
迎えるに
出てるのだ

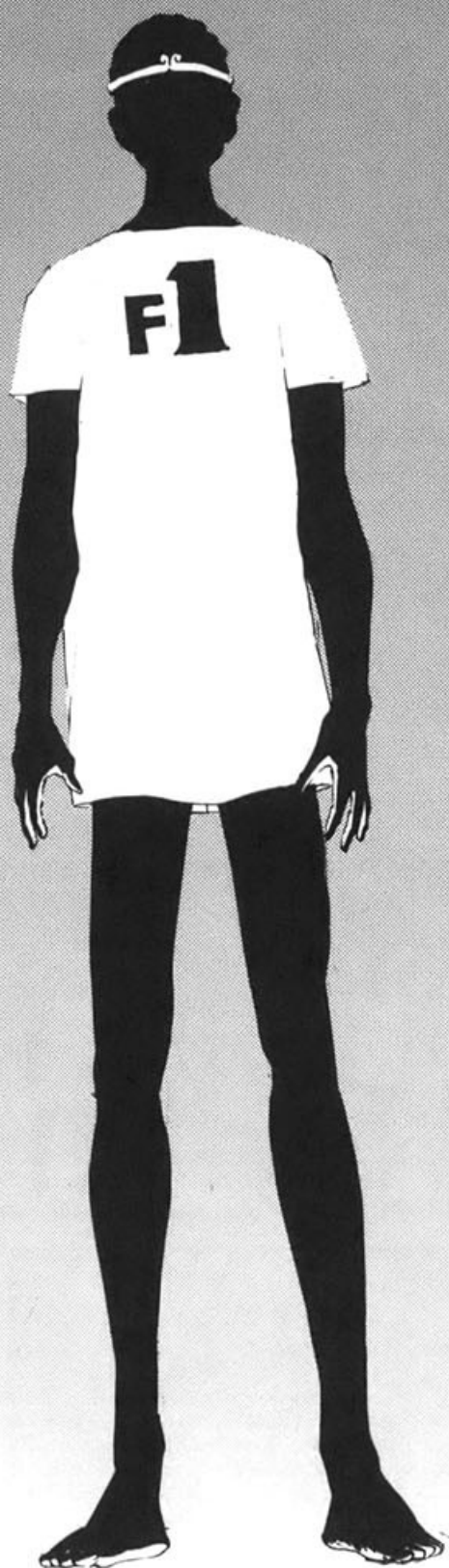


クララにも
もう従者が
定まっている
手回しによさ
だった



胸番号F1

Fは小さく
1は大きい



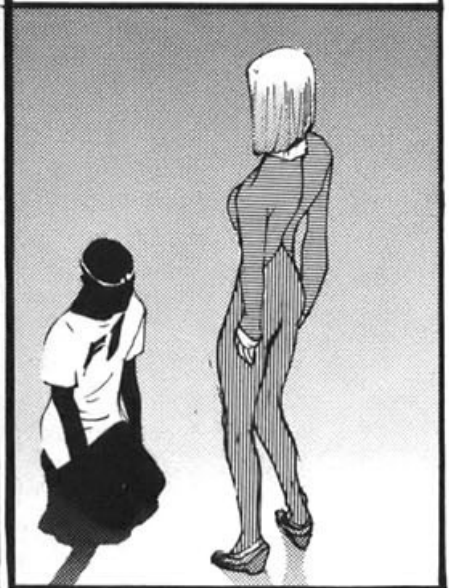
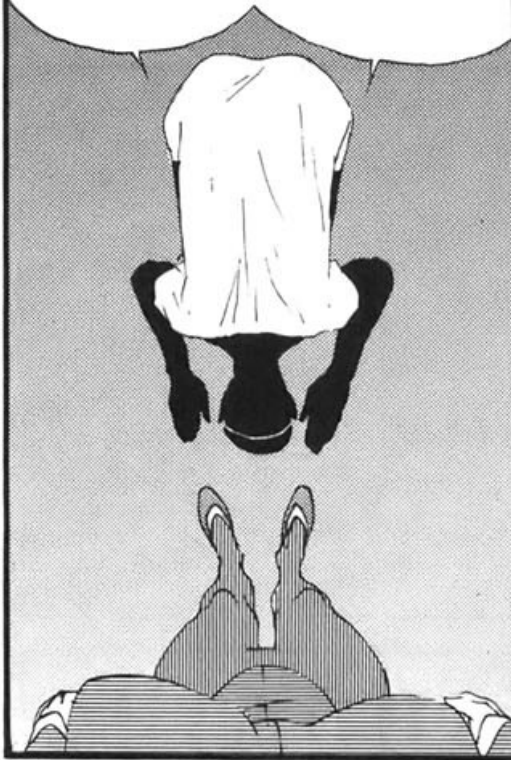
第十一章 別荘到着第一歩 — 第二話 —

—の
青年黒奴が
彼女の前で
ひざまずいて
挨拶した

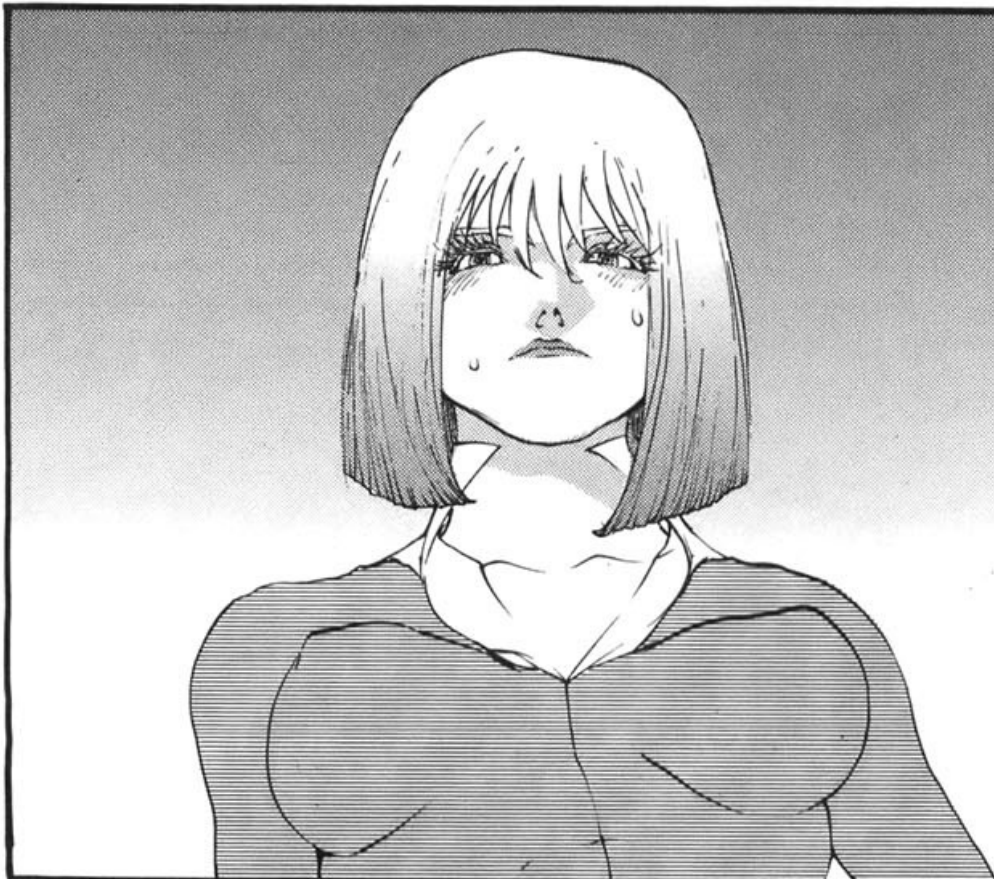
額の金輪が
床に接触
していた

エフ・ワン
F1号と
申します

どうぞ
おみあし
御足を



クララがどうしていいか
わからずにいると

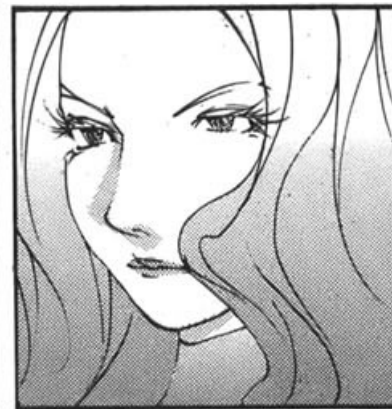




足項アシノカミ札
foot-necking
とってね

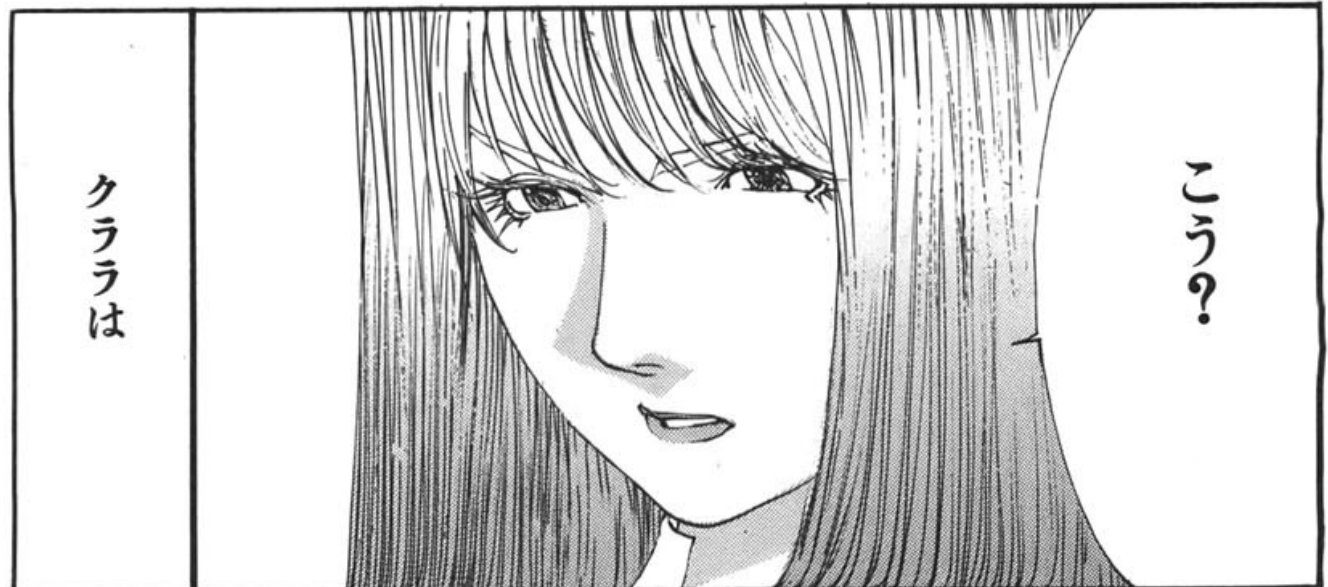
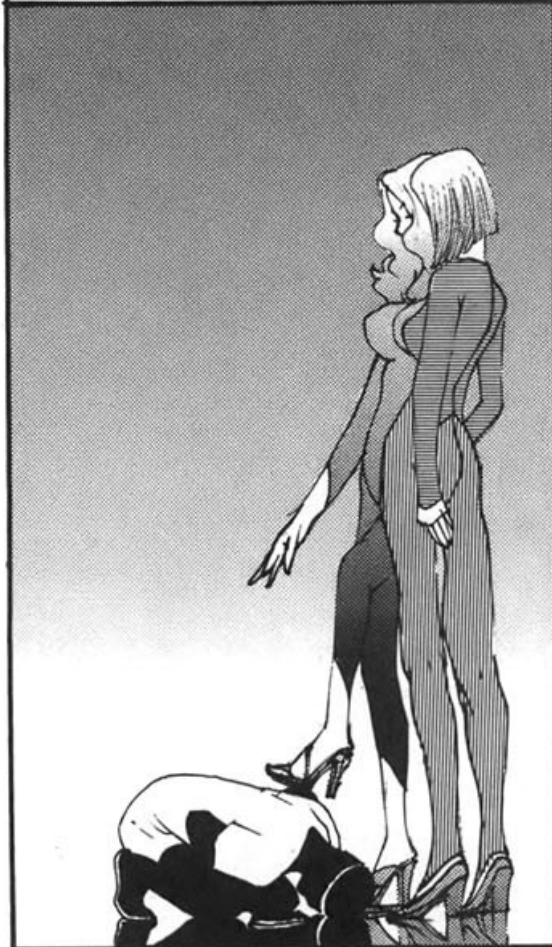


ここを踏んでやるの
強いほど喜ぶのよ



と
ポーリーンが
ささやいて

靴くつを
ちよつと
あげて
彼の項うでを
指した



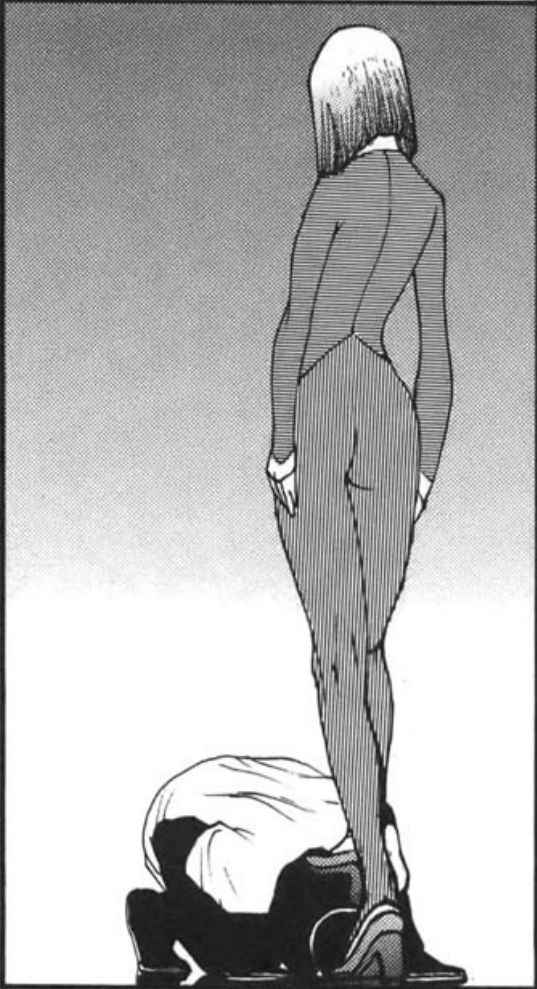
じつ？

クララは

奴隷制当時の
アメリカでも
こんなことは
しなかった
だろうに



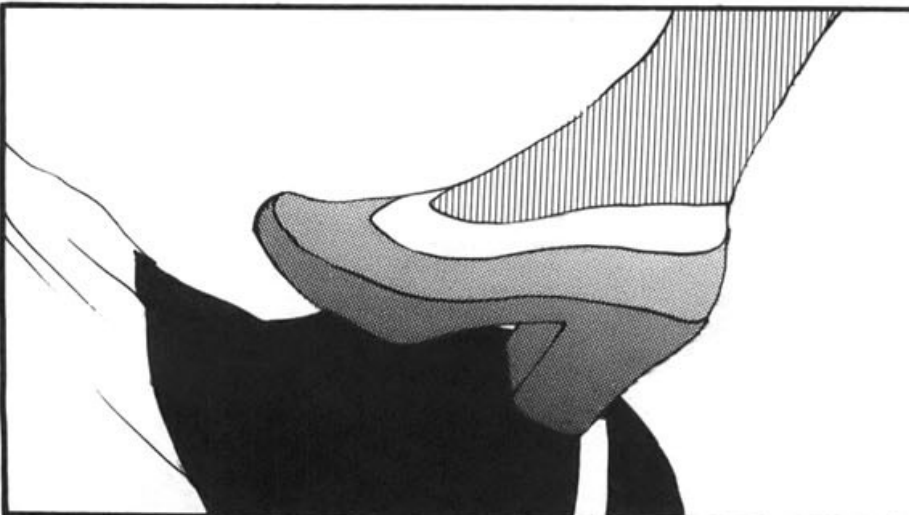
右足を
平伏して
いる
黒奴の
後頭部に
載せ



と
内心
驚きながらも

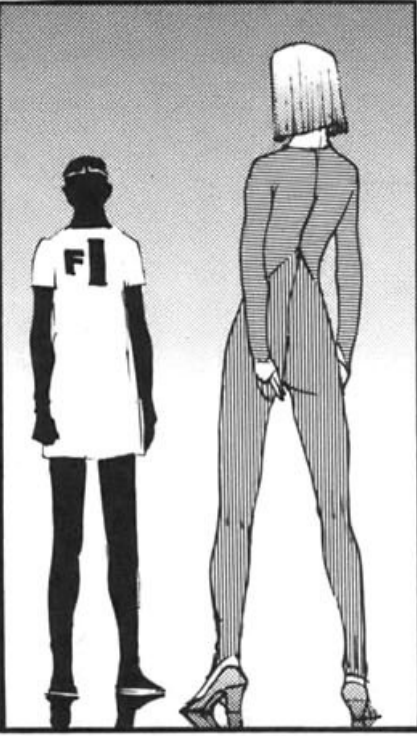


靴の踵を
金輪にかけて
支点にし



爪先の
ほうで
項を
ギユツと
圧迫して
やった

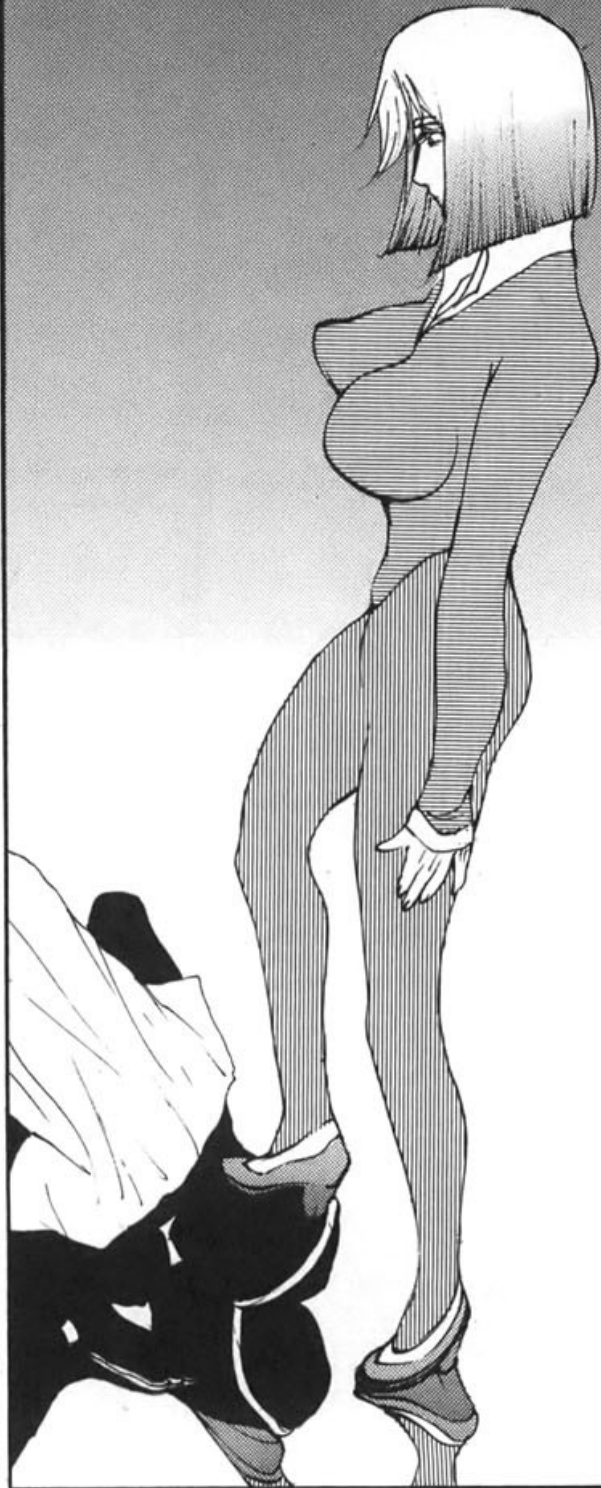
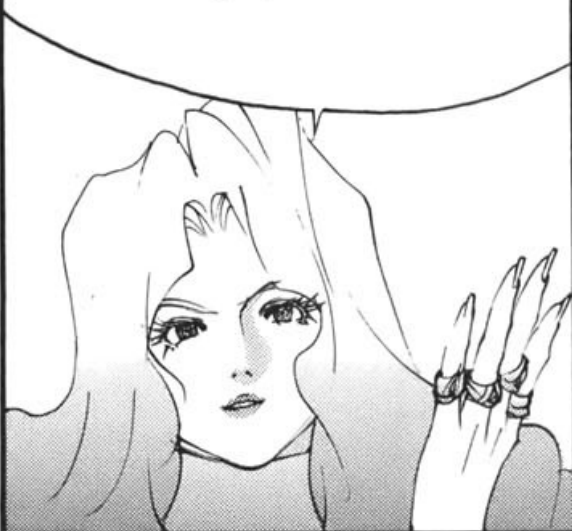
F1号が立ち上った

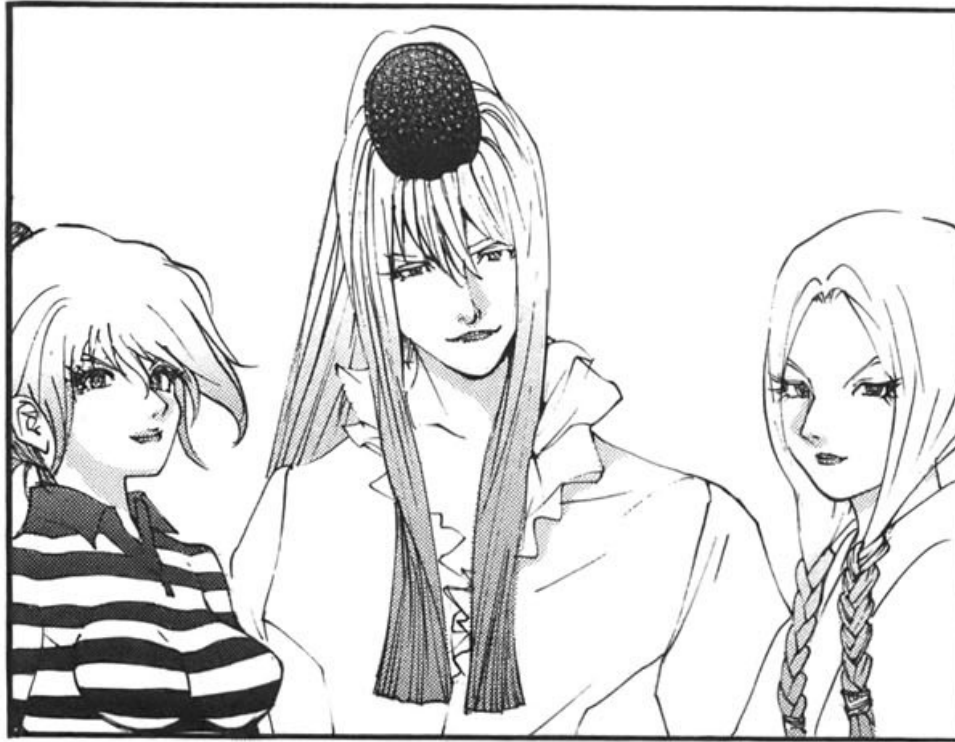


利発そうな
目つきで
キビキビした
動作であった



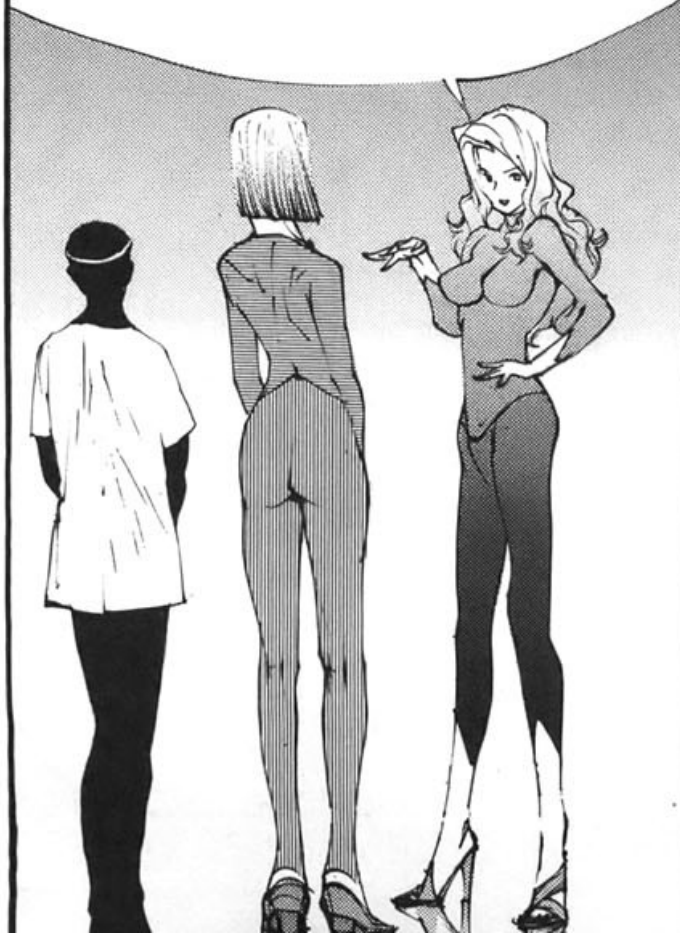
じゃあ
晩餐に
寄り合い
ましよう



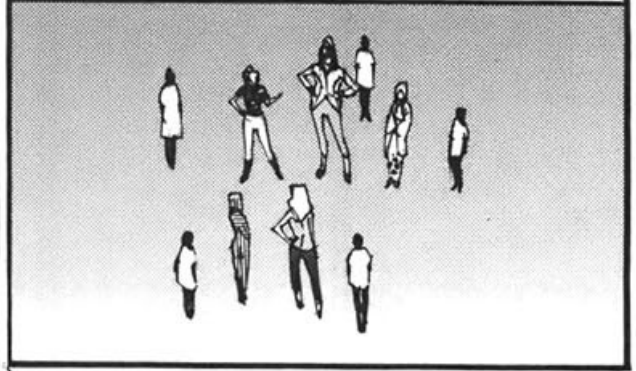


ポーリーン遭難の
救出隊一行は
十二分に目的を達して

あなた
貴女ね
今
この従者が
お部屋に
案内するから
そこで待ってて



ここで
ひとまず
別れる
ことに
なった

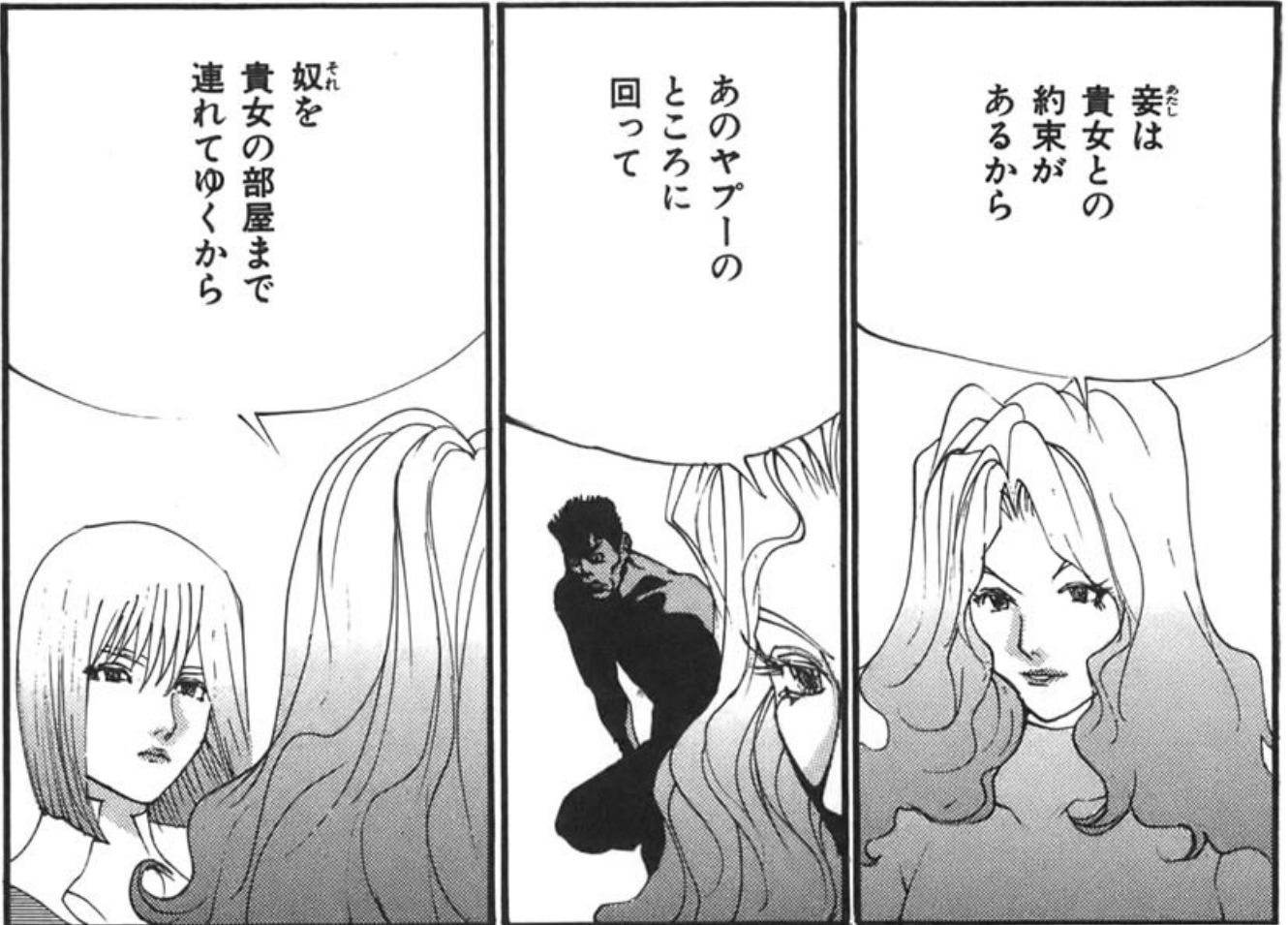


ポーリーンは
クララに向って

妾は
貴女との
約束が
あるから

あのヤプーの
ところに
回って

奴を
貴女の部屋まで
連れてゆくから



そんなに
待たせない
つもりよ

緩解作業を
済ませてから
連れてゆこうとする
彼女の計画を
知っていたら

クララも
同行を
望んだだろうが

この時は
ただ
連れに行くだけの
ように聞いたし



待たせないといわれたので



ええ

麟^{りん}

瀬^{みさ}……



いわれるとおりに
するしかなかった

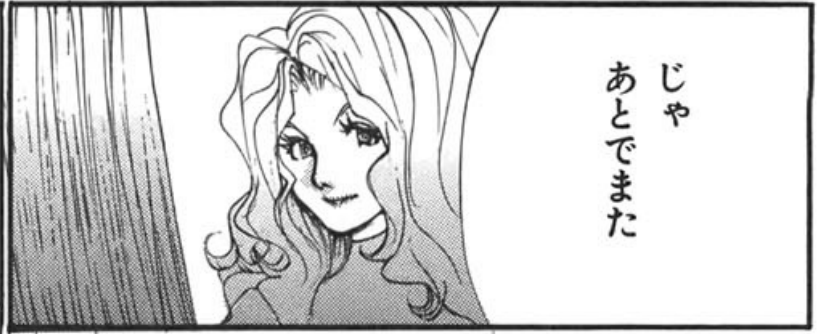


瀬部氏と
いい直しかけて
やめた

あれのこと
お願いするわ



じゃ
あとでまた



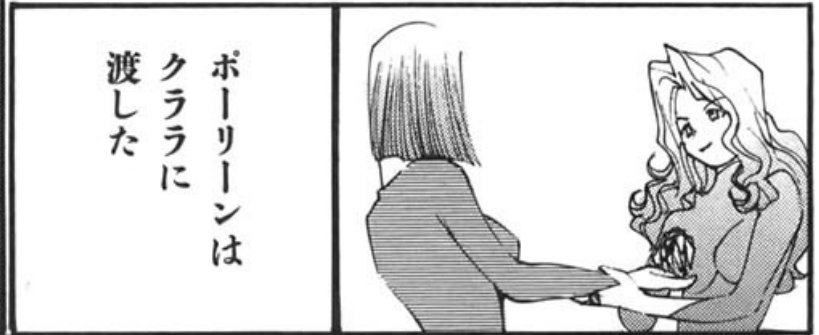
……あ
ちよつと



急いで
左腕から
腕送話器を
はずすと



ポーリーンは
クララに
渡した



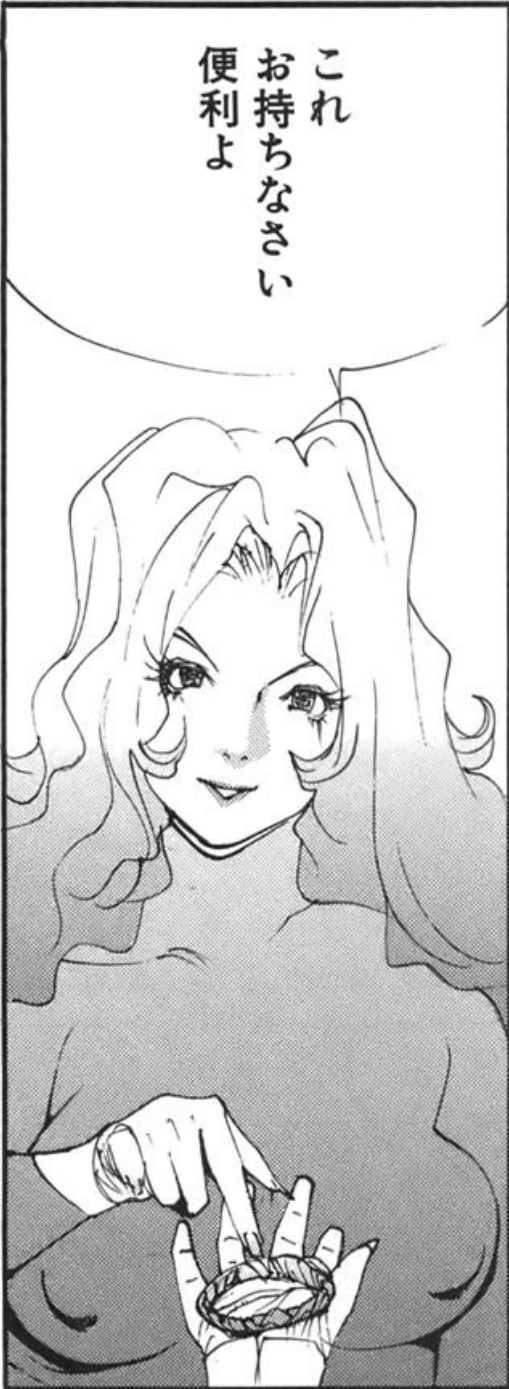
いいの？
あなた
貴女は？



別の
部屋に行けば
あるの



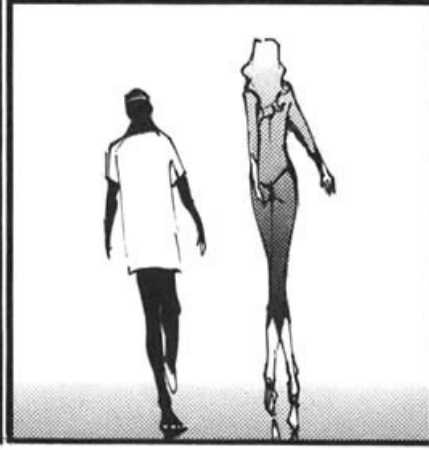
これ
お持ちなさい
便利よ



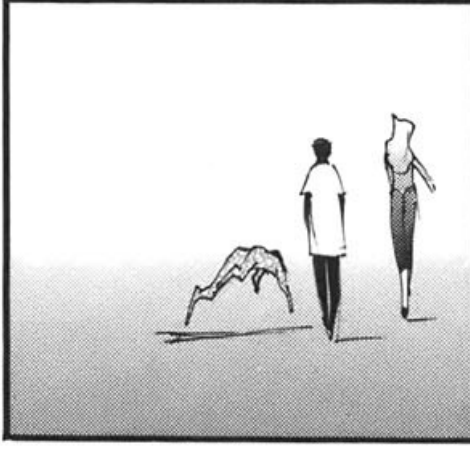
従者も
いるし
心配いらない
わよ



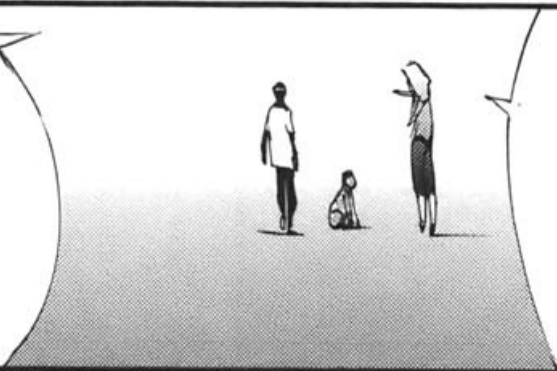
従者一人を
連れて
ポーリーンは
歩み去っていった



ニューマが
続いて駆け出し
追い抜くのが
見えだが
それを彼女が
呼び掛けて

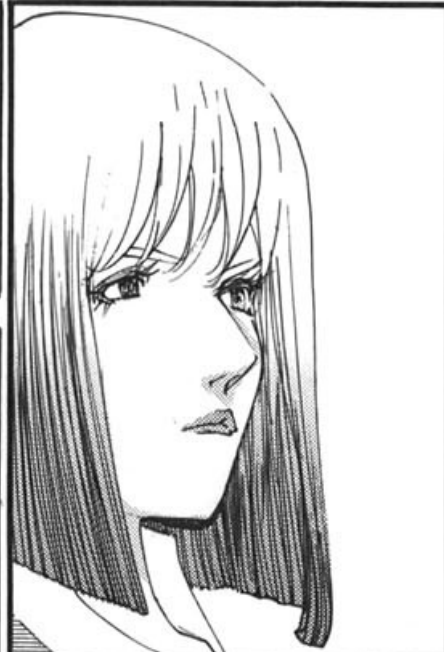


ニューマ
お前は部屋に
お帰り

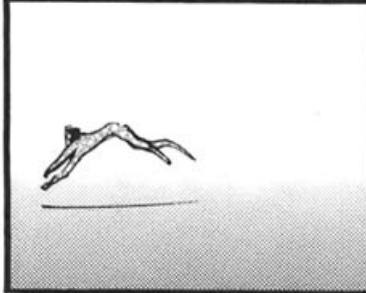


また
悪戯わるさされちゃ
たまらないから

という声が
聞えてきた



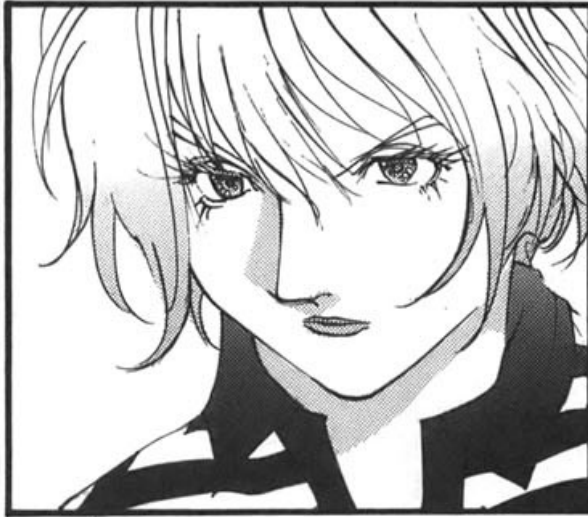
犬は
軽快に走って
姿を消した



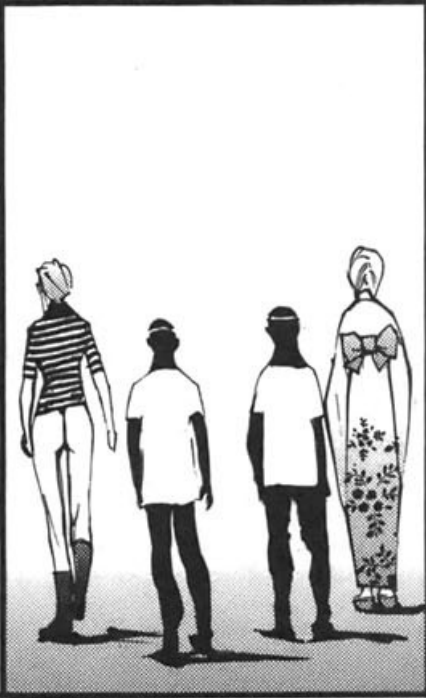
その程度には
人語を
解するのだ



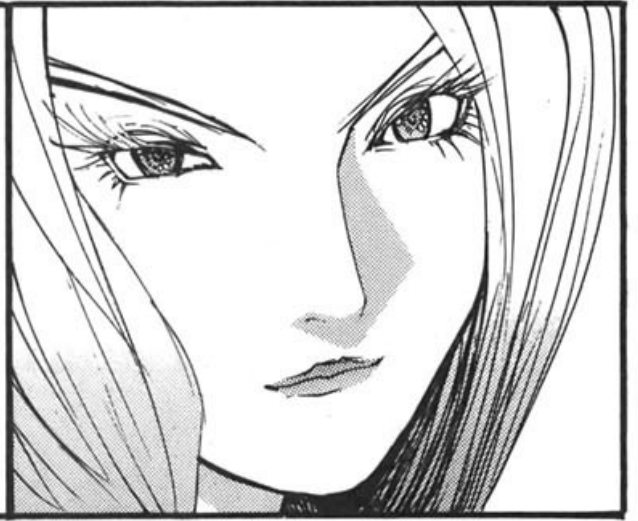
ドリスや



次々に
去っていった

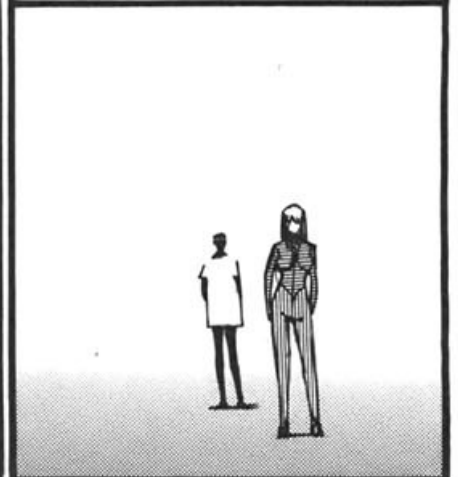
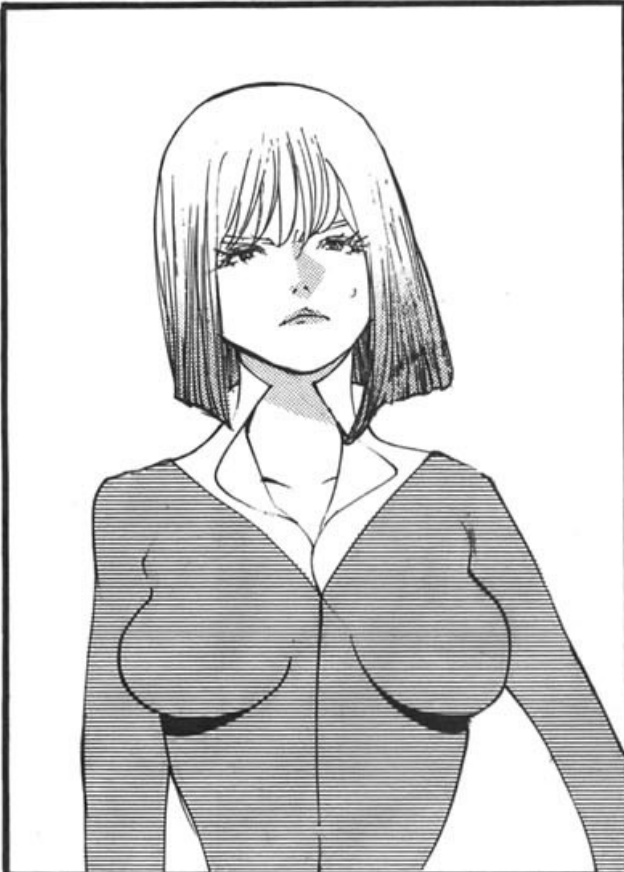


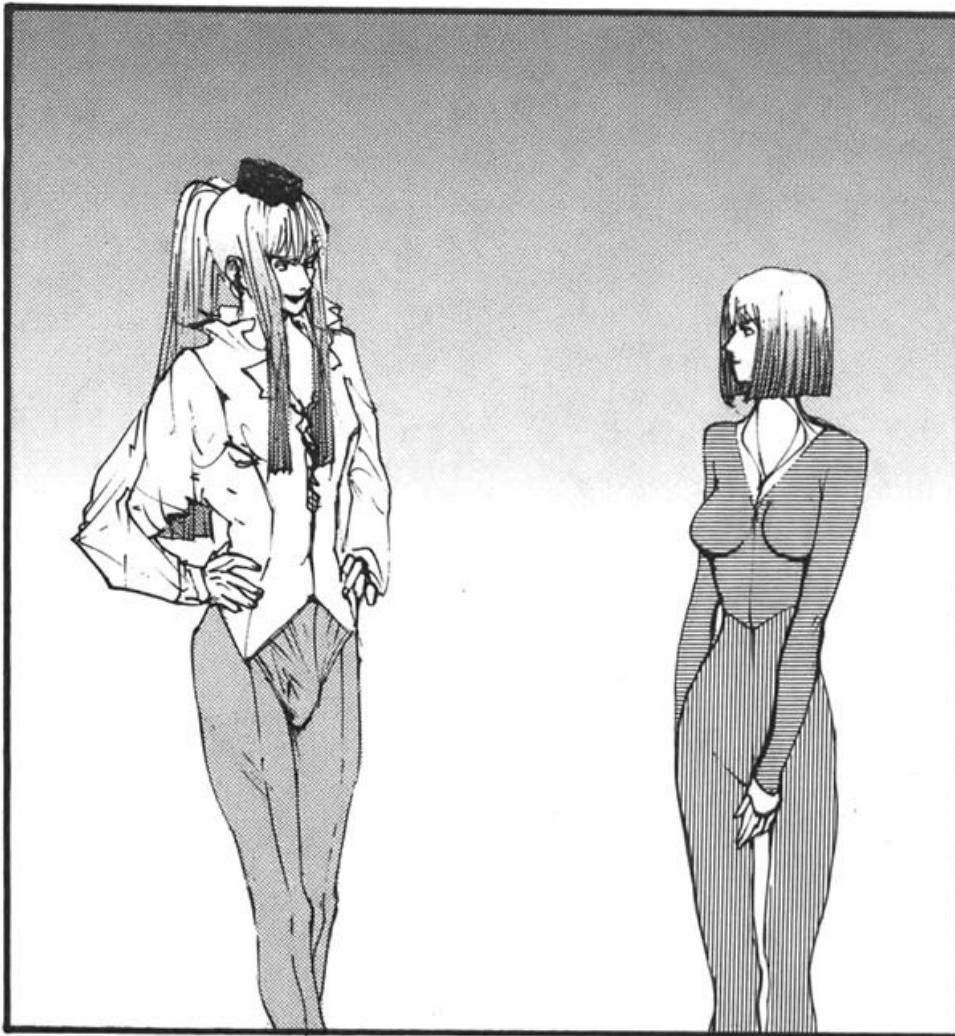
セシルも



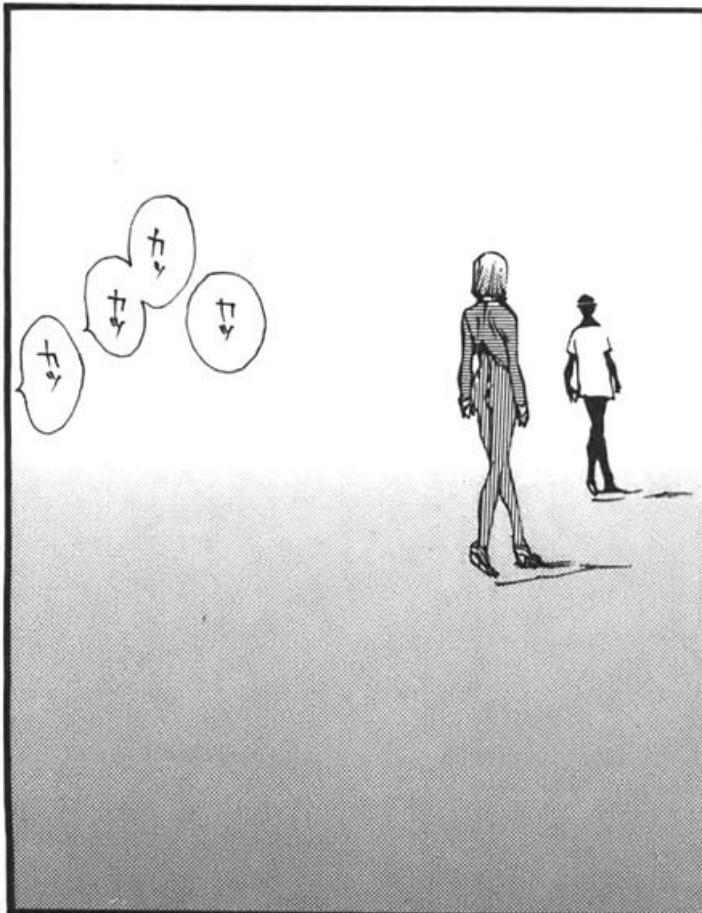
クララは
少々
心細く
なったが

胸を張り



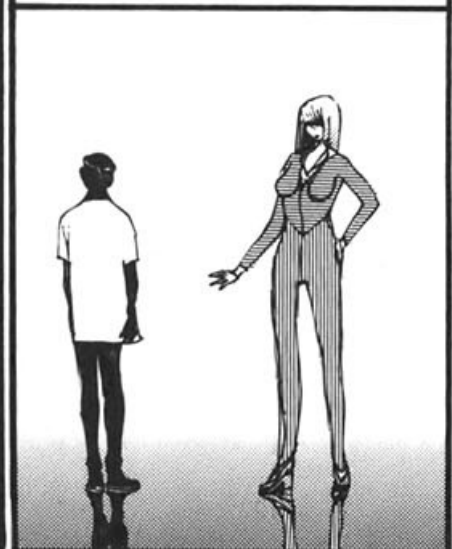


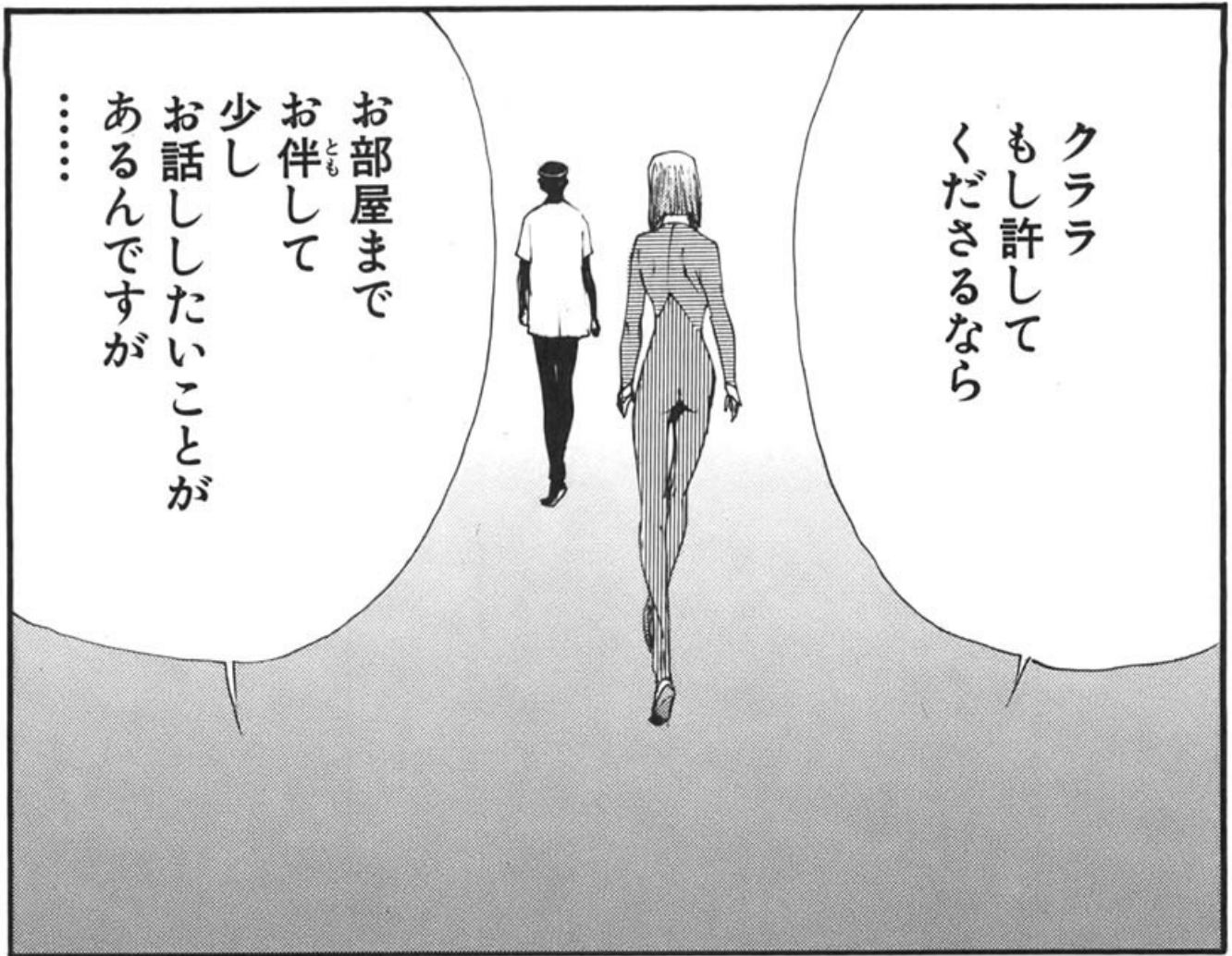
残っていた
ウイリアム・ドレイパーに
挨拶を済ませ



少し行くと後ろから足音がして

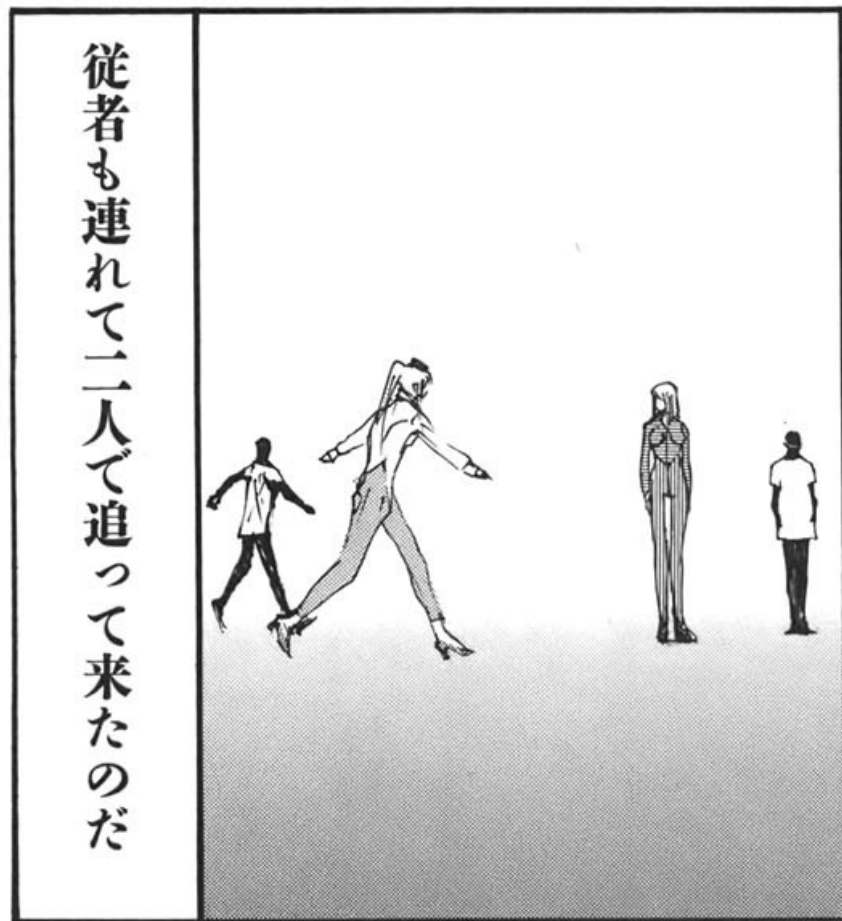
F1号に
案内を
命じた





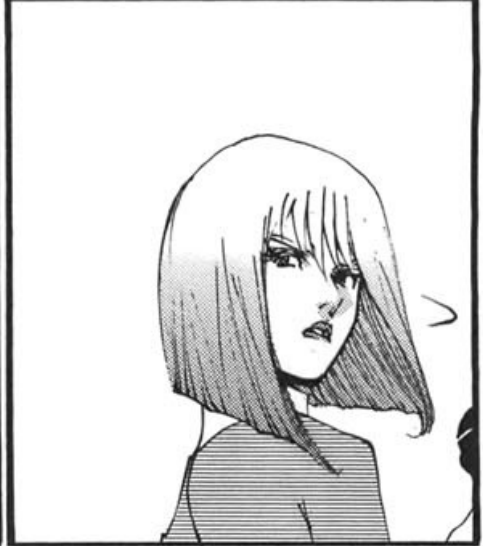
クララ
もし許して
くださるなら

お部屋まで
お伴ともして
少し
お話ししたいことが
あるんですが
……



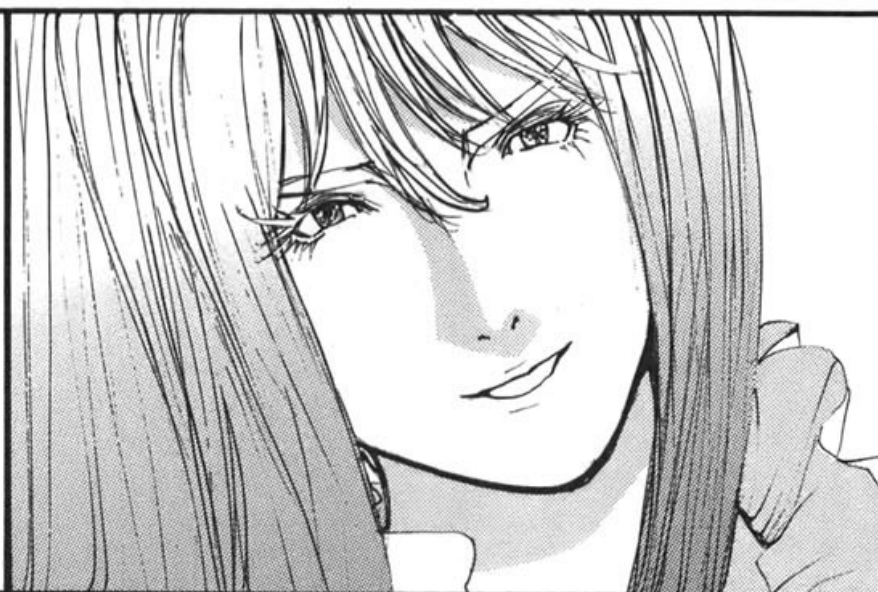
従者も連れて二人で追って来たのだ

という
ウイリアムの
声が
聞えた





出がけに
遊んでいた
巨大蜘蛛の
生餌が
中途だったことを
すっかり忘れて
いるらしい



よほど
クララのことを
気にしているの
だろう



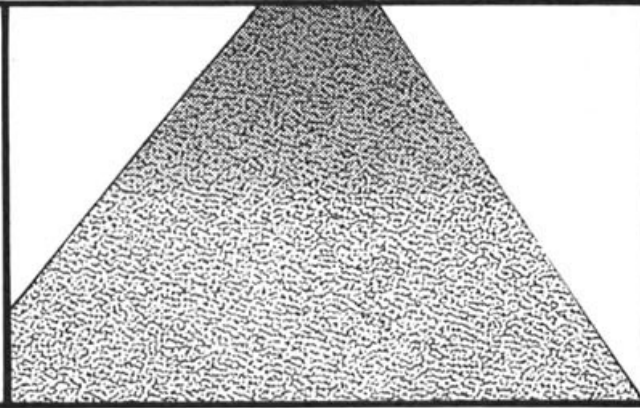
どうぞ
こちらから
お願いしたい
くらいよ

エレベーターで
だいぶ上った



開閉機が
開くと

立派な
廊下がある



昇降も
開閉も
自動的だが
光電管などの
機械的な
仕掛ではない

矮人が隠れて
操纵している
一種の有魂装置
ソウルド・マシ
ンだった



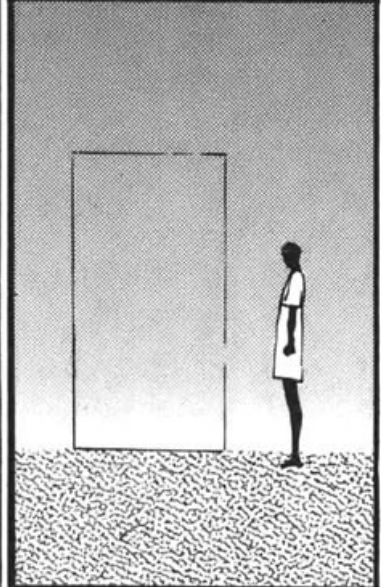
絨毯を踏んで
ある私室の前まで
来たところで



F1号が
立ち
止った

ウィリアム
が
いった

さあ
扉魂ドアソウルに
新しい主人ミストレスの声を
聞かせるのです

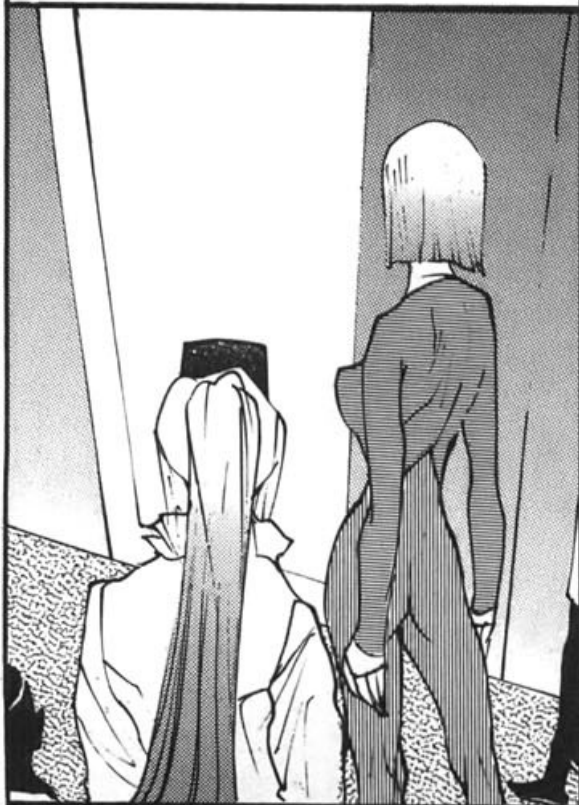


言下
に扉ドアが
開いた

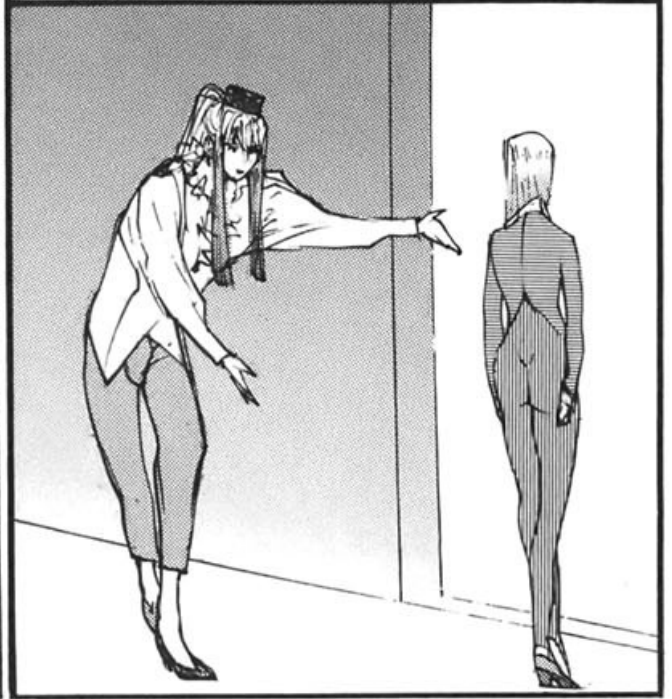
「開けよ」
と
お命じなさい

オーファン
開けよ

クララは
そのとおり
いった



ウィリアム
は
彼女に
先を
譲り
ながら



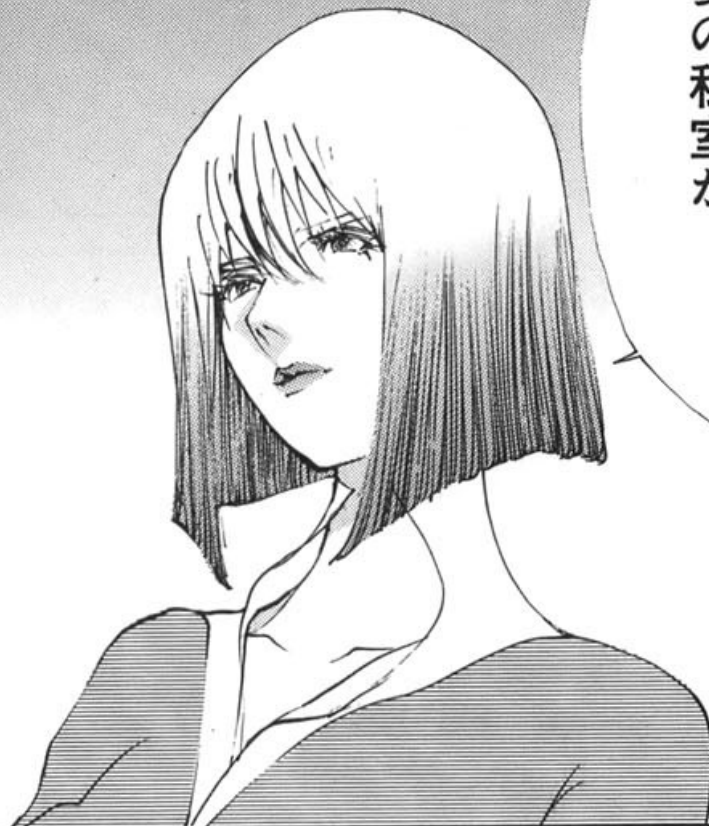
これで
脳波型
声波型を
覚えましたから

これからは
貴女が近づけば
ひとりでも
開きます



他の人の声では
開きませんが
貴女の命令なら
開くわけです

これが
あたし
妾の私室か



クララは心を落ち着けて見回した

奥に
寢室に続く
扉を持つ
二間続き

こちらが
応接間だ

絨毯も
セツトも
豪奢なもので

立派な
ソファと
肘掛椅子が
あり

その間に
素裸の男が
ひざまずいていた

普通人の
大きさの
肉足台ヤプー
なのだ

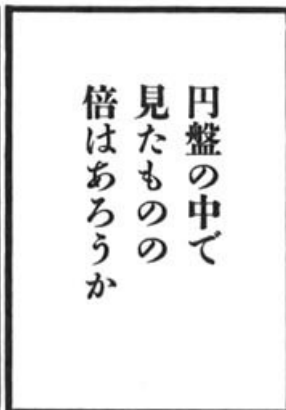
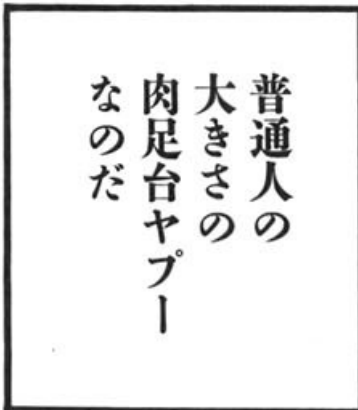
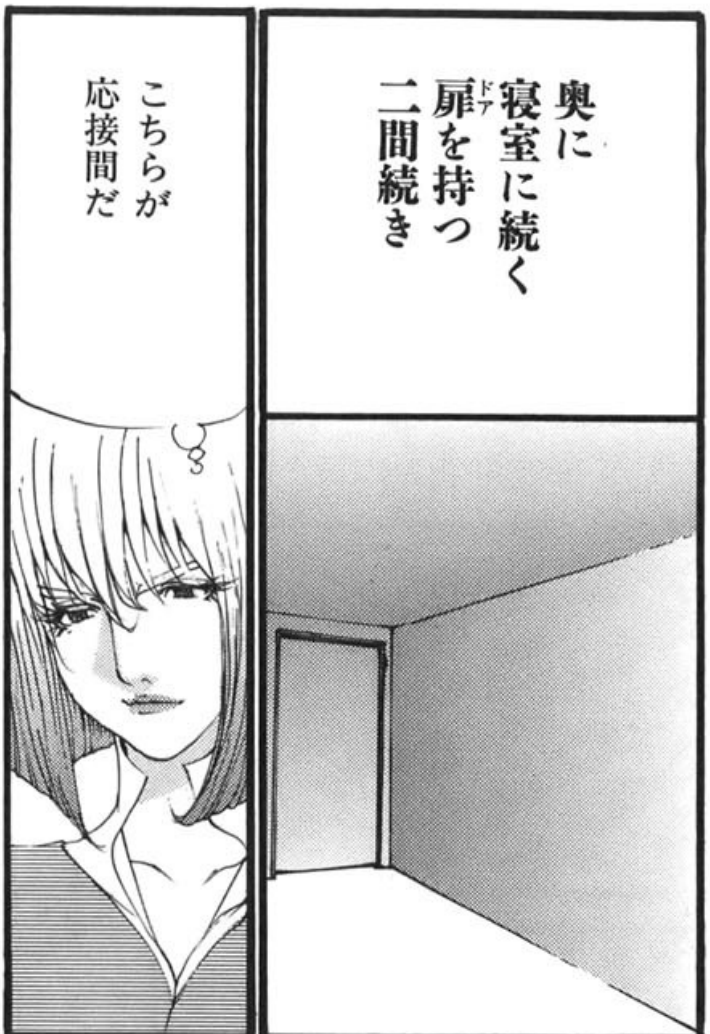
円盤の中で
見たものの
倍はあろうか

と
思っ
て

その背中に
大きな傷
……

と
悟
つ
た

ハッ



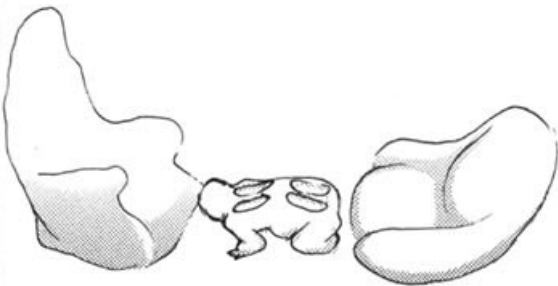
傷と見たのは
足型に刻った
凹みで



二つずつ
方向が逆に
計四つ
ついていた



ソファの客と
それに向い合った
肘掛椅子の
ホステス
主人役とが
両方から
いっしょに
足を
載せられるように
なっているのだ



外にも



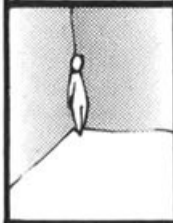
二分の一
くらいに
縮小された



ヤプーが
室の四隅に



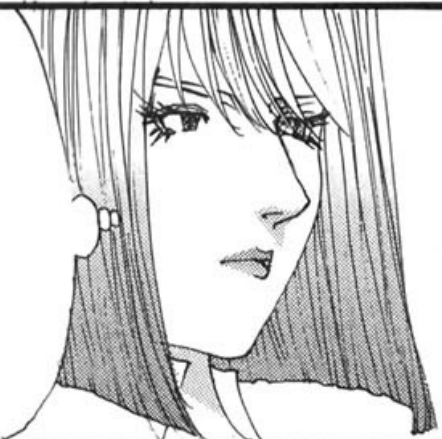
立っていた



クララは
ホステス用の
肘掛椅子に
掛けながら
従者に向って



何に
使うもの
だろうか？



名前は？

組頭以外は
名を知る
必要は
ないんですよ

名前……

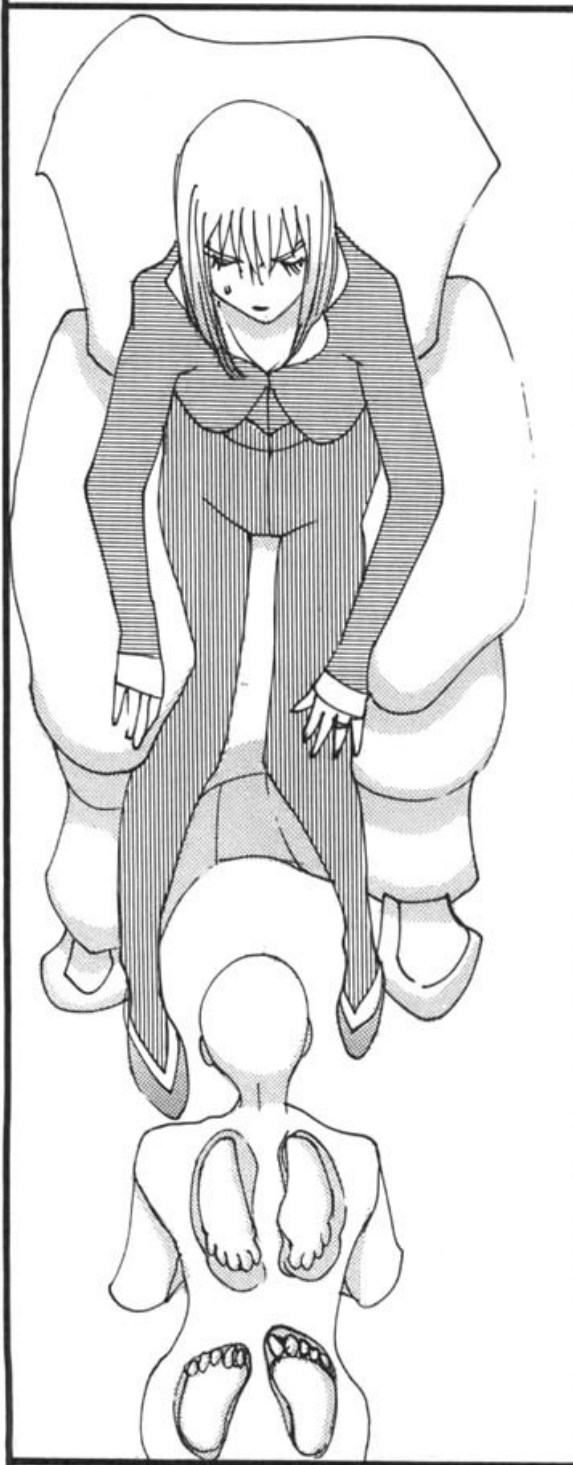
？
F組頭は
ジョウで
ございますが
……

私奴は
ただ
F1号と
お呼び下さい
まし

僕も
この別荘に
もう何日も
泊って

その間
ずっと
あのM9号を
使ってます
けど

クララは
肉足台の
凹みに
足を置いて
みたくなり



靴を
脱ごうとしたが



この男が
自分の
ポケットから
パイプを
取り出すだけの
作業さえ



従者に
やらせるのを
見て



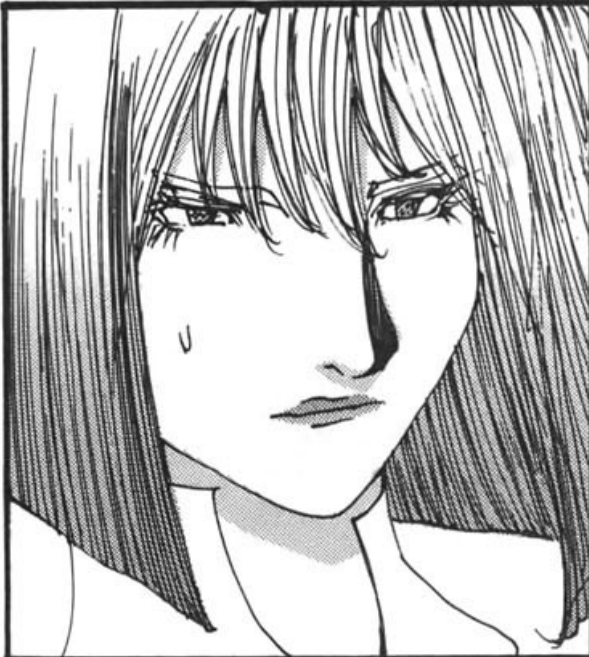
内心
あきれると
同時に



従者の
使い方を
実物教育
されたような
気もし



自分で
靴を脱ぐ動作を
中止した



ウイリアムは
煙を吐きながら

クララ
ちよつと
お話したいことが
あるんですが



貴女まだ
奥の部屋も
見てらっしやら
ない

……
着替えや
化粧も
ありましようし

僕
ここで待たせて
もらいますから

どうぞ
先に奥に
いらしって
下さい

奥にも部屋があるのに先ほどから
好奇心を起していたクララは
それをよい機会しおにして

と
立ち上ろうと
したが

じゃあ
……

ウイリアムの声が
その動作をさえぎった

オートチェア
自動椅子
です

右の
ペダルを
踏みながら
行先を
おっしゃれば
いいんですよ

左を踏めば
止ります

来客用だから
読心能は
ないが……

そっとういながら

いつの間にか
ソファの
横に来ていた

二分の一縮小ヤプーの
顔に向けて
パイプの灰を落し

ついでに

プツ

と
唾を吐いた

クララは

ハッ

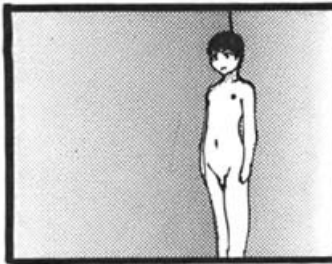
としたが

このヤブーは
灰と唾が
顔面に
かかろうとする
一瞬

パクリと
口を開いて
含んでしまった

そして
用済みの
合図なのか
パイプで頭を
コツンと
たたかれると





これは
スビツーン
肉痰壺
という
一種の
ラヴァータ
不浄畜で

尻から
コードを
引きつつ
部屋のスみに
戻って行った

落ちかかる
小さい物体を



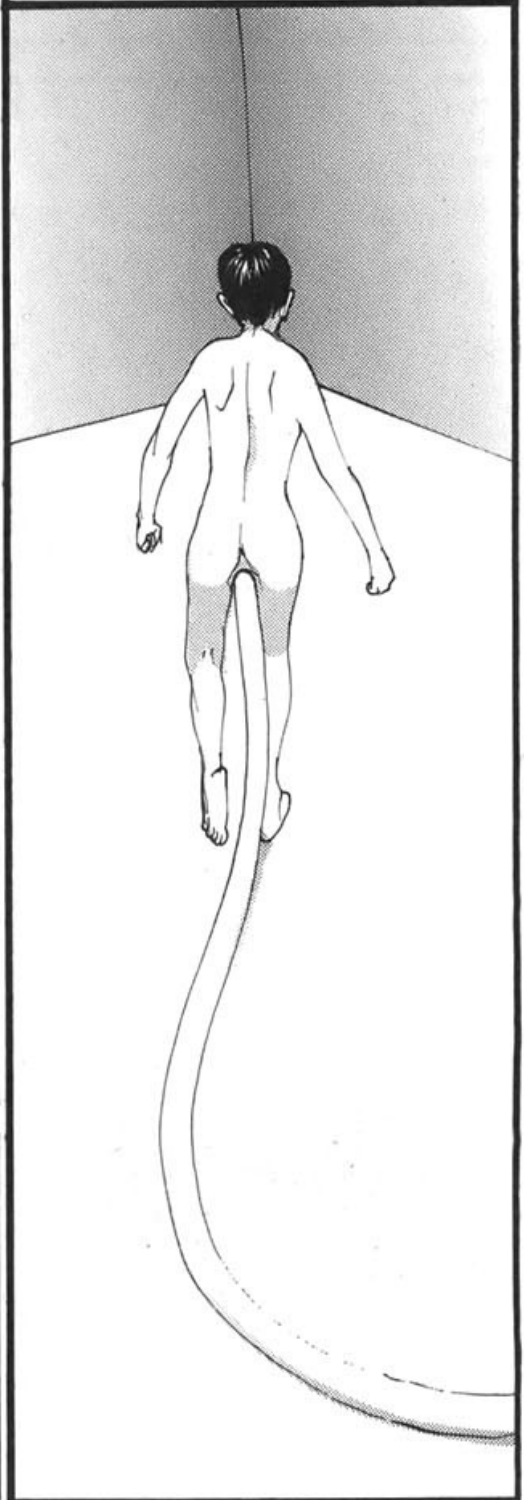
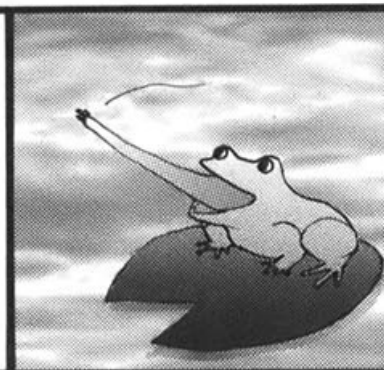
素早く
口中に
含むことを
専門に
仕込まれて
いるのだ

これを
使用する
場合
あらかじめ
口を
開かせたり
する必要はない



いきなり
顔の近くで
唾を
吐きかけても
必ず
口中に収める
素早い動作は

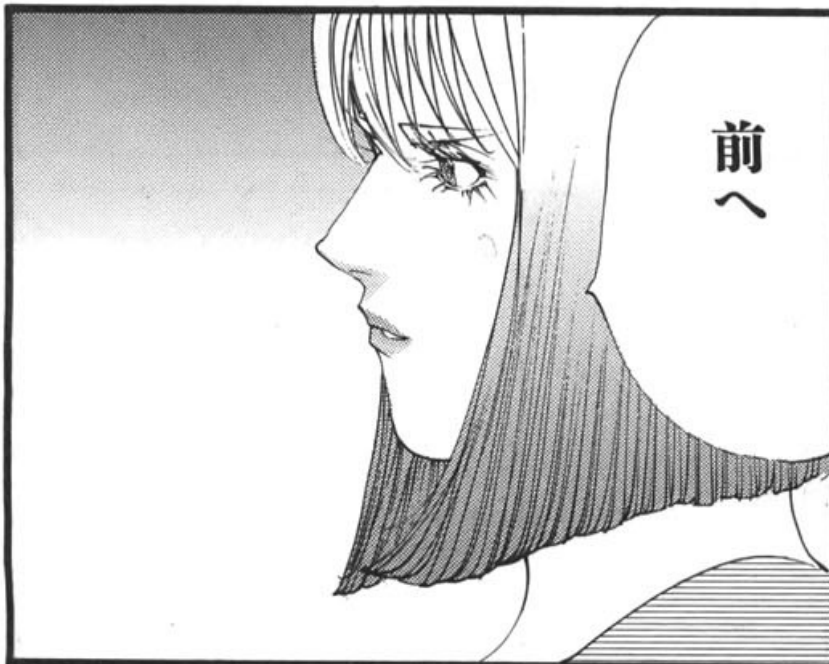
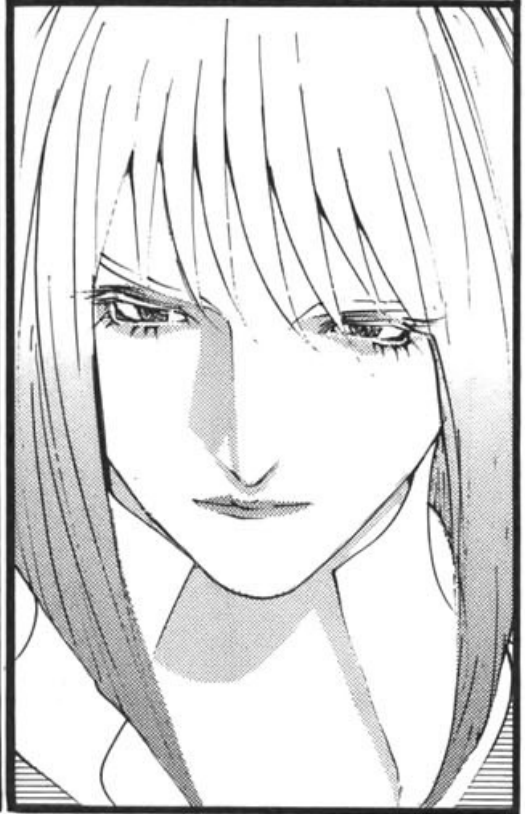
蛙が
蠅を呑む時の
ように
目にもとまらぬ
早業なのである





膝^{ひざ}を曲げた時両足が載るような位置にペダルがあるので

しかし
クララは
いつまでも
そんなものを
見ていたわけ
ではない



前へ

その右を
ぐっと
踏みながら
命じた



オートナエア
自動椅子は
矮人登場以前からの
伝統的な
生態可動家具で



貴族の私室で
愛用される



外見は
革張りの
肘掛椅子だが



小型の
自動車に
なっており



しかも
腰の下に
天然スプリング
としてのヤプーが
はいつていて



操縦者を
兼ねているので
あった



両肘の
ところに
宝石よりの
装飾があるのが
眼鏡で



屈折鏡の作用で
ヤプーには
前方が見える



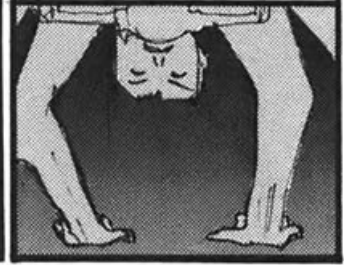
※
四肢を
突っ張って
背中て
使用者の尻を
ささえねば
ならないから



腕や手の自由は
利かないが

※
ただし後肢は膝から下が無い

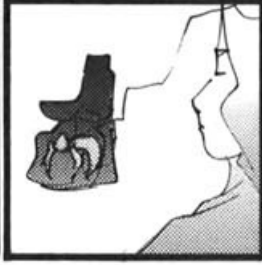
十本の指と
顎あごに固定した
槓レバ桿ばとして



椅子を
自在に
操縦する



読心家具テレパスの
場合なら



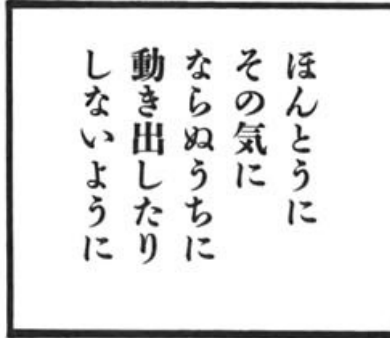
使用者は
まったく体を
動かさずに
部屋中
どこへでも
行けるのである



もつとも
ふと心に
思った
だけで



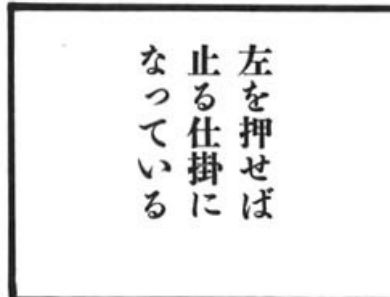
ほんとうに
その気に
ならぬうちに
動き出したり
しないように



使用者が
右のペダルを
下に押し
初めて始動オシワケし



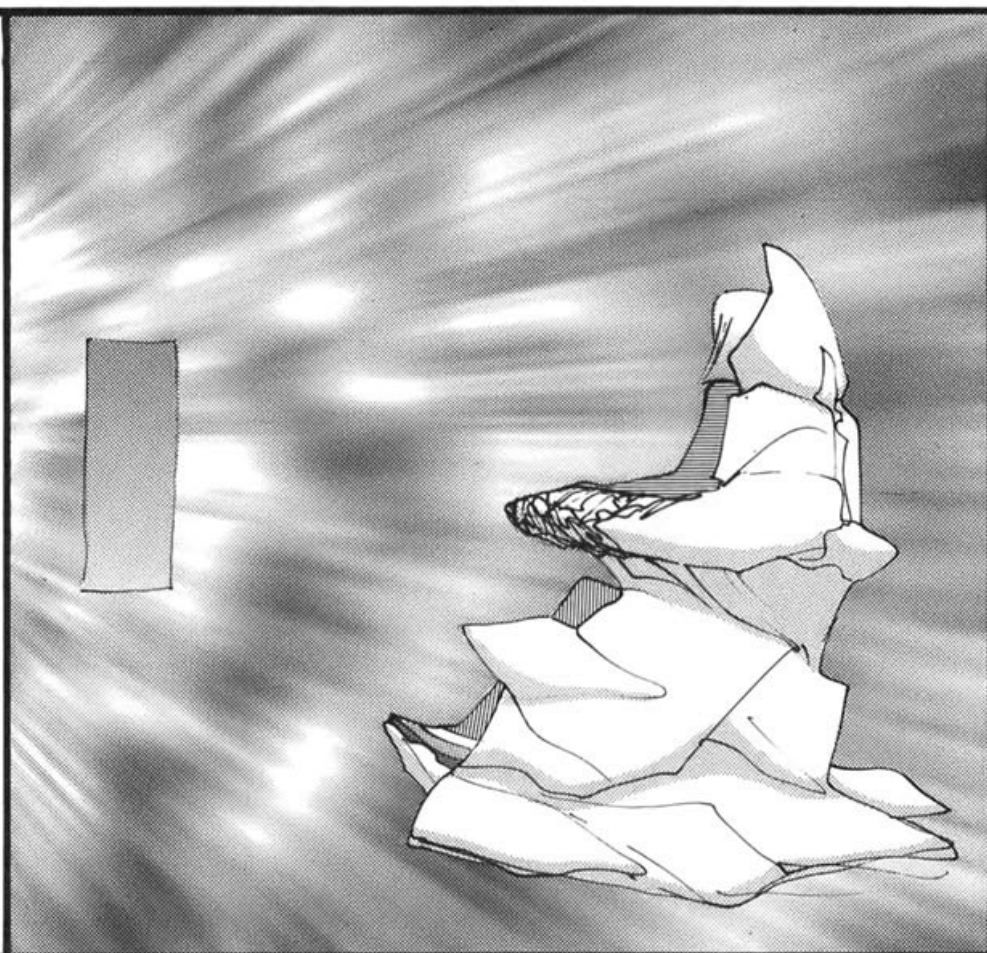
左を押せば
止る仕掛に
なっている



クララの
自動椅子は

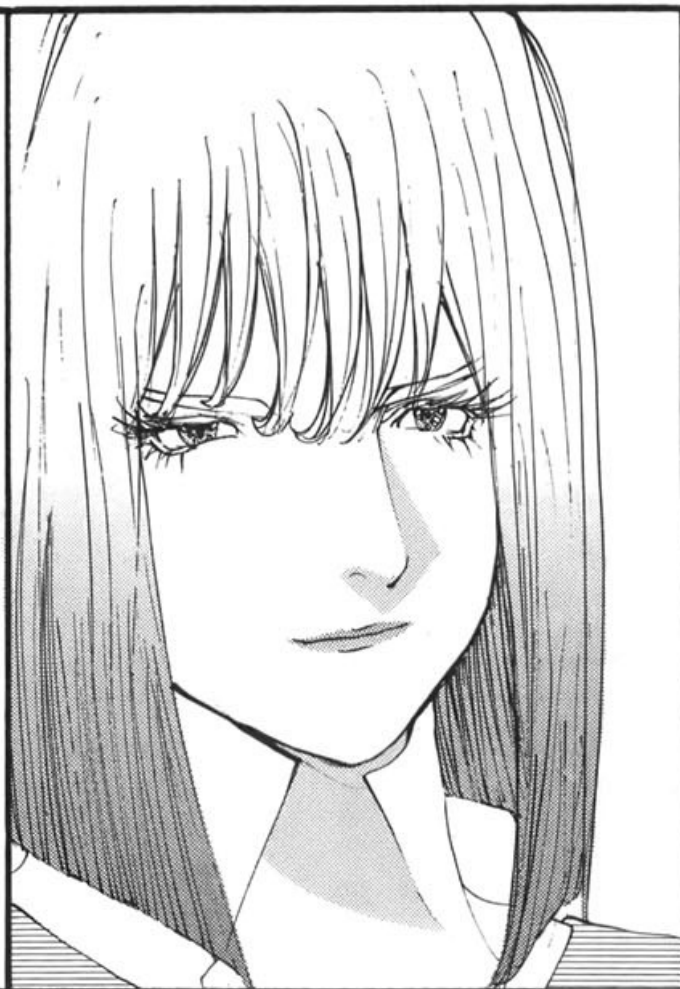
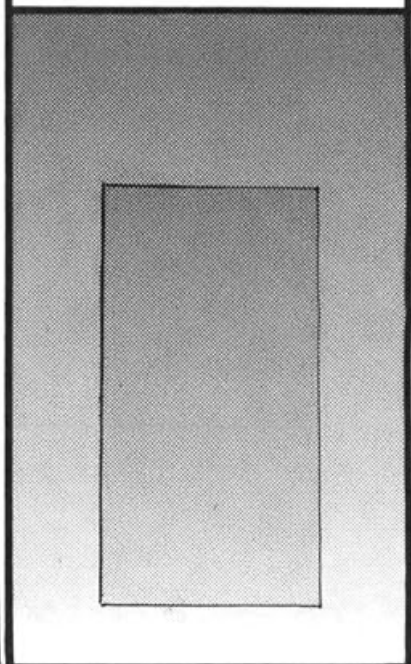


命令に応じて



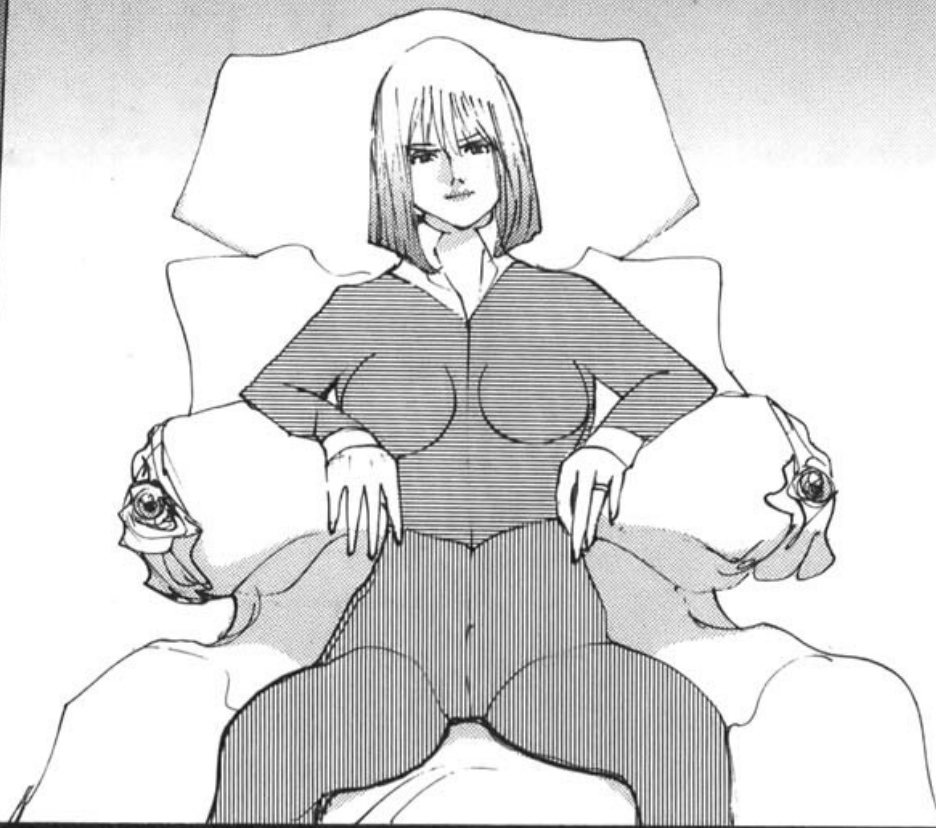
奥に続く扉^{ドア}のほうへ進み始めた

この扉も

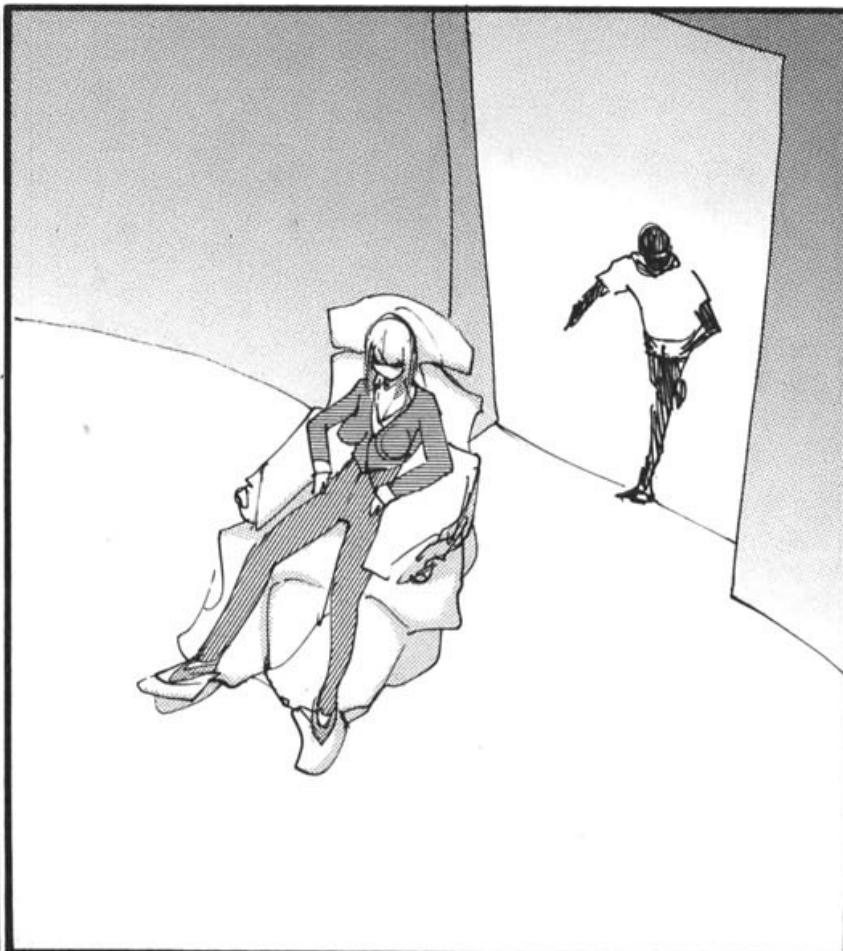


既に彼女の脳波型をしってるのか

椅子の前に音もなく開いた



扉が
閉じた



F1号が続く



クララは
豪華な
寝室の中に
自分を
見いだした

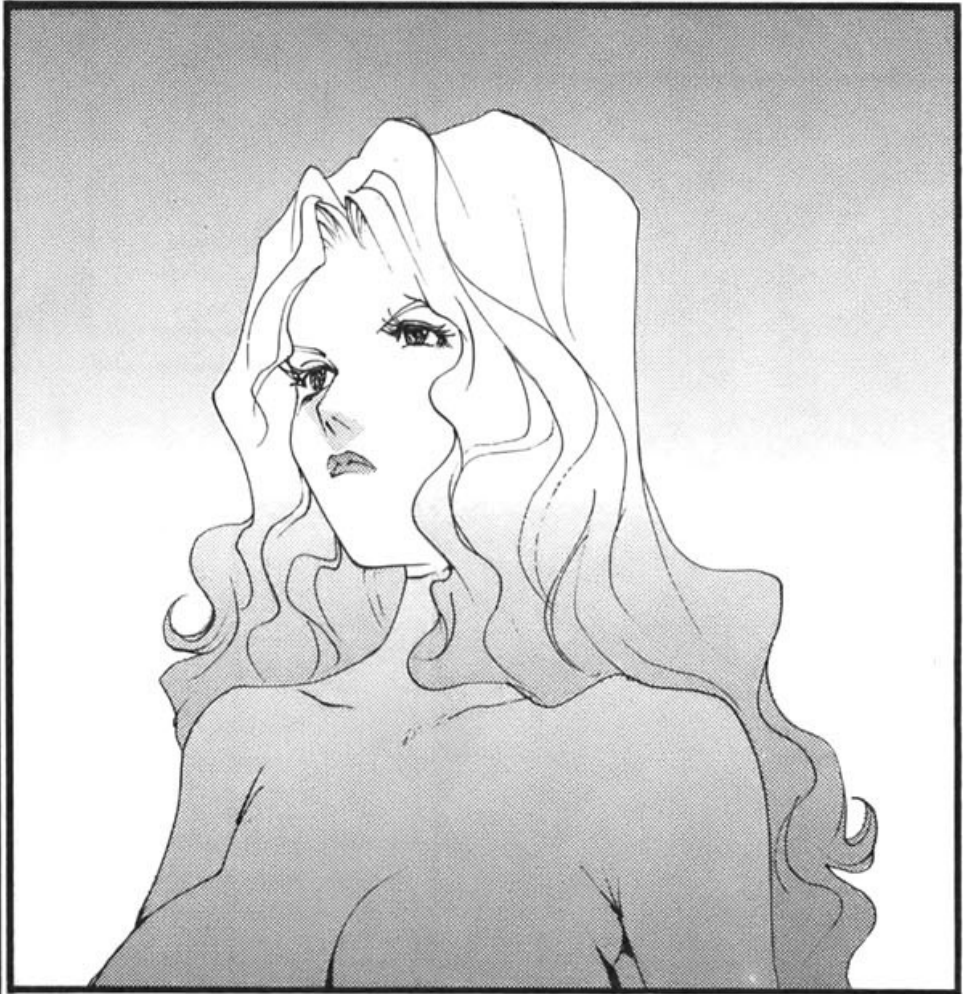


一方
クララと
別れた



ポーリーンは

エレベーターで
降りて行った



フットマン
従者一人を
連れただけで

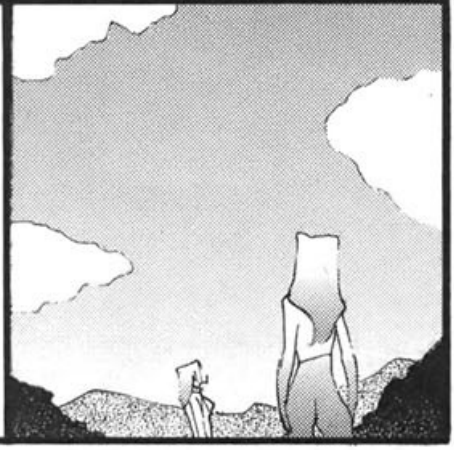


イースの
全版図を
通じ



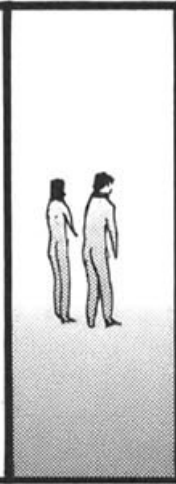
そこへ
緩解作業を
見に行くので
ある

ホワイト・プラネット
白人居住星では
白人は
地上に住み

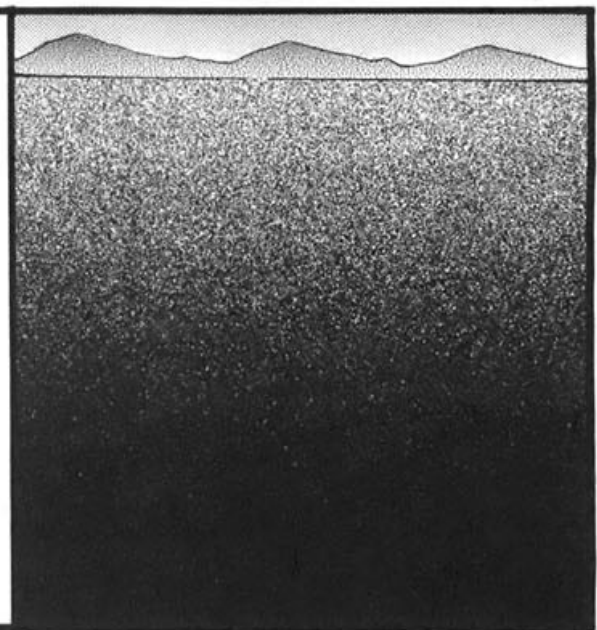


黒奴や

原ヤプーは



地下で暮す



ネアンデルタールを
捕獲してきた時にも

獣医に
緩解作業させる
のだが

ポーリーンは
平生緩解されて
元気になって
地上に送られて来た
奴しか
用がないので

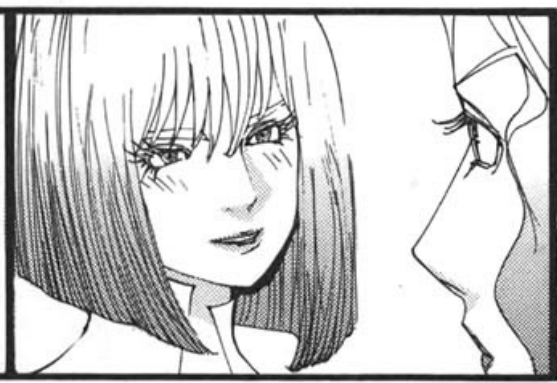


今まで
緩解作業
そのものを
見たことは
ない

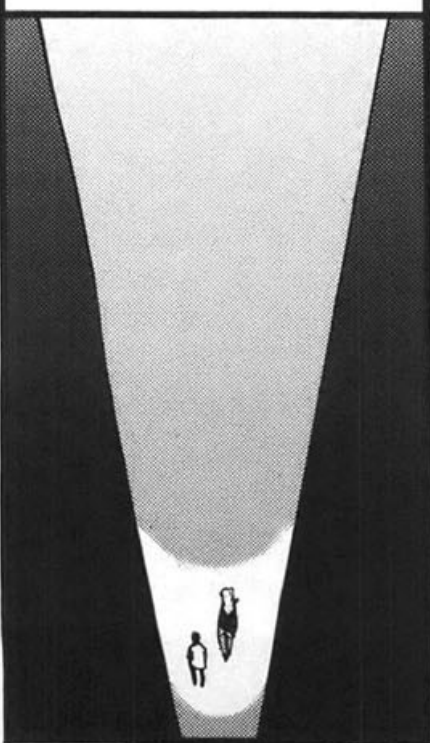
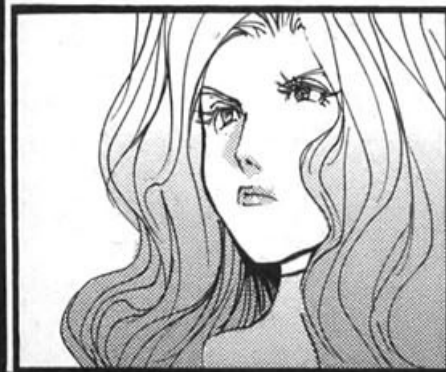


かくて
珍しくも

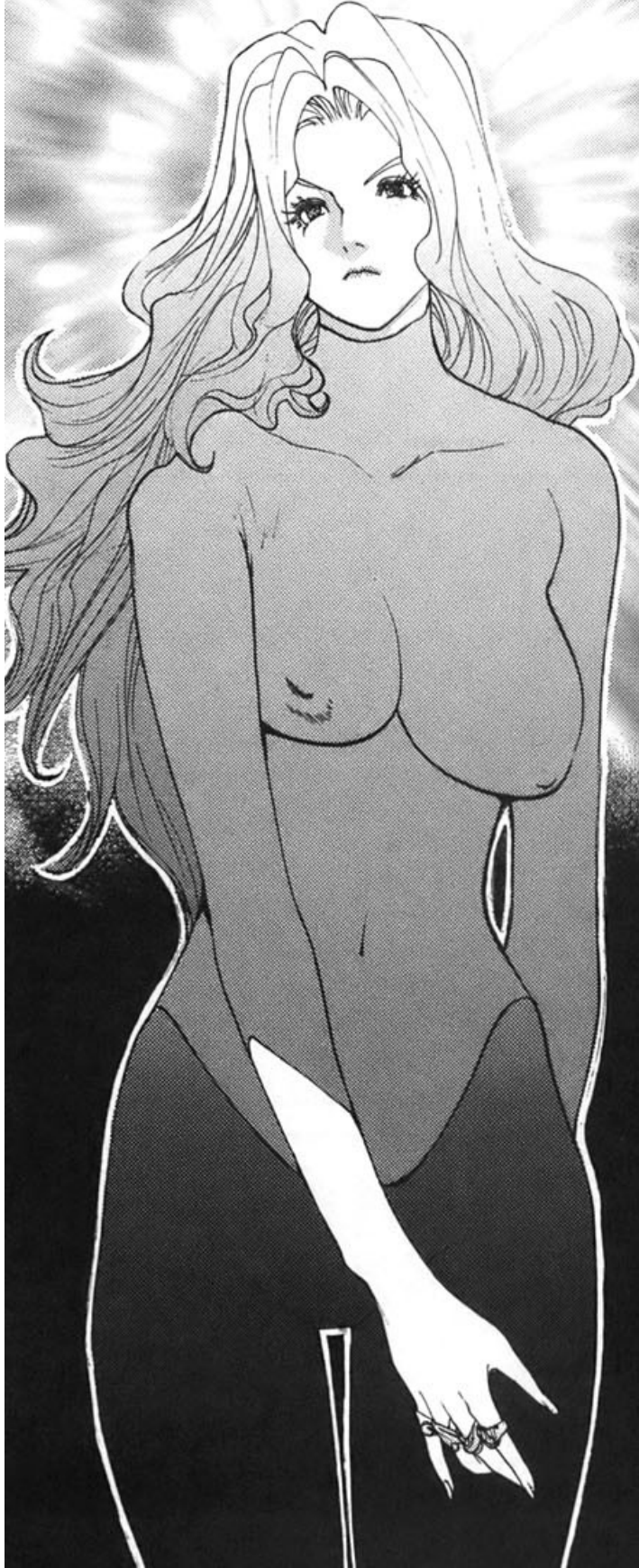
しかし
今日は
クララとの
約束もあり



責任上
自分で
緩解作業に
立ち会うことに
したのだ



若奥様の



第十一章 別荘到着第一歩 — 第三話 —

地階深層
御来臨と
なつたわけ
である



獣医ジムは
黒奴である



手が
けがれるから
である
そこで



イースでは
単に
医師といえは
もちろん
白人だが



彼らは
黒奴や
ヤプーの
診察はしない

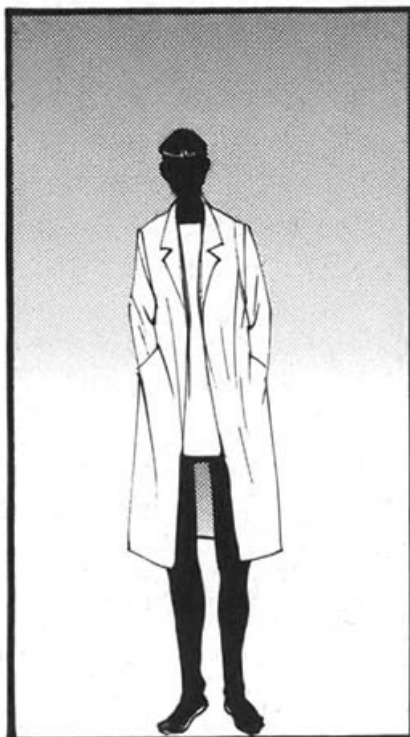
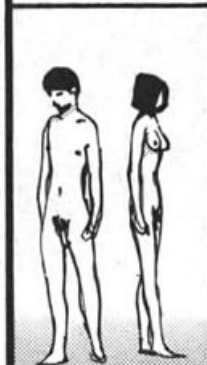
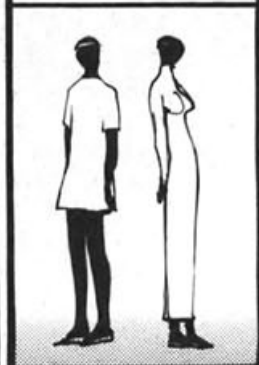


黒奴

ヤプー

ベガサス
天馬

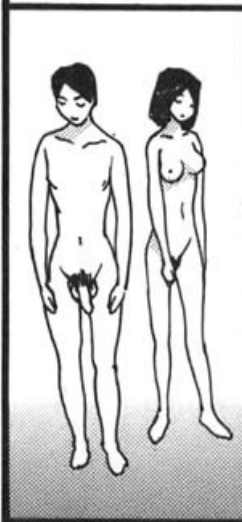
等のためには
黒奴の医者がいた



この獣医も
その一人で



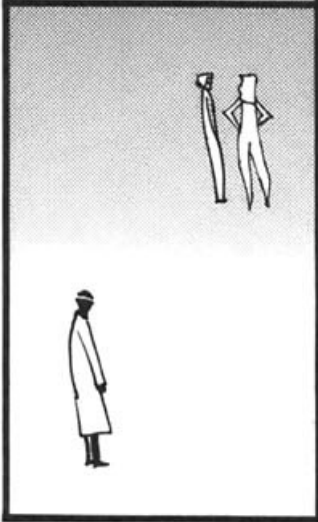
ヤプー専門で
あった



医者とい
っても
黒奴だから



もちろん
奴隷の身分
である



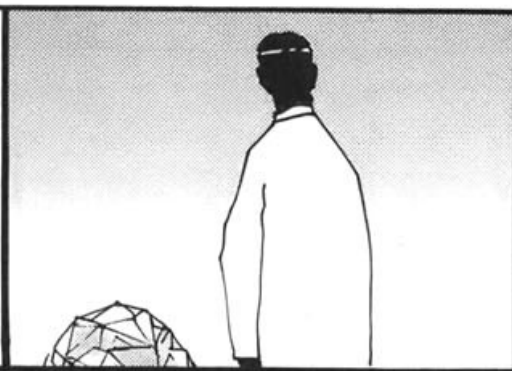
まだ若く
経験も浅い
のだが



寝台に
ヤプーを
寝かせ



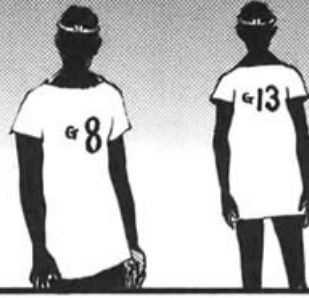
学業成績を
買われて
第二地球別荘の
新築落成とともに
ここに
派遣され



組頭待遇で
別荘内の
数多いヤプーの
健康管理を
命ぜられている



護送の
二船員を
待たせて



ウヘーッ



アンテイドクト
緩解薬を
合成し終り
これからと
いうところへ
ポーリオンが
はいつて来た



白い手術着の
裾^{すそ}を乱しながら
彼は平伏した



看護婦N5号も
それに続いた



ポーリーンは彼の頭を軽く右足で蹴^けって



よし
仕事を
お続け



と
命じた



これは
キツキンク
足蹴礼
といって



足環礼



フット・ホッピング
足項礼より
少し略式の答礼である

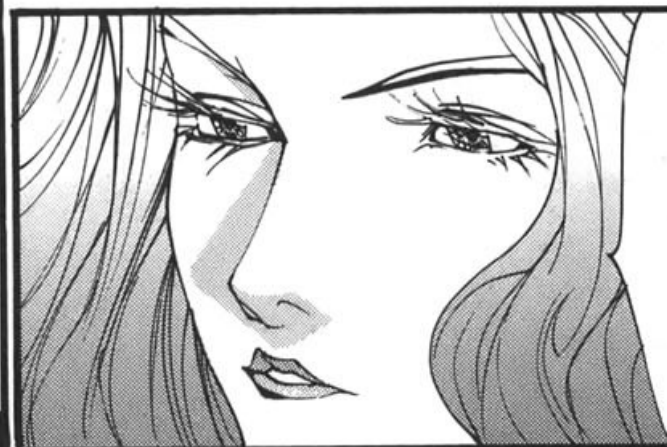
薬は？



でき上った
ところで
ございます
若奥様



早くおし

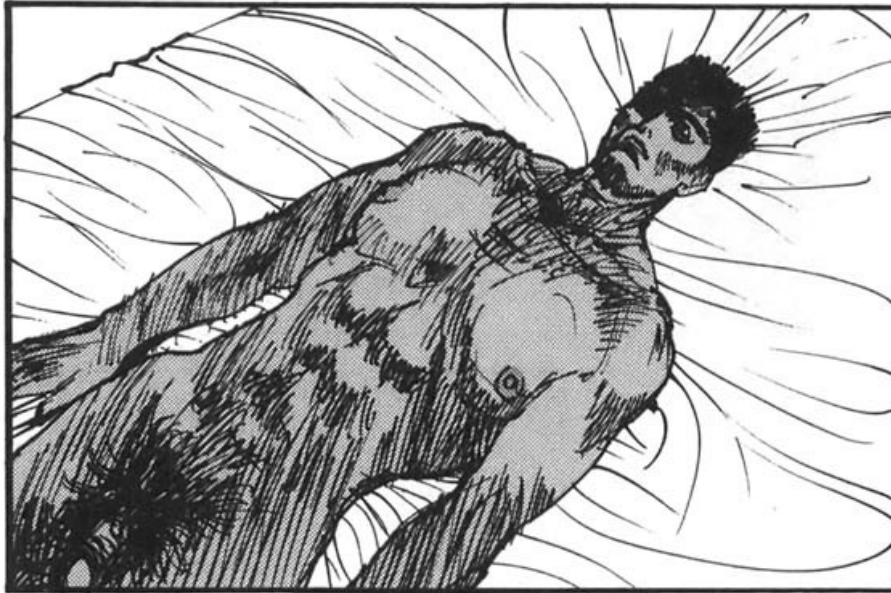


はい
畏まりました

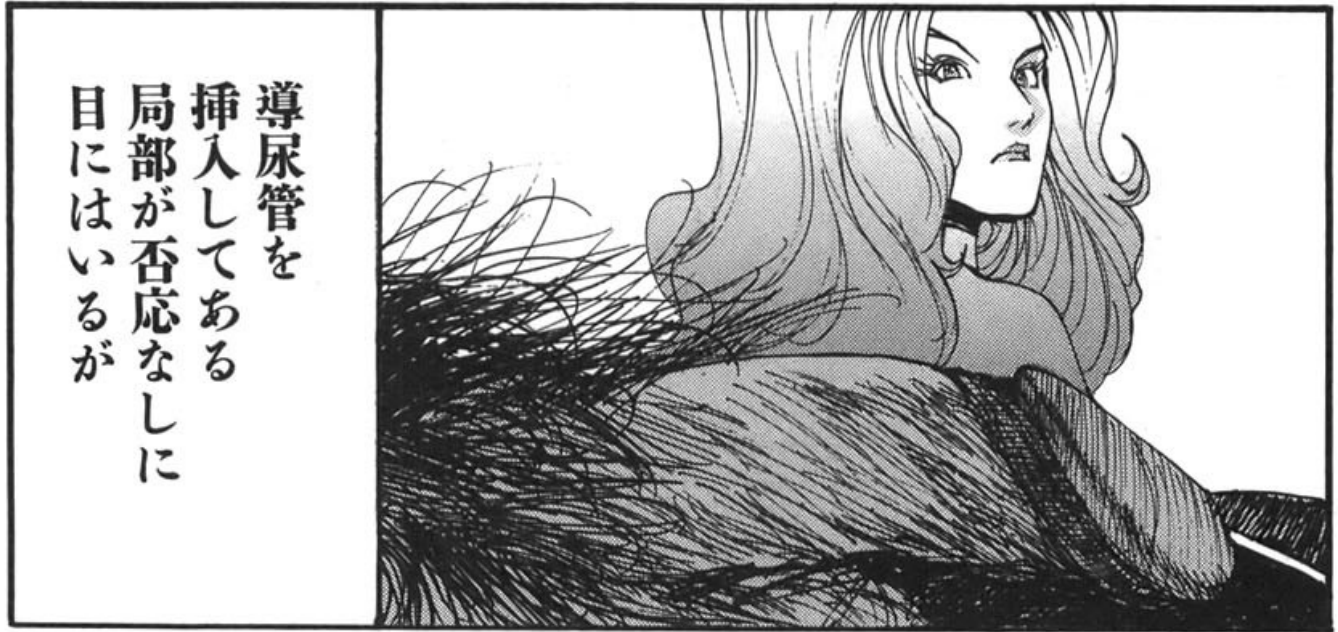


彼女は見回して
ヤプーを認めた

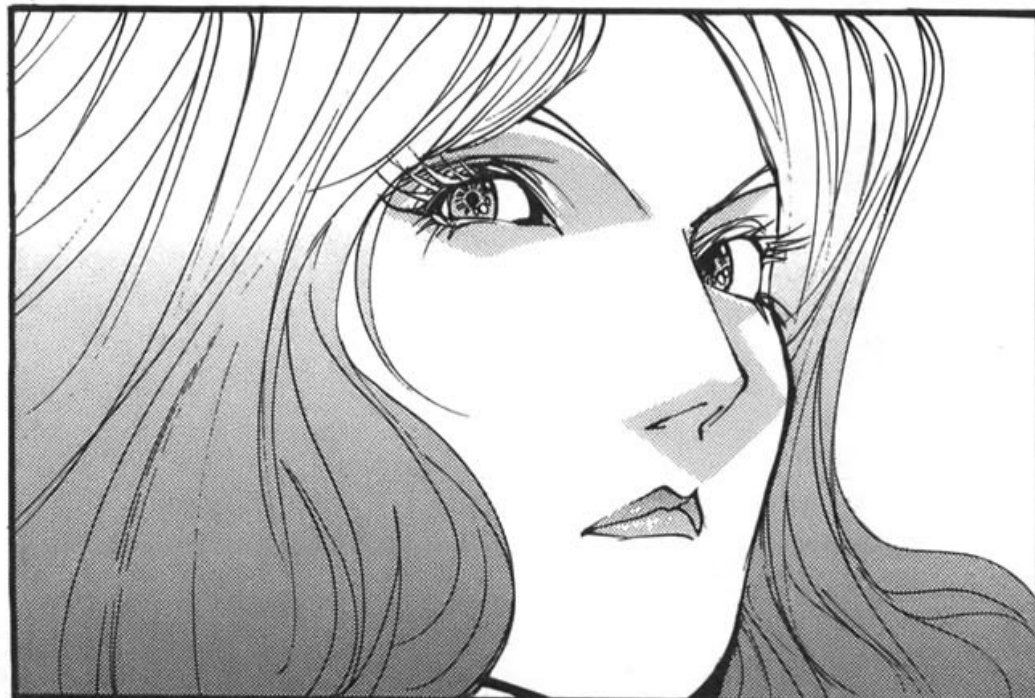




たくましい
男性の
全裸体が
寝台に
仰向けられていた

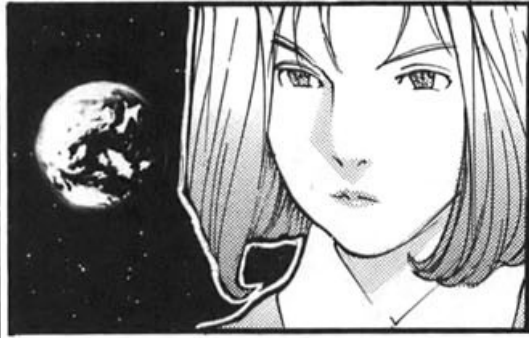


導尿管を
挿入してある
局部が否応なしに
目にはいるが



彼女は何の動揺も
示さなかった

二〇世紀の
女性が



麟一郎の
ほうは



飼犬のそれに
羞恥しゆうちを感じないと
同じだ



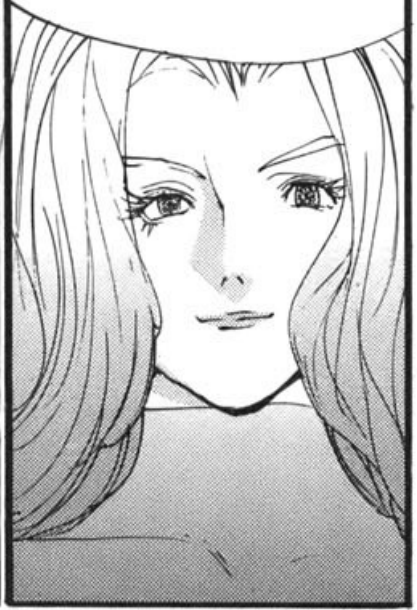
体こそ
凝こつと
していたが

内心の
動揺は
はなはだし
かった

声で
クララでは
ないと
わかる



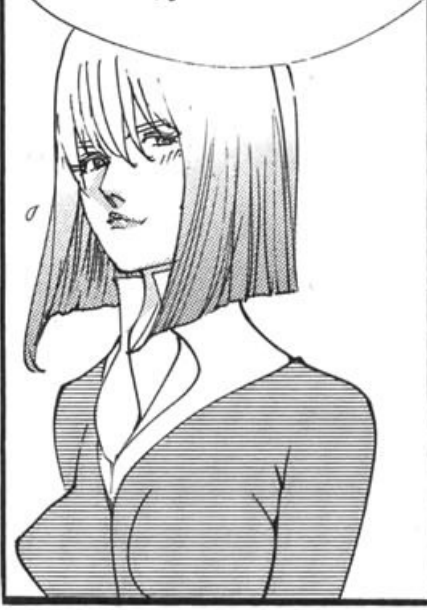
どうも
ポーリーン
らしいが



いったい
どうして
ポーリーンが
来たのだろう？



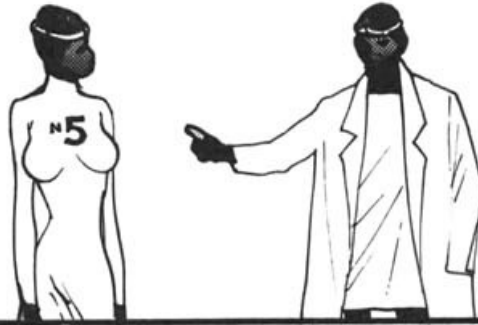
クララの身に
何かあったのか



それとも
おれ
俺を……



獣医は
N5号に
命じて



が
ポーリーンは

ヤブーに
手錠
足錠
を施させよう
とした

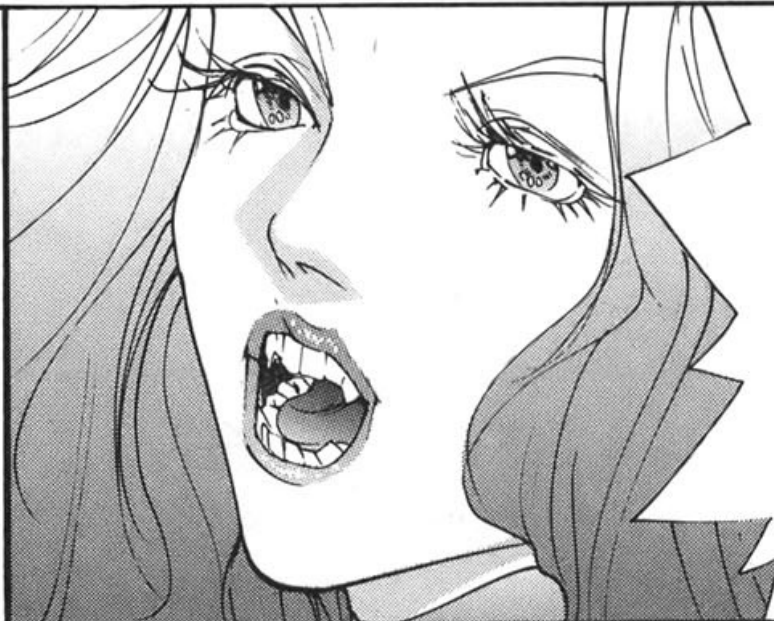


ネアンデルタールは
麻痺が解けると
あばれだすから
いつもそうするのだ



そんなもの
要らないよ

と
きつくいった



は？

狩り立てて
捕まえた
ネアンデルタールと
違って

要らないんだよ

この
ヤプーは
クララに伴^{とも}して
温順^{おとな}しく
すわってる
ところを

ニューマが
うっかり
咬^かんだのだ

だから
そんな嚴重な
警戒は
必要ではない

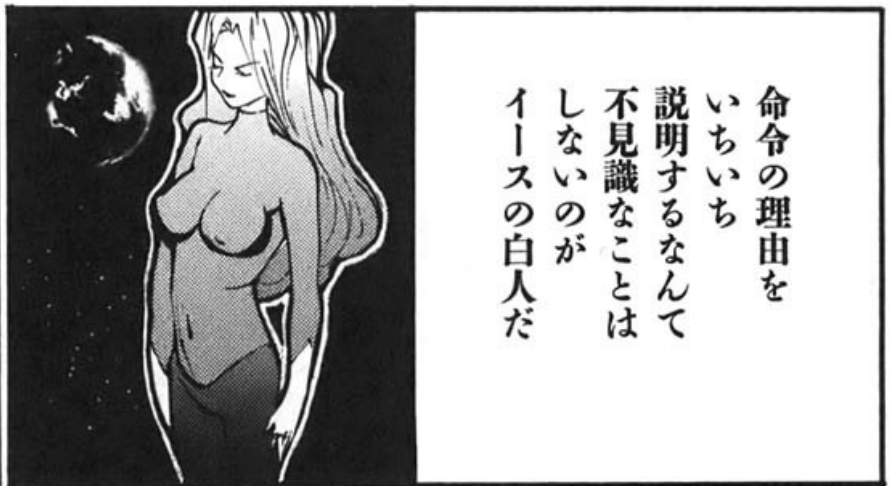


どうせすぐ
上階に
連れて
ゆくんだし
……

彼女の
意向は
絶対命令
である

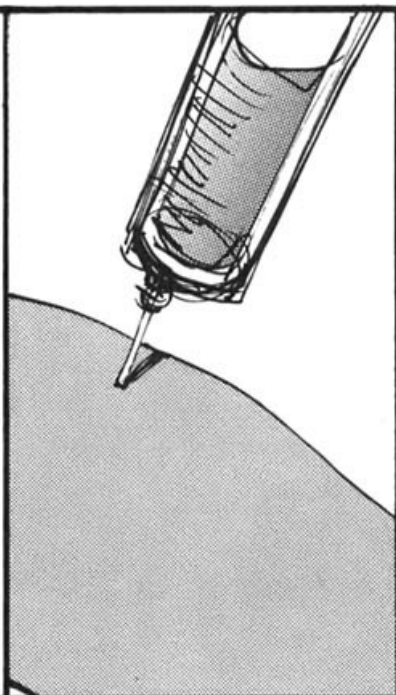


ポーリーンの
気持は
そんなことで
あったが



命令の理由を
いちいち
説明するなんて
不見識なこと
はないのが
イースの白人だ

麟一郎の太腿に
ズブリと突き立てた



ジムは
緩解薬液を満たした
太い注射器を取り出し

美しい
若奥様に
足蹴礼を
受け



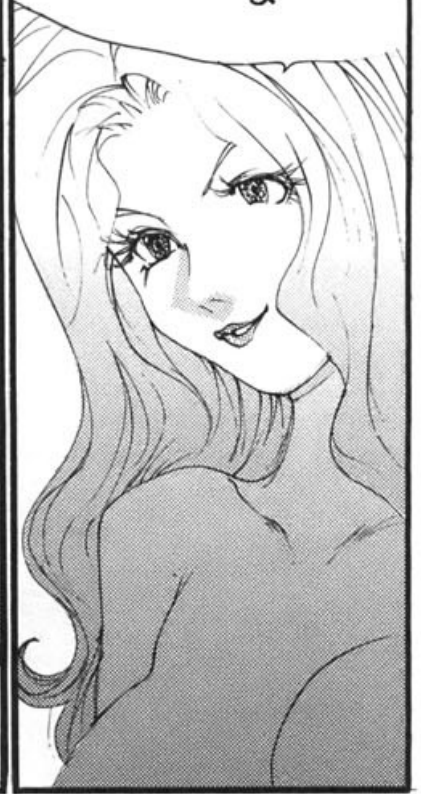
その御前ごぜんで
仕事をする
という
破天荒の
光栄に



若い獣医は
すっかり
あがってしまつて
手がブルブル
震えた



だらしのないわよ
震えてるじゃないか



ポーリンに
笑いながら
叱られて



獣医は
ますます
震え出し

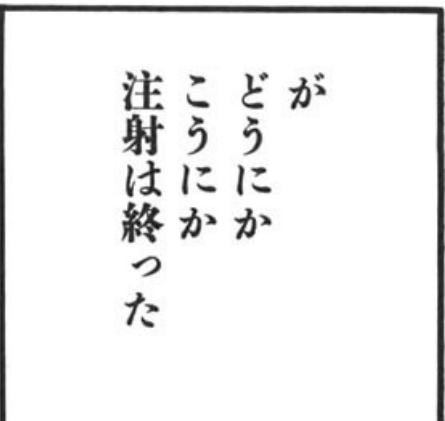


鱗一郎の
注射の苦痛を倍加させた





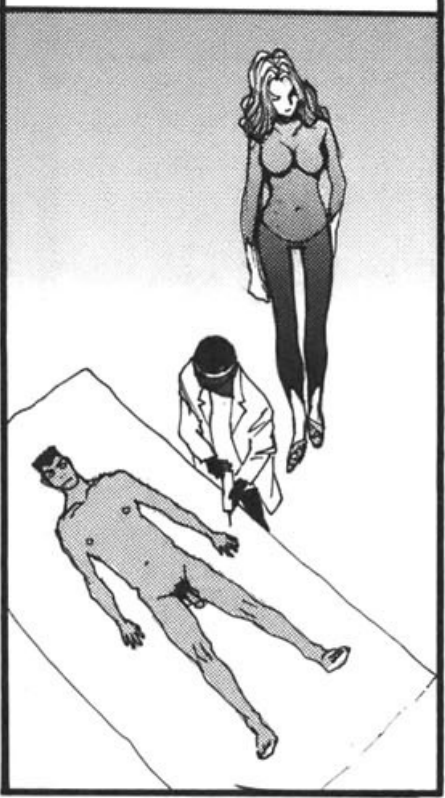
この薬は
すぐ効くって
聞いてたけど



が
どうか
こうにか
注射は終わった



は
十五分で
若奥様



毒が
少しでも
残ってますと
まったく体が
動きませんが



この
シロツク・フアンク
衝撃牙の毒の
緩解経過の
特徴で
ございまして
……



漸層的でなく
飛躍的に
肉体能力が
戻りますのが



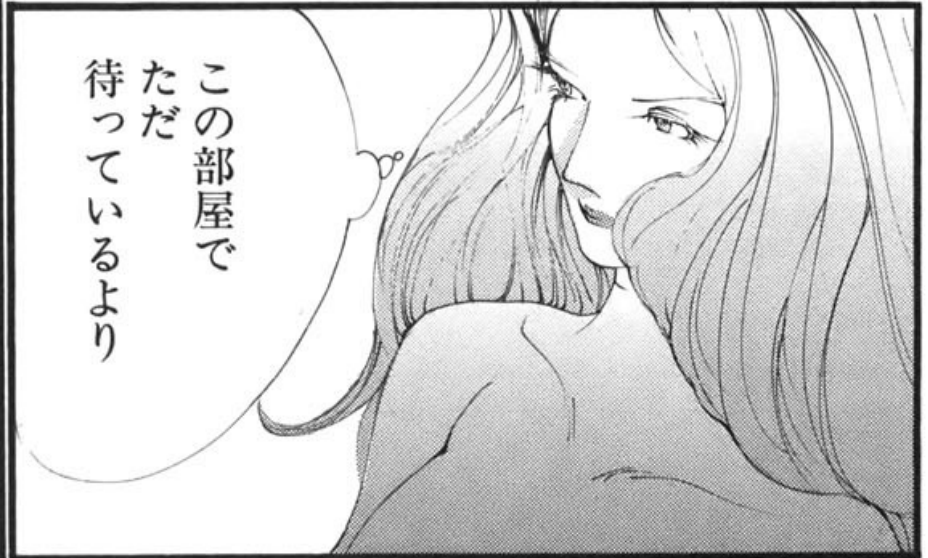
毒が
消えますと
瞬間的に
元通りに
なります

十五分ね
その時
また来るわ



と
ポーリーンは
獣医科手術室を
出ていった

この部屋で
ただ
待っているより



この機会に
地階の
黒奴舎でも
見回ってみよう



従者のA3号が
形に添う影の
ように従った



YAPOO, THE HUMAN CATTLE

YAPOO, THE HUMAN CATTLE

クララは
自動椅子に乗って
寢室に
はいつて行った



衣装篋いしょうだんすの前で左のペダルを踏んだ

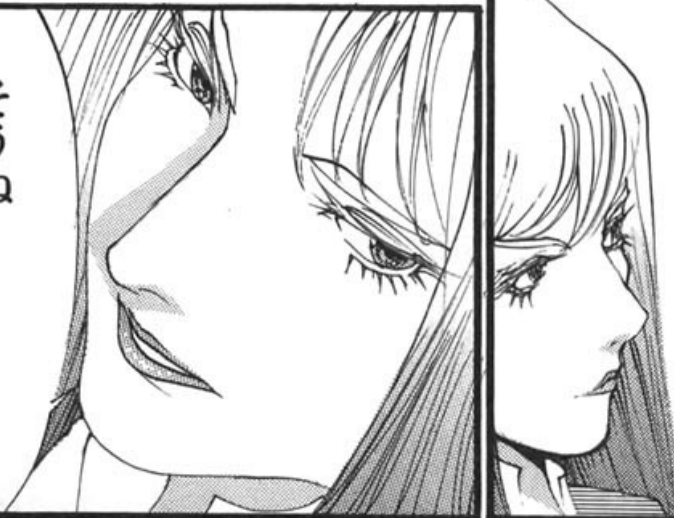


F1号が訊きいた



お召替えは……
部屋着に
なさいますか？

そうね
それに
スリッパに
はき換えたいわ



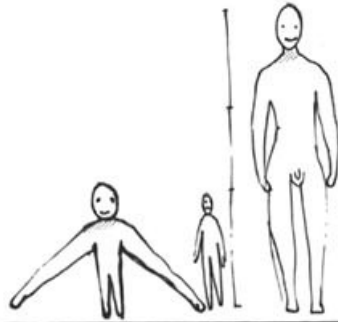
すると
筆筒の横から
奇妙な
生体家具が
現われた

身長は
三分の一
縮小型で

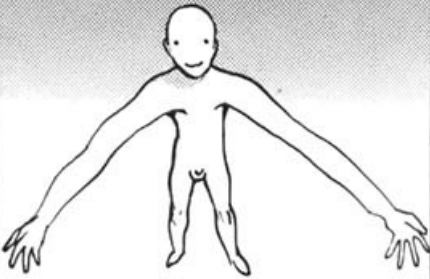
$\frac{1}{3}$



頭部と
両腕だけが
尋常の
大きさだから



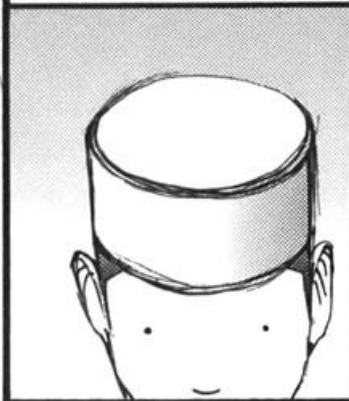
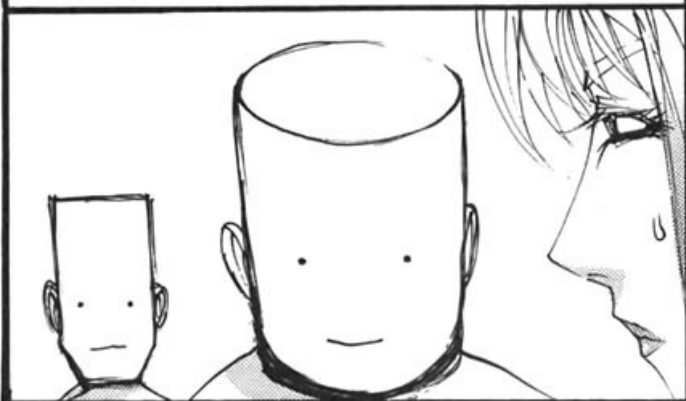
手長の
頭てっかち
だが



変って
いるのは

帽子を
かぶって
いるのかと
思うほど

幅広の頭蓋の
頂上が真っ平らで
その平面と
下顎が左右に
張っている
その底辺の面とが
平行に
なっている
ことと



頭頂平面上に
一足の室内靴が
揃えて
載せてあること
であった

それに
頭髪が異常に
長く

左右に
分けて編んだ
黒い太い
髪束が



左右とも
五十センチ
くらいに
伸びており

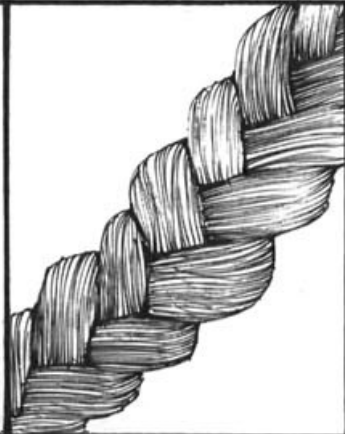


その先に
ブラシが
結びつけてある



——と
見えたが

実は
そのたばねた
頭髪の
一本一本を



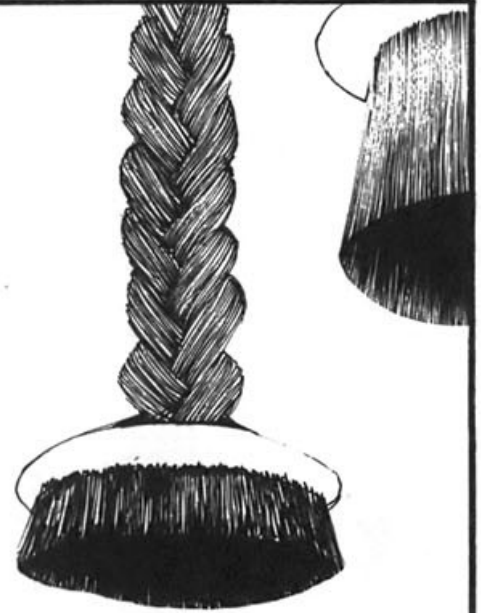
握り部の無数の
小孔こあなから通し



つまり
このヤプーの
髪の毛は

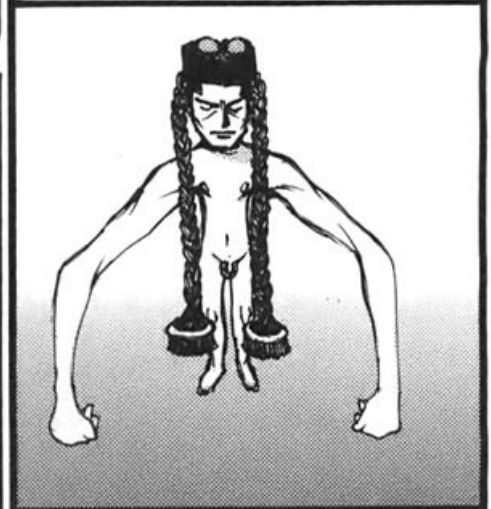


その裏の面で切りそろえて
ブラシに作ってあるのだ



生きながら
二個のブラシ
そのものの
一部分に
なっているの
であった

この靴シューヤプー具畜は
製造工場から
納入された
ばかりの品



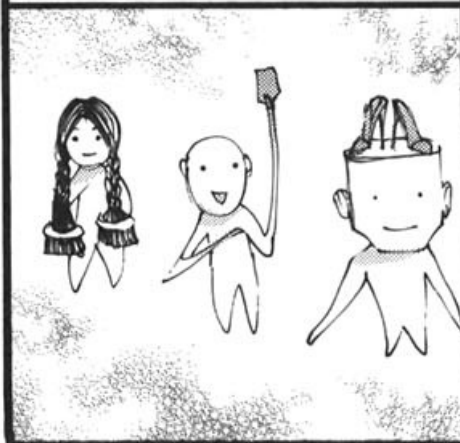
つまり
養成所卒業直後の
新畜である



靴具畜養成所
には



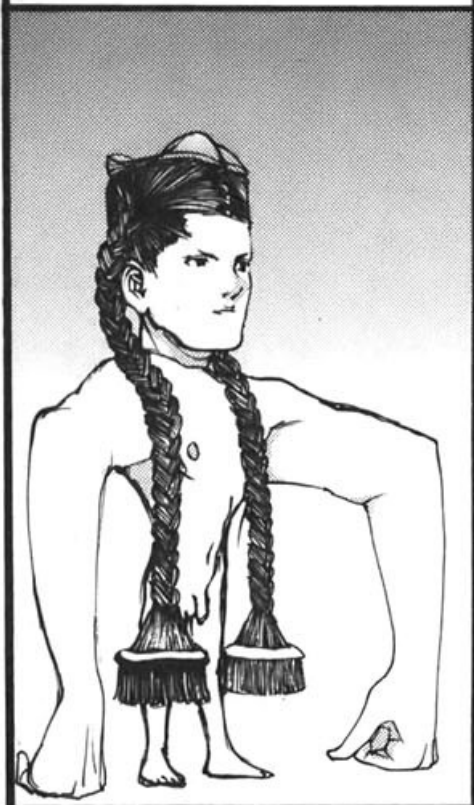
戴靴奴 くつぬぎ
捧靴奴 くつもち
磨靴奴 ブラシ



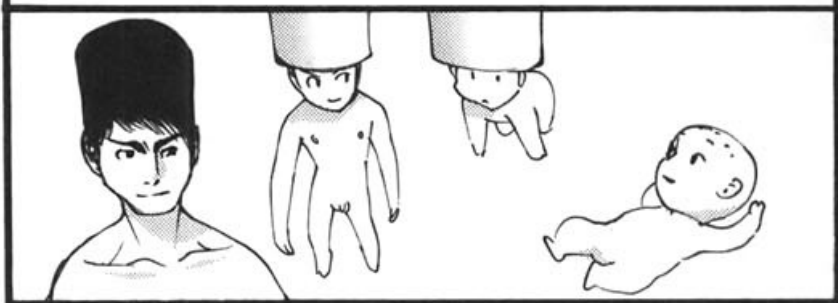
……など
貴族邸で
使役される
各種作業専門畜の
訓練課程があるが



彼は
別荘用の
兼用多能畜
である



生長期に
頭蓋に
加圧されて
頭頂扁平の
福助頭に
なっている
のだが



その
カリキュラムは

履物はきものの
歴史や
靴製造法の
学科を
別として

術科が
三段階
ある



第一過程は
「靴冠」
くつかむり



起居動作に際し
各種の履物を
頭に載せ



頭頂面を
常に床に
平行に保って



冠である
履物を
絶対に
落さないよう
訓練するうち



何も
載っていないと

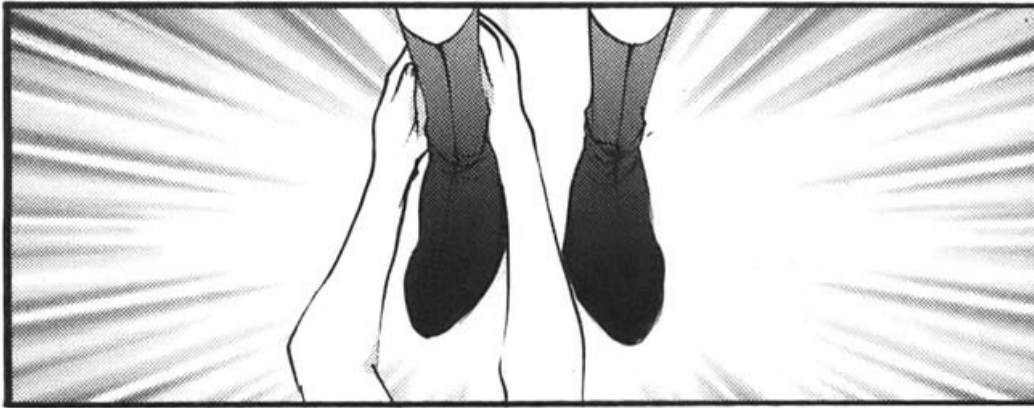


ちようど

人間が着物を着ないで
裸でいるときのような
恥ずかしさを
覚えるようになる



第二過程は
「脱靴」
ぬがせ



下顎を床に付けた
姿勢のまま
長い両手を使って



アンドロイドの
「御足」おみあしから
履物を脱がせる作業

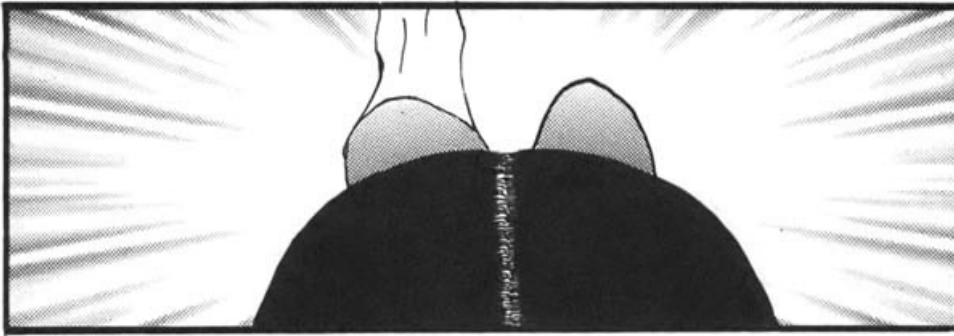


靴から
抜かれたばかりの
蒸れた足が
発散する
異様な臭気に
快感を覚え



その芳香を嗅げる特権に
プライドを持つようになる





第三過程は
「頂戴」
ちやうだい
といつて

頭頂面が
踏まれて
その圧力が
下顎を床に
押し付ける

このとき
頭頂に
戴く靴に
「御足」が
かかると

靴を
履いてもらう
作業だ



など
可哀そうに
思えるが

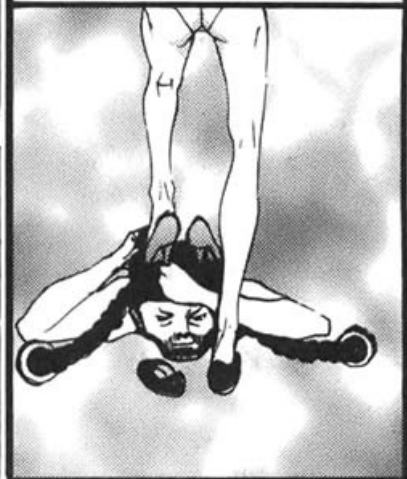


頭の天辺を
人の足に
踏まれると
喜ぶ

このときが
この多能靴具畜の
至福の瞬間だ



履物知識を
詰め込んだ
頭の上に
靴を載せて
一生を送る



ヤプーには
それが
ふさわしい
として
そういう
習性を
条件づけて
あるのだ





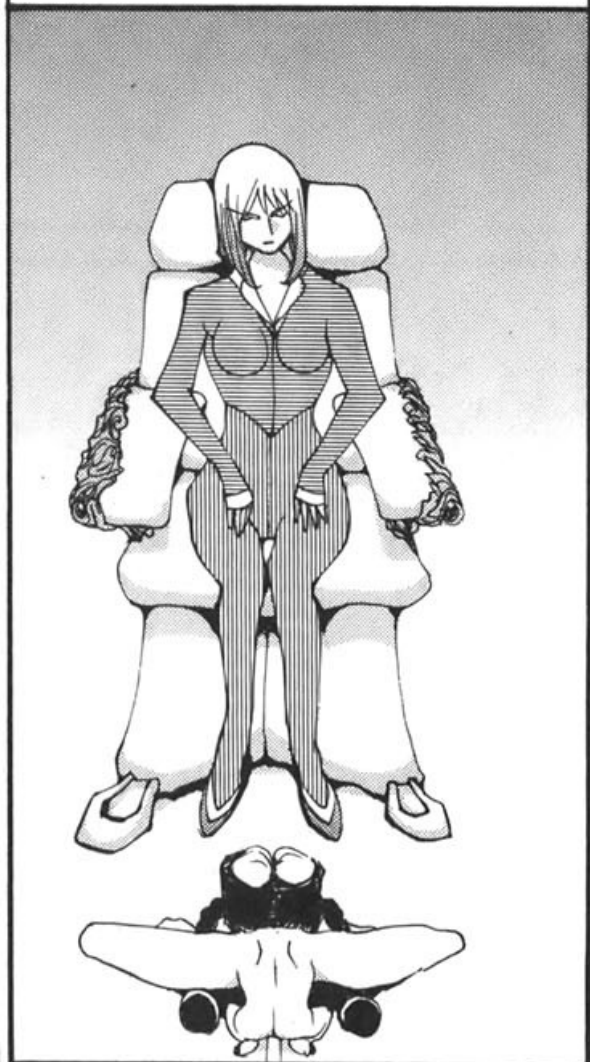
イース白人の
いづくしみ
 慈畜は
 合理的なのである

実習授業で
 覚えたとおりの
 下顎を床に付けた



彼は
 クララの
 椅子の前に
 ひざまずき

ホワイト・ゴツデス
 白女神への
 初奉仕の
 緊張で
からだ
 身体が
ふる
 慄えている





両手を上に伸ばして
クララの靴を脱がせた



クララは
片足ずつ履いたが

頭上の室内靴が
ちょうど
突っかけやすい
位置にあるので



足を
頭の天辺に
載せた瞬間
室内靴が
揺れたのは



靴具畜が



〈ほんとの
白い御足〉



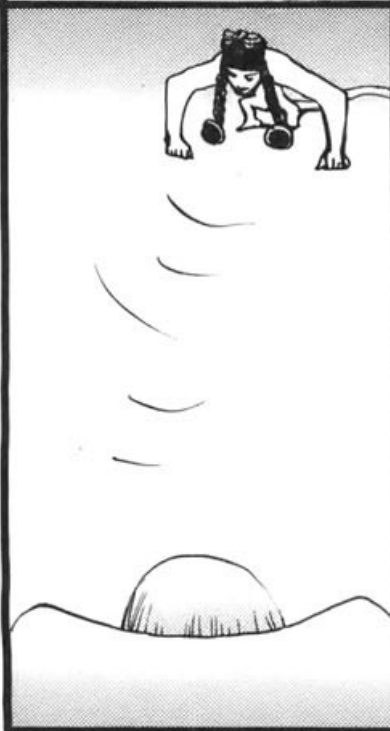
に
踏まれた
感激のあまり
身を慄わせた
のである



彼は
脱がせた
中ヒールの
パンプスを
頭に載せると



出てきた
元の場所に
帰って行く



其処そこに
坐まって



今日の
初仕事の
感激を胸に



舌ほりで
埃ほりを
舐なめ取とった
上



頭髮のブラシと
精液クリームで
磨き上げ



フランク・クッション
足裏布団を
交換しておく
のである



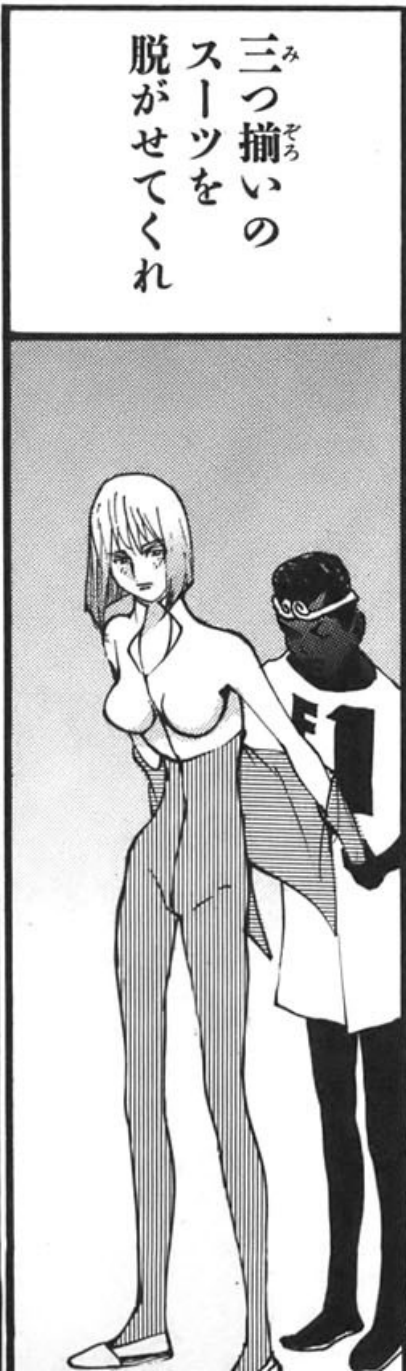
はきもの
履物を換えた
わずかの間に



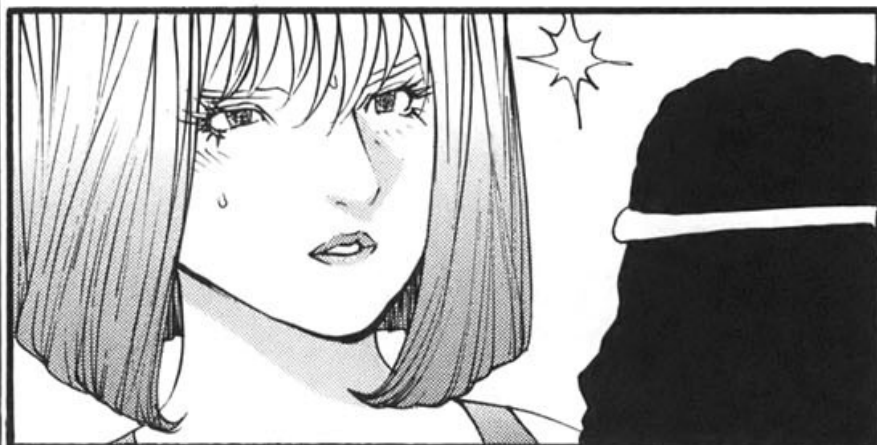
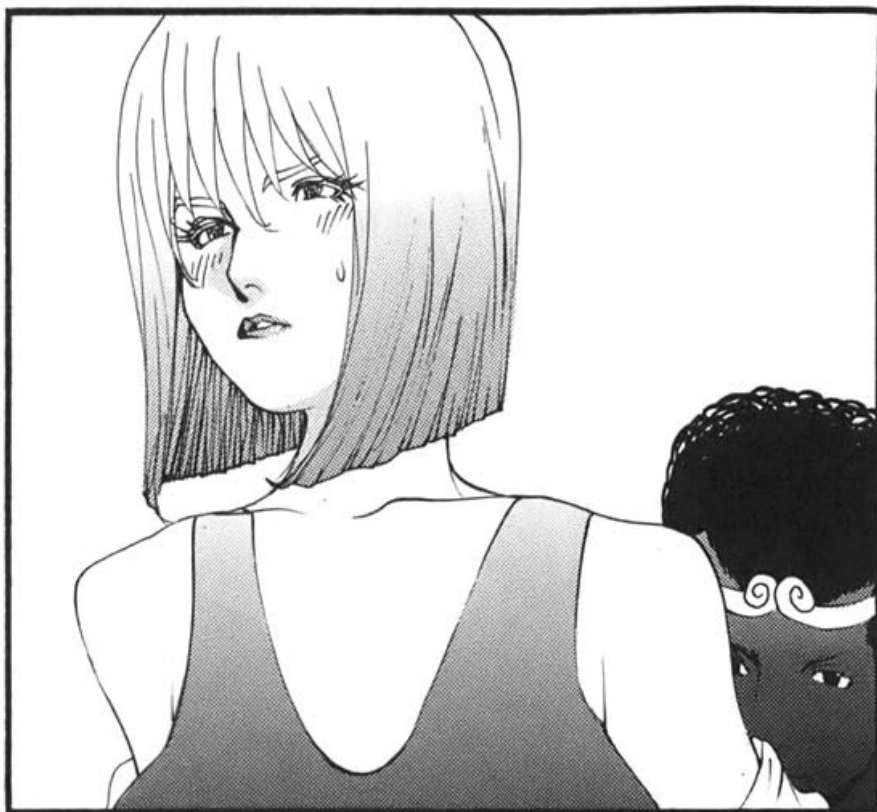
F1号は
着替えの用意を整えて
待っている



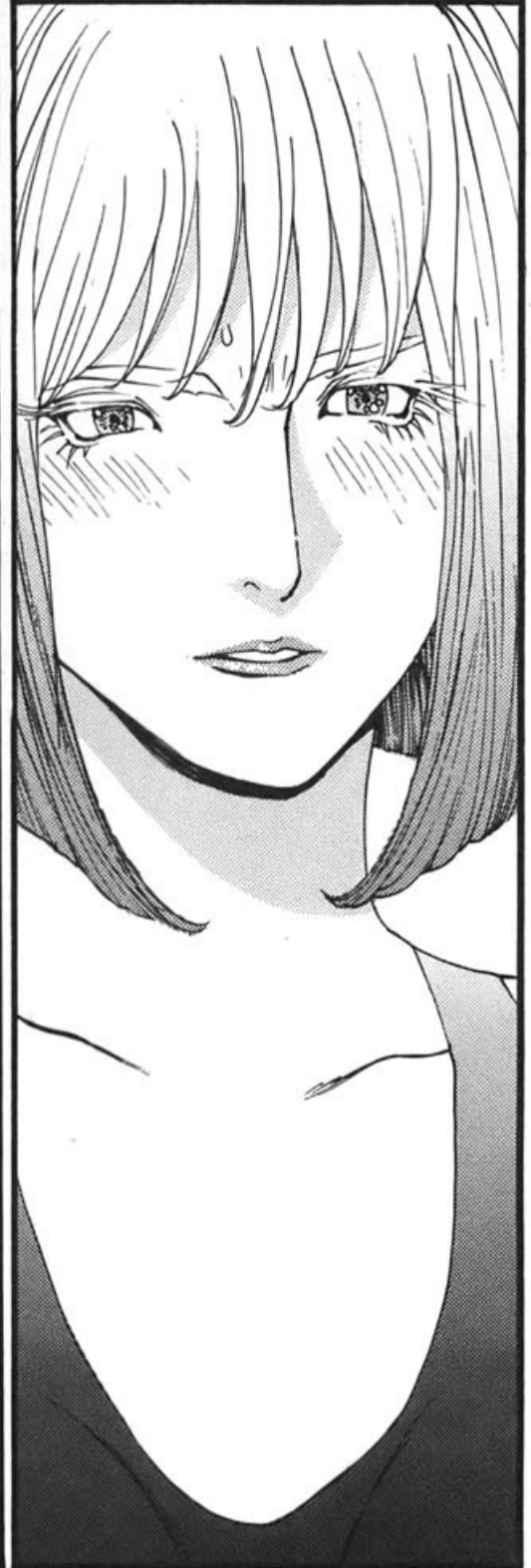
三つ揃いの
スーツを
脱がせてくれ



しかも
下着まで
脱がせようと
するのだ

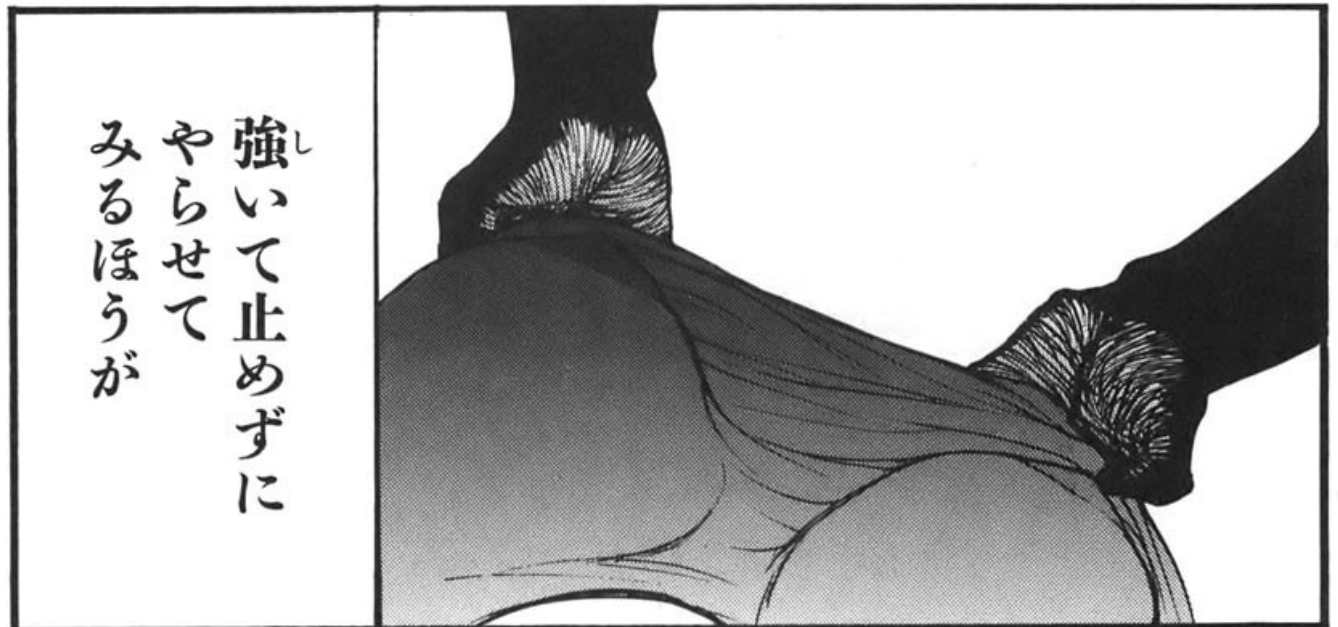


ちよつと
びつくり
したが





イースの風習を
知らないという
ひげ目が
ひそんでいるため



強^しいて止めずに
やらせて
みるほうが



恥もかかず
風習がわかって
いいような
気もする

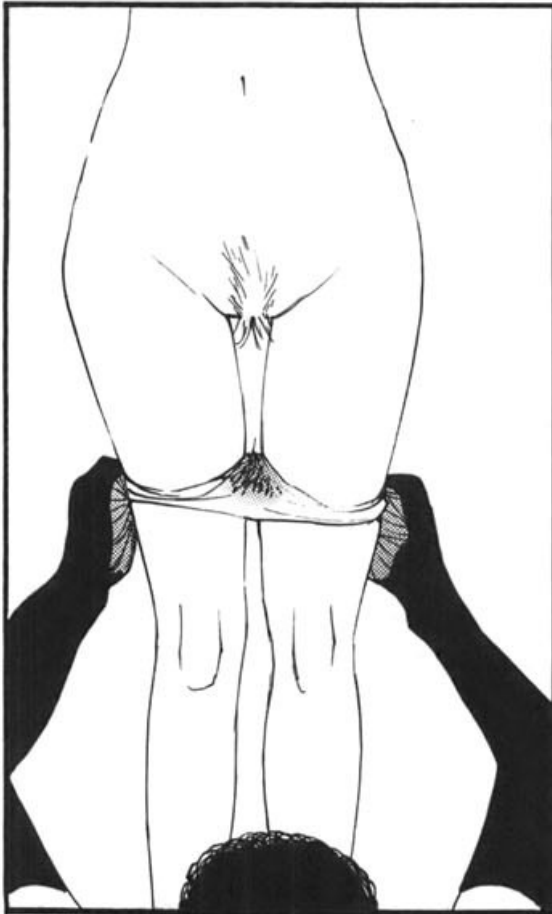
今は平気だ

いつか
彼女は

無意識に
イース人らしい
黒奴観を
身につけて
きているのだ

下着を
よく換えるのは
イース人の
身嗜み^{みだを}である

ことに女性は
下着を汚しやすいためから



できるだけ
たびたび取り換えるのが
オシヤレとされている



黒奴の従者に
手伝わせるのは
その場合
当然のことだ

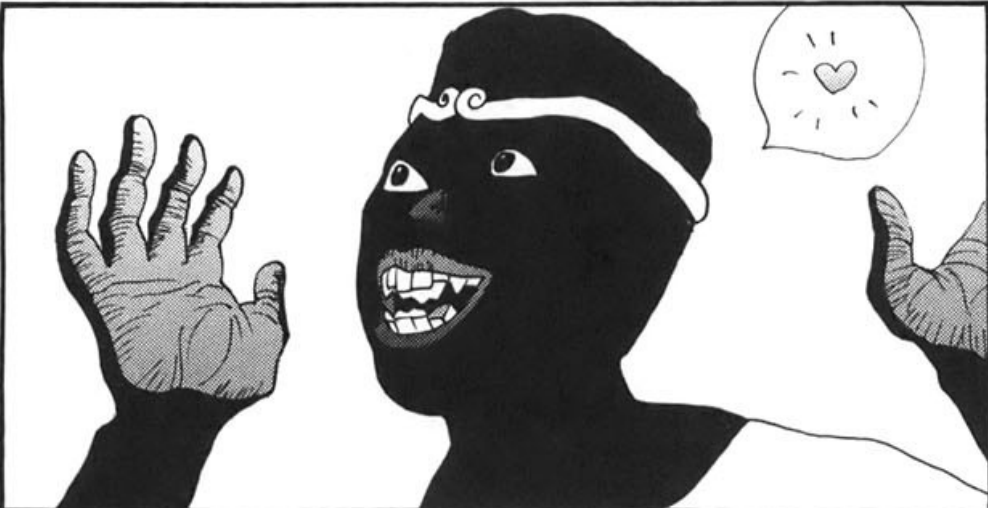
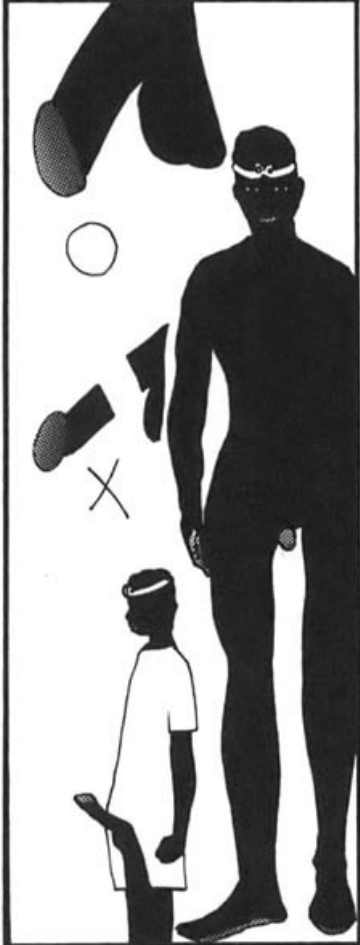




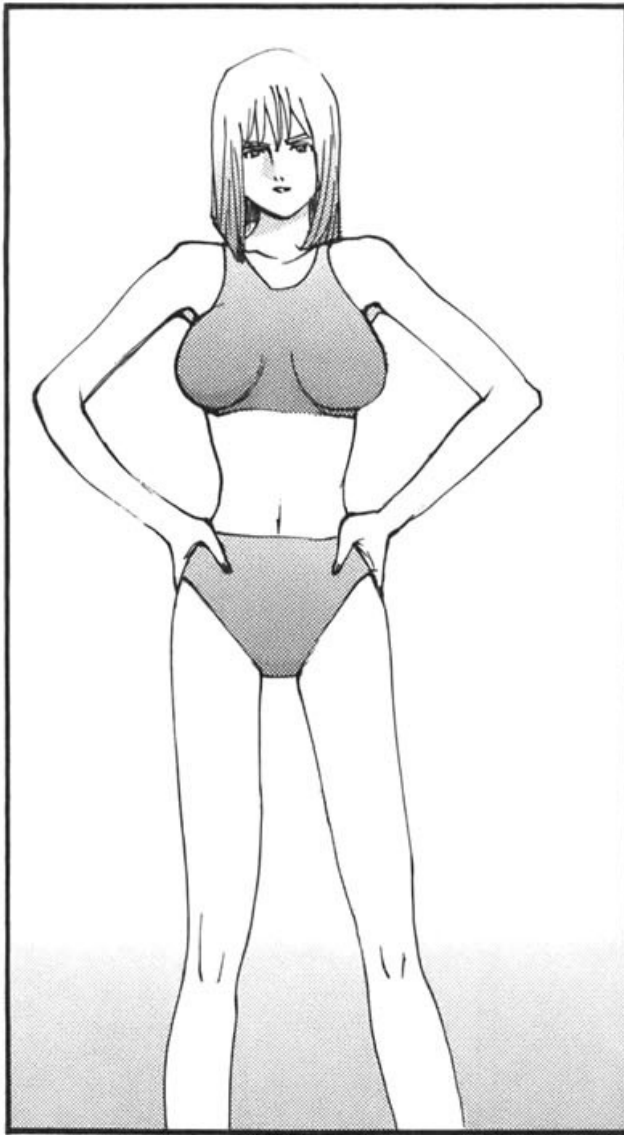
女主人の肉体に
劣情を催すような
不届きな黒奴には
恐ろしい処罰が
待っているから

べつに
去勢した奴を
使う必要はない

黒奴は
我慢する義務が
あるのであった



その代り



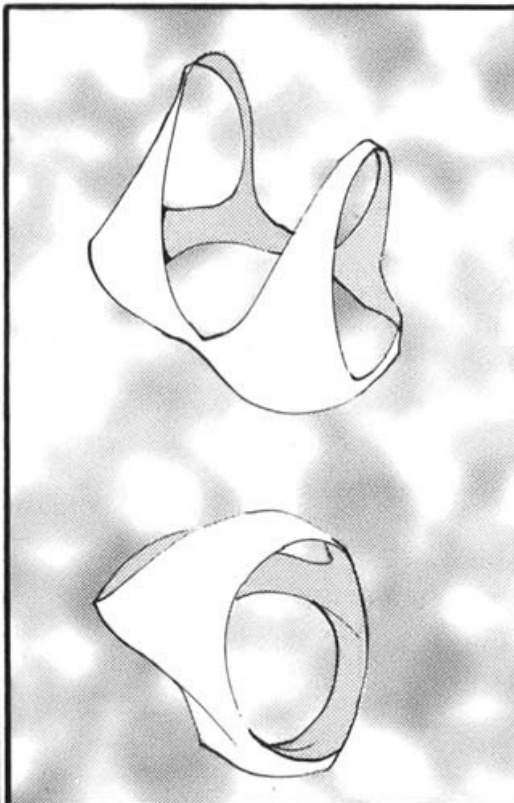
後に説明するように白人の下着は

はき捨てられた
パンティーなどの
下着ランジェリーに対して
優先権が
与えられる



サヨナラ・パンティー
サヨナラ・ブラジャー

であって
それが
黒奴には
食堂での
ご馳走ちきうに
なるのである



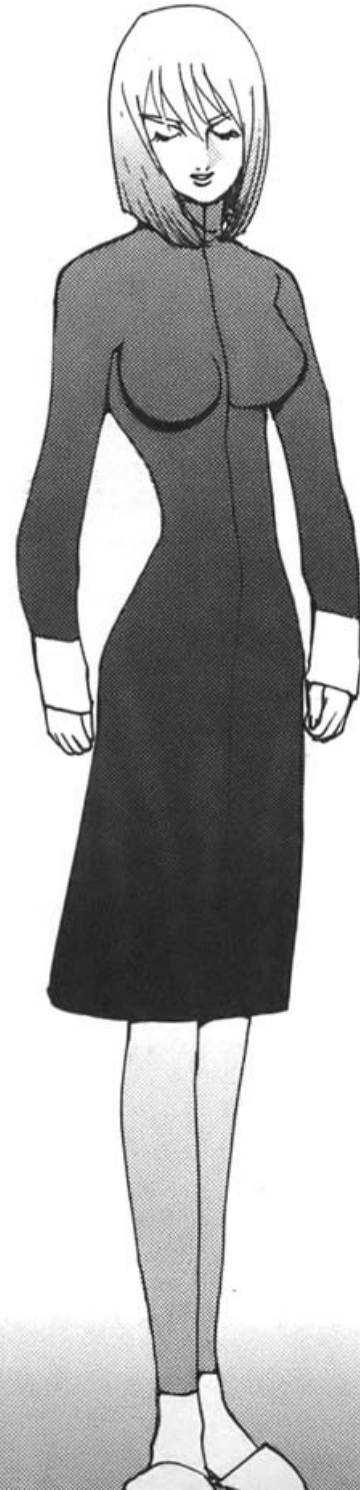
新しい
下着を
つけ



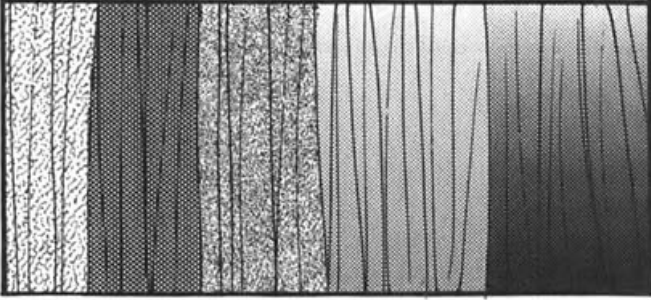
素裸に
なつて



細身のズボンと
ジャンパー風の
コートを着た



来客用に
各種の寸法の
衣服が
用意されて
いる中から

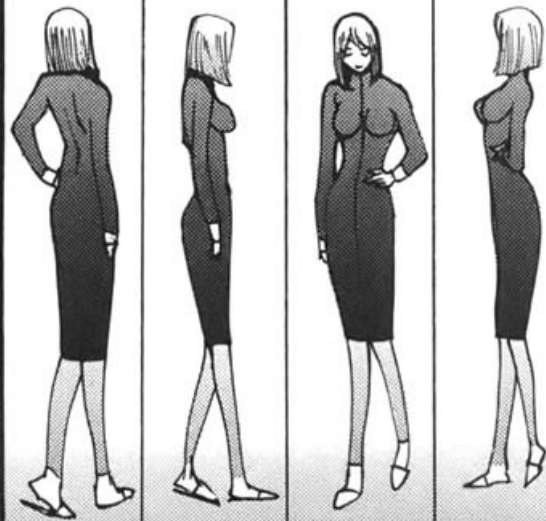


クララの
体にあつた
寸法のセットを
F1号が
選り出したので
ある

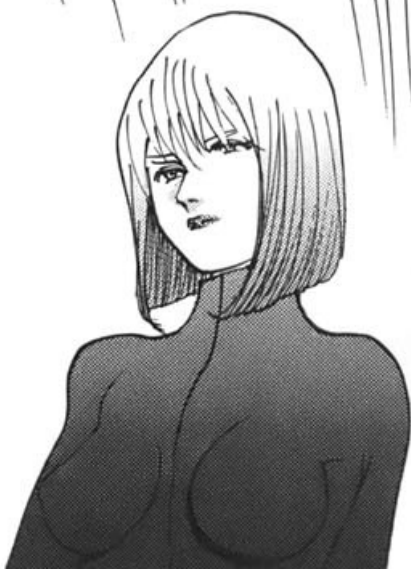
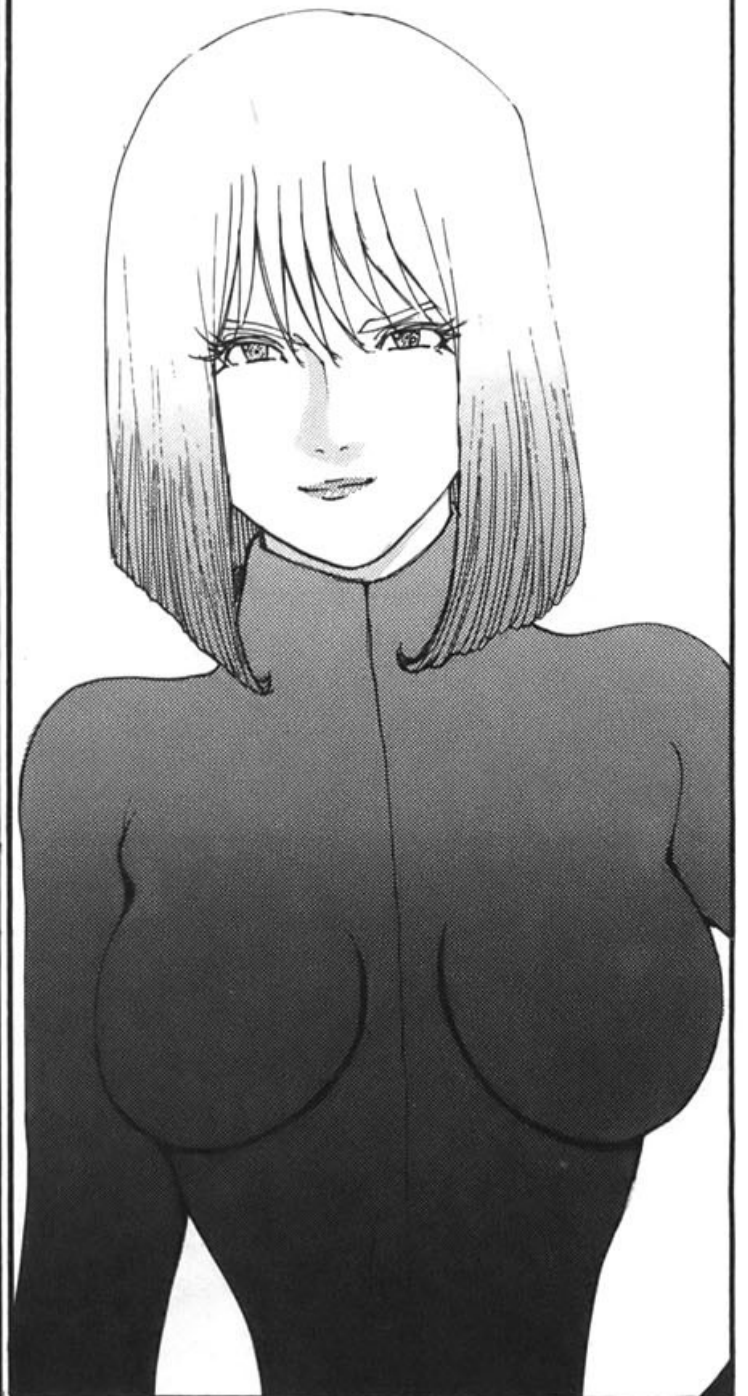


新しい服の
う・つりを見る
鏡は

円盤の
中のと違って
四面鏡だった

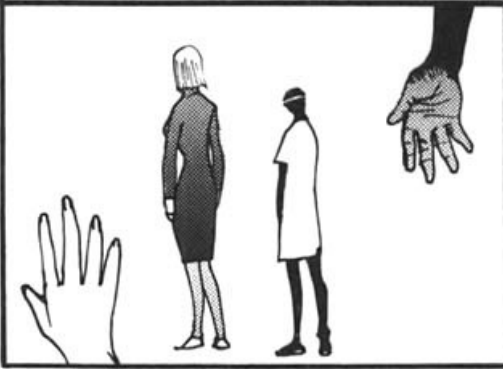


彼女は
化粧台に
すわった

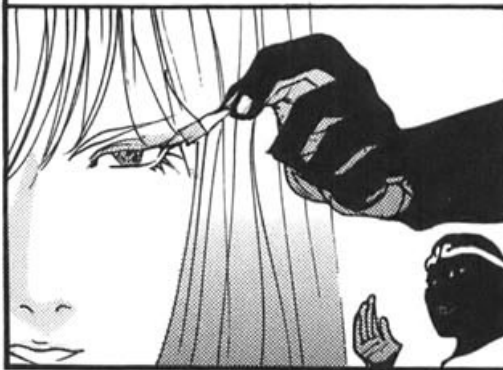


ミラー・スレイブス
鏡台付矮人たちに
手伝わせながら
F1号が
髪や顔を
作ってくれた

元来
従者は単に
主人の手の
代用品で
あるだけで



化粧など
特殊技能には
専門の黒奴が
別に
いるのだが



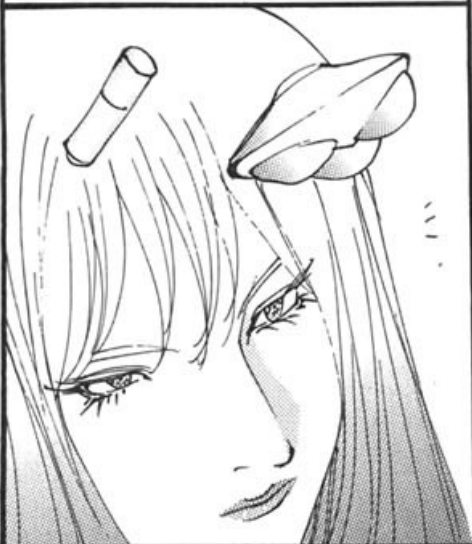
急いでいる
クララは
構わずに
彼にさせたのだ





彼の感激は
いうまでもなかった

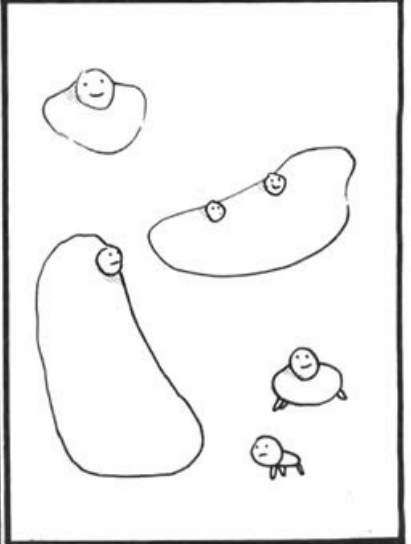
さもなくば
円盤内で
見たのとは
形の異なる



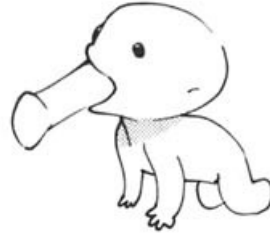
クララは
寝台を詳しく
見なかったが



室内には
まだいろいろの
家具があった



カニリンガ
舌人形と



ロングネックド・
轆轤首型
セツチン
単能肉便器と



ユーリナリ・ビクミー
検尿矮人



とが
寝台の下に



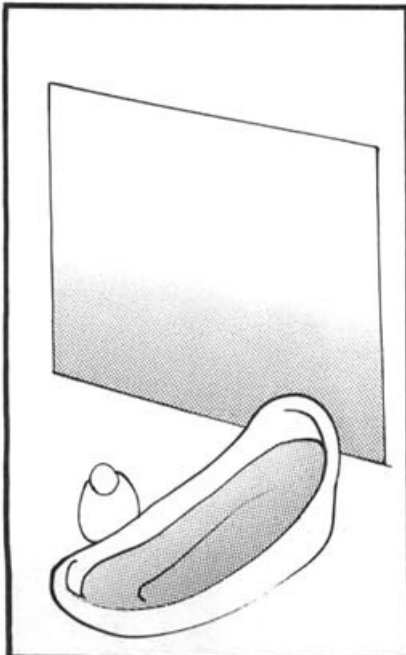
そして
引出しには
トネルボーイ
隆内小童子が
はいつているのに
気付いたこと
だったろう



この四種は
女性来客用寝台の
標準備品なのだ。



ついで
衝立の裏には浴槽があつて
その横に



ハンチバックド・セツチン
据えてあつた
偃偻型単能肉便器が

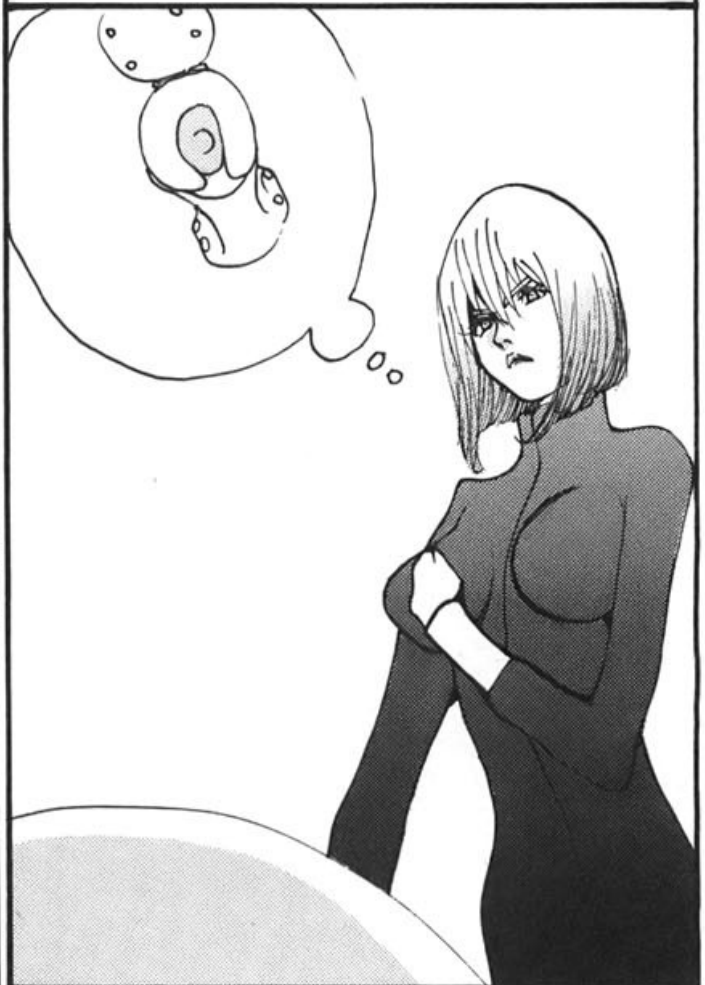


標準型の
セツチンとは
形が違ったが



坐つた
からだ
身体全体が
一見して
腰掛便器を
連想させる形を
してるから
すぐわかる

一昨日から
便通が
なかつたのが



先ほどの
ソーマが
効いたのか
便意を
催してきている
ところ
だったので

彼女は
使ってみる気に
なった



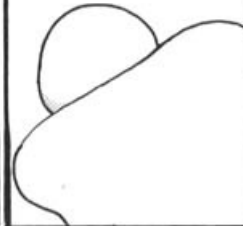
それは
来客用で
専用器ではないから
生体彫刻などの
個人的趣味は
省いてあったが



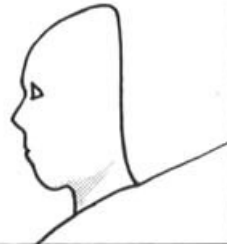
単能具に
ふさわしい
体格を
していた



猪首いぐびで
丸まる禿はげ



後頭部が
平らだ



よく発達した
馬蹄肉瘤の
内底に
その後頭部を
接して



仰向けた
大きな顔が
ある



鼻はほとんど
隆起せず
孔あな二つだけだが



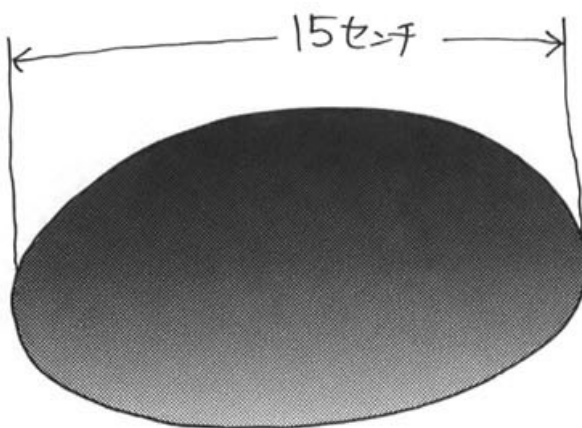
黒い目は
利発そうだ



唇くちびるの
裂け目は
大きく



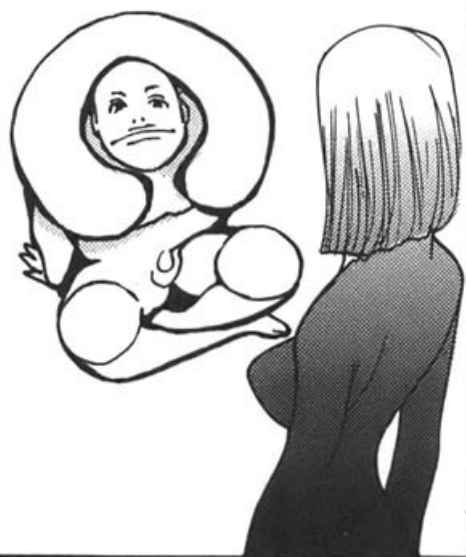
丸く開けば
直径十五センチは
あろう



あぐら
胡坐して開いた
ひざがしら
両膝頭が
扁平になって



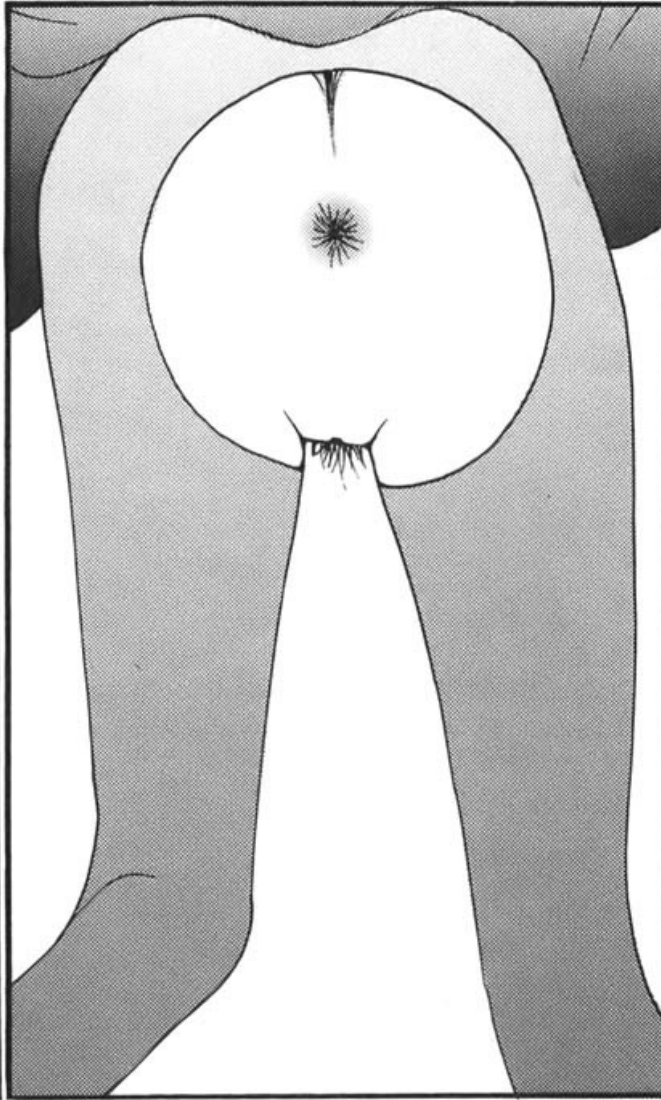
使用者が
そこに
両足を載せるように
なっている



腰を下ろしてみると



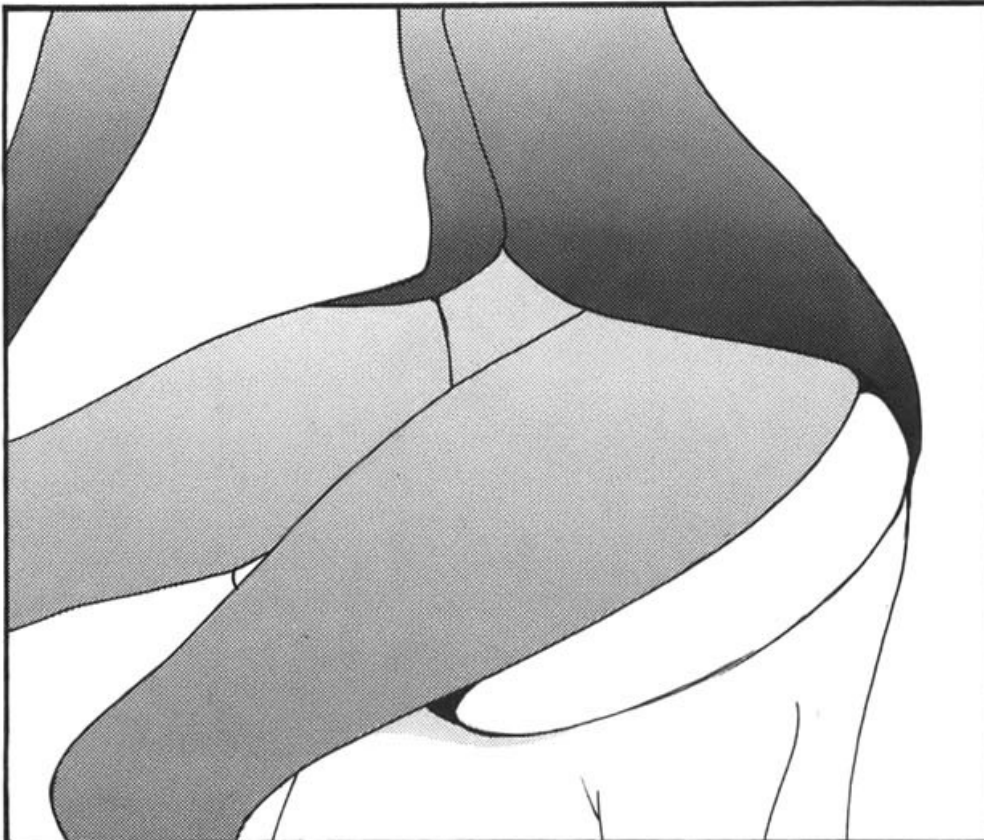
同時に孔鈕ホール・ボタンが開いて
お尻が露出した



ズボンや
パンティーを
ずり下ろす手間が
いらぬのだ

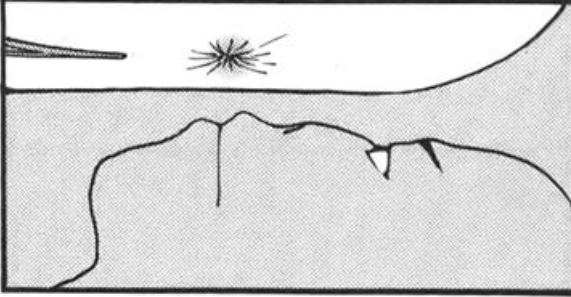


そして
お尻をささえる肉瘤の
温かい感触は

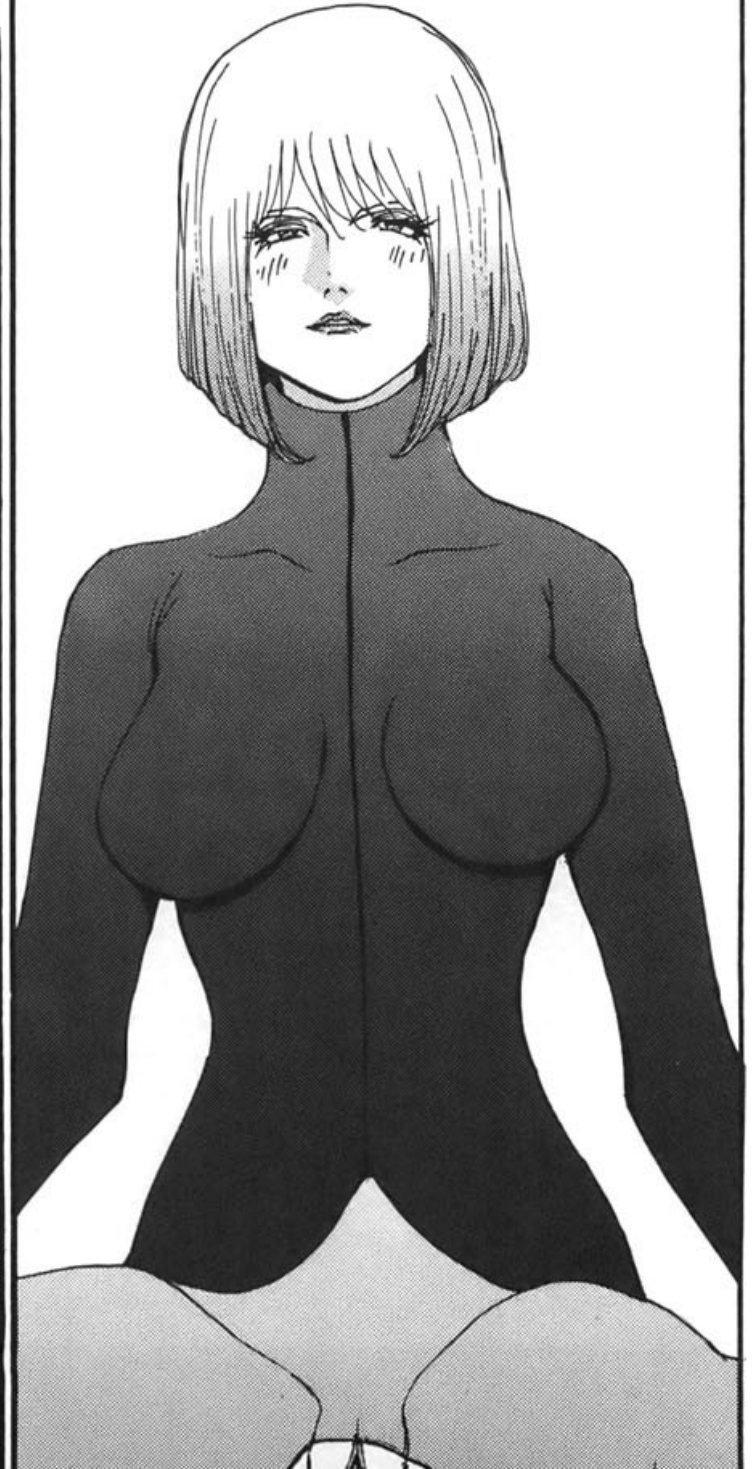


昨日まで
使っていた
水洗便所の
冷たい腰掛より
ずっと
気持がよかった

唇の縁ふちは
肉瘤の
高さより
少し低く



さつきの
スタンダード・セツチン
標準型肉便器と
違って
局部の皮膚に
接触して
いないが



ストレスの
ところに
口腔が深く
開かれているに
違いない



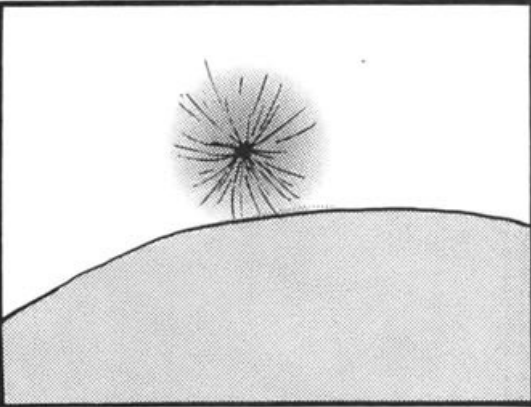
しかし



尻の



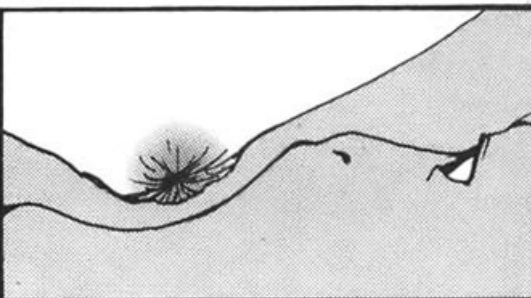
すぐ真下に



口を
開けている



人間

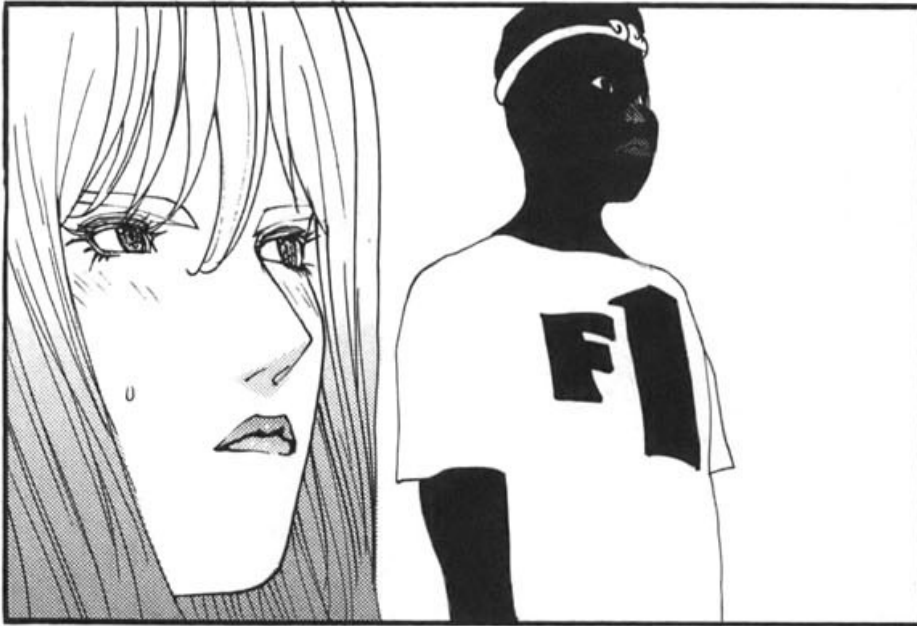


かたわらに立っていた
F1号のほうこそ
多少気にかかったが



さつき裸まで見せた
あとのこと





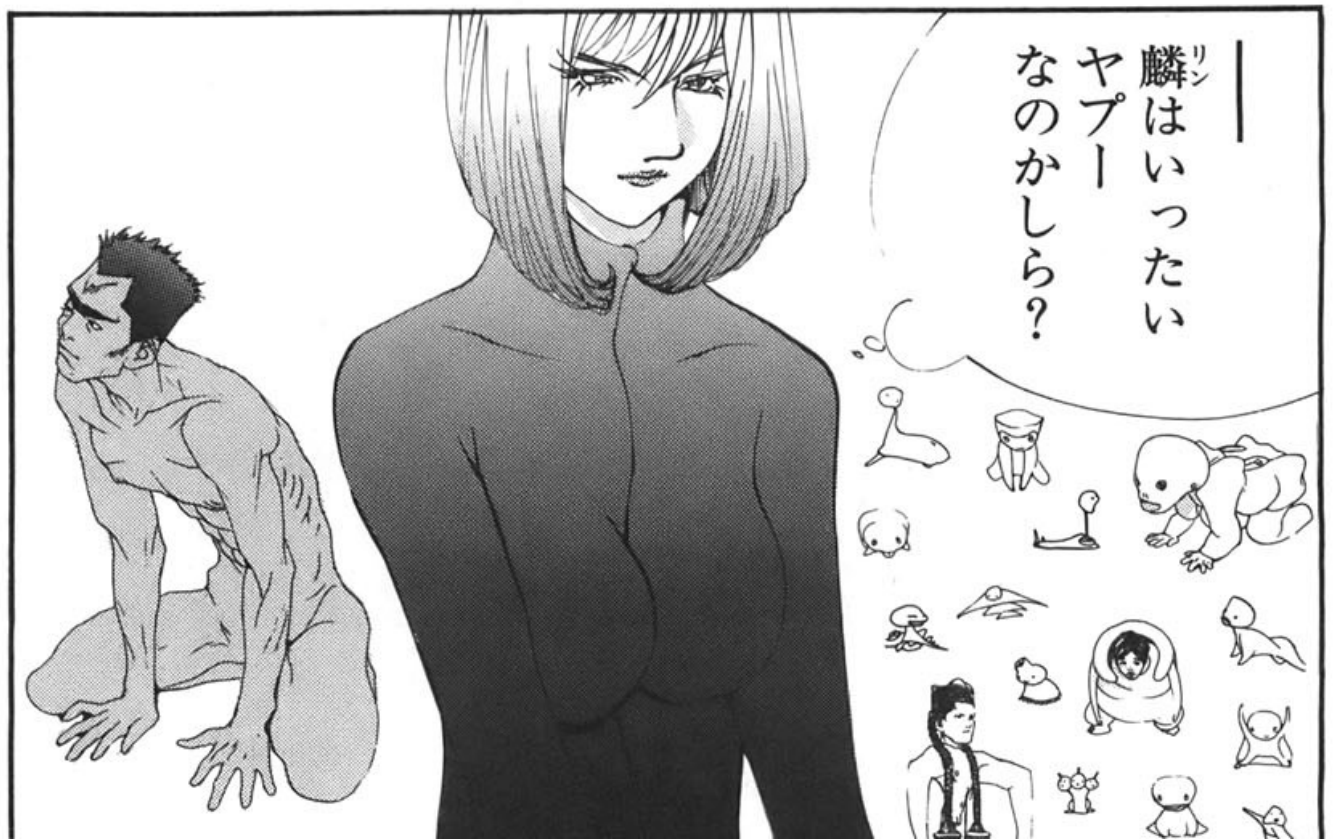
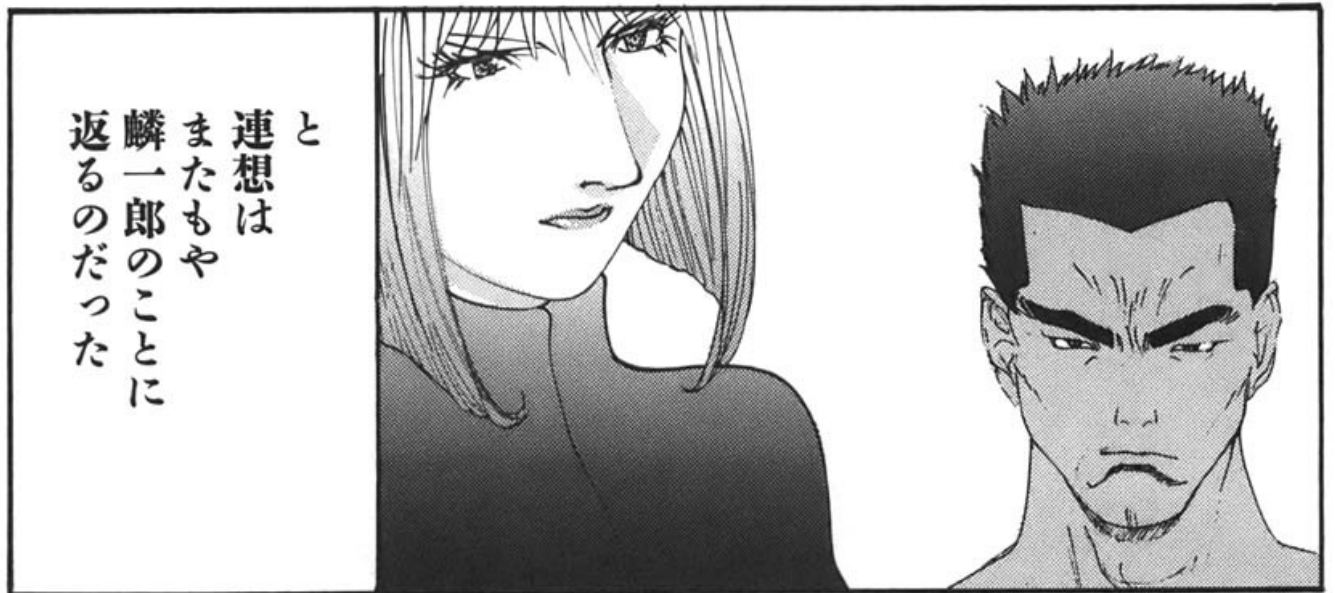
その前で
排泄できないうほどに
羞恥を感じる
というほどでは
なかった



黒奴なんて
人間じゃない
半人間よ

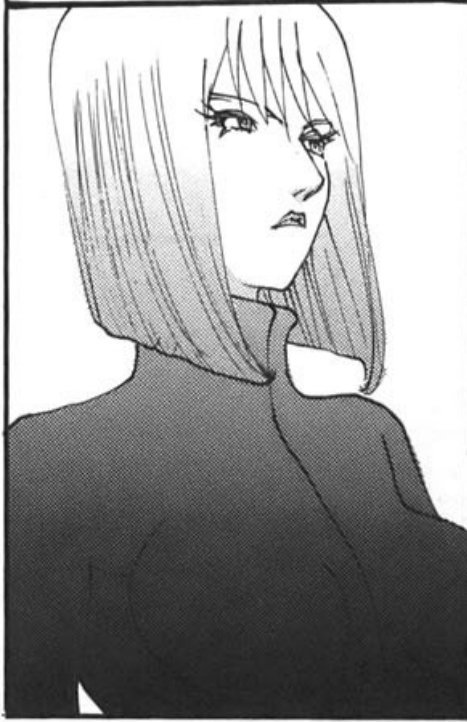


といった
ポーリーンの言葉が
思い出された



いや
彼がヤブーか
どうかはすでに
問題外かも
しれない

確かなことは
自分の愛情が
もはや
彼のほうに
向いていないこと
だった



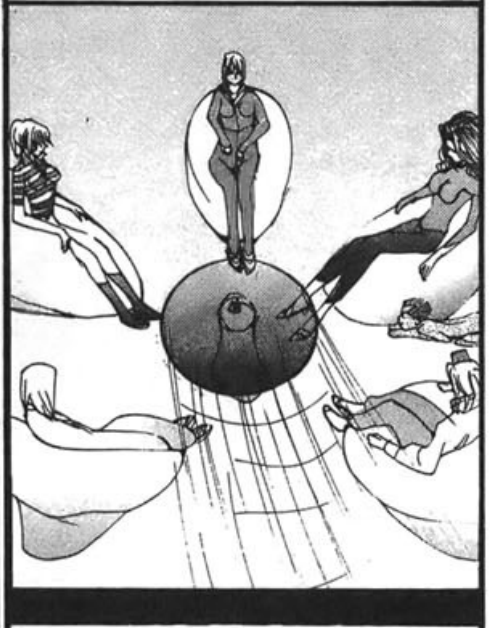
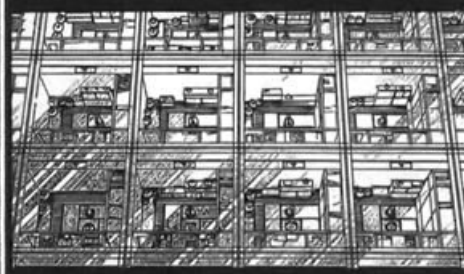
黄色い肌のあの小男は
自分の婚約者たるに
値しない



こんな
自明なことが
なぜ今まで
わからなかつたのか
不思議なくらい
だった



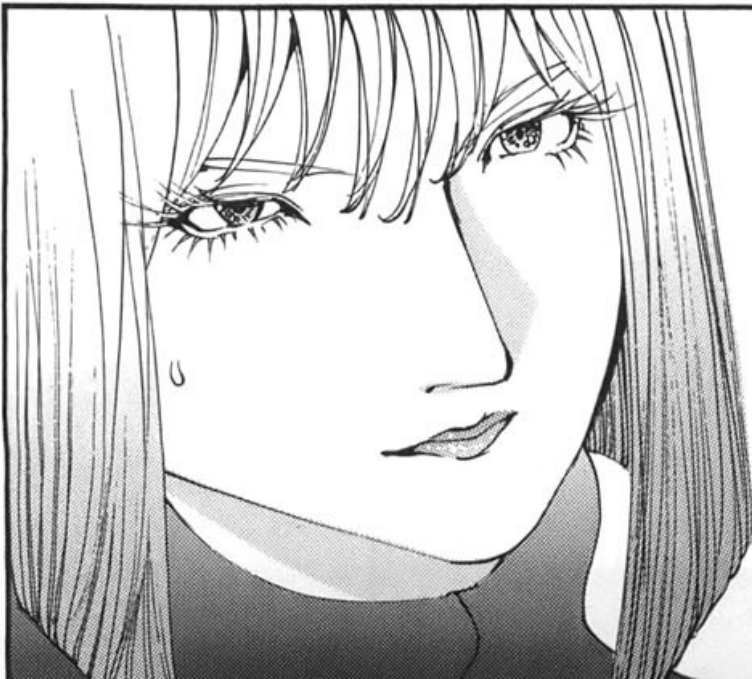
円筒内の
体験が
クララを
開眼かいげんさせていた



ソーマの効き目も
あった



彼女は
彼との関係を
きれいに
清算したいと
思った



しかし
円盤内で

貴方の肌の色を
なんのかのと
いつてたけど



それが
愛情の試金石だと



その試練を
受けてみましょうよ



麟
妾
誓うわ



貴方を

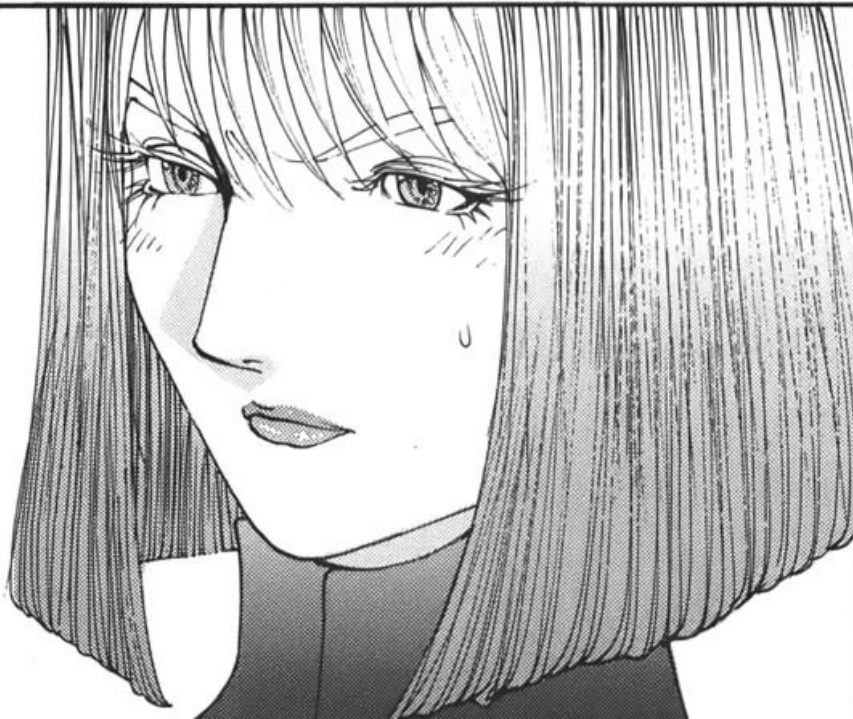
いつまでも
愛するってこと



二人は
決して
離れまい



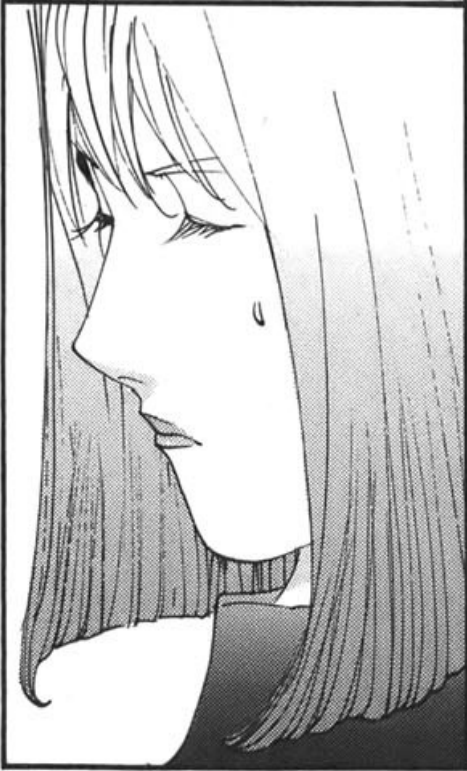
と誓った
あの堅い約束も
彼女は忘れては
いなかった



その
言葉の手前
自分のほうから
彼に

別れよう

ということには
やはり^{はほか}憚りを
感じるのだった



何とか
彼のほうから
そういい出して
くれないものか



それは
彼が
このイース世界で
どんなふう
扱われるか
にかかって
いた

ほんとうに
ヤプーか
どうかは
知らないが

現に
白人たちは
皆

彼を
ヤプーと
見て
疑って
いない
こと
だけは
事実
なのだ

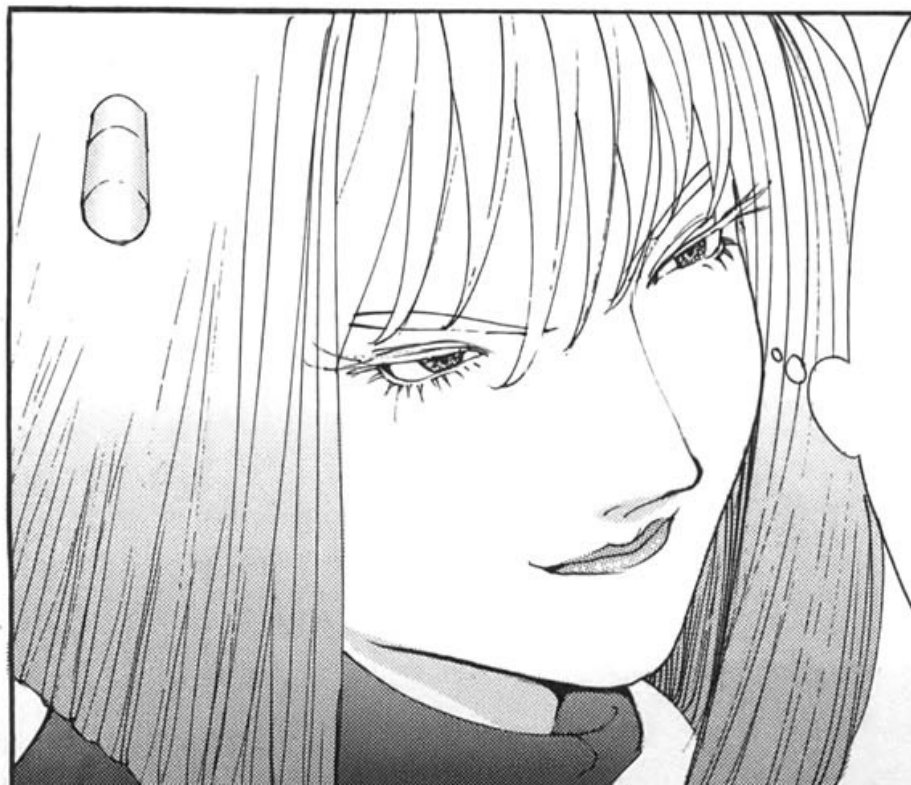
彼には
ここは
住みがたい
世界

そう悟って
二〇世紀球面に
帰る気に
なってくれればいい

もちろん妾^{あたし}は
いつしよに
帰る気はない



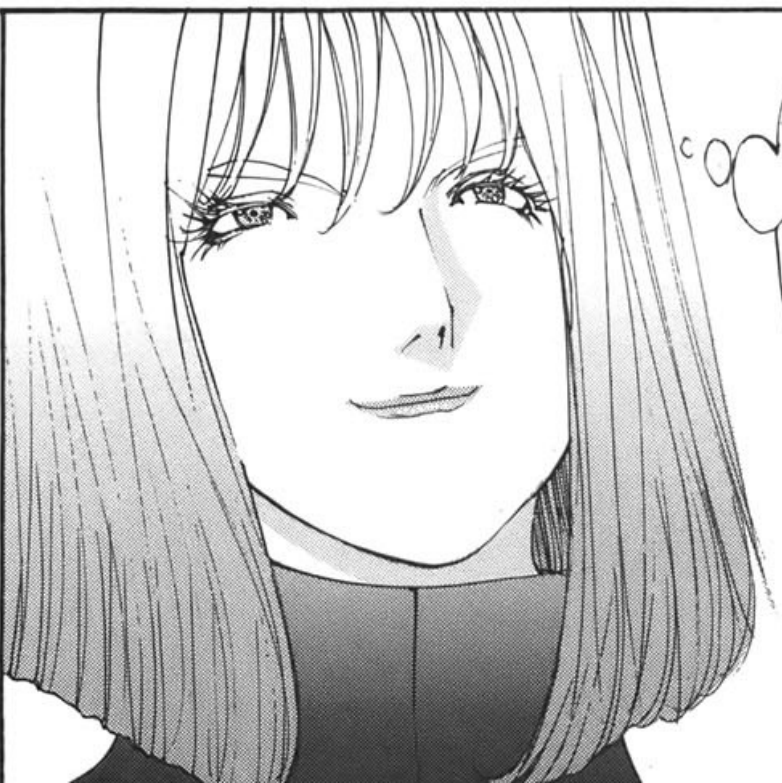
しかし円筒船を
手配^{あたし}してもらうくらいは
妾^{あたし}から頼んでやれる



もともと
麟一郎の麻痺を
直しに来たので
あるから

元の身体に
もどした彼を
二〇世紀の世界に
帰らせてやれば

それ以上の
責任は
ないはずで
あった



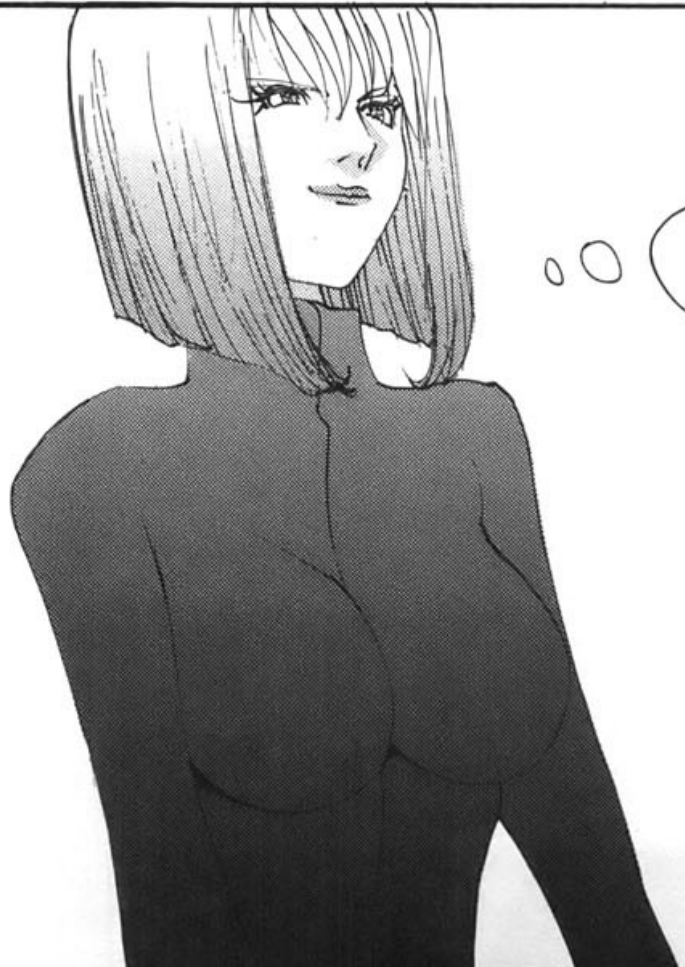
^{あたし}妾はそのうえで
この素晴らしい
未来世界をできるだけ
享樂すればいいの
だわ

滞在できるだけ
滞在して
帰らねば
ならなくなったら
帰るとしても

もう
麟と
いっしょに
なる気は
しない

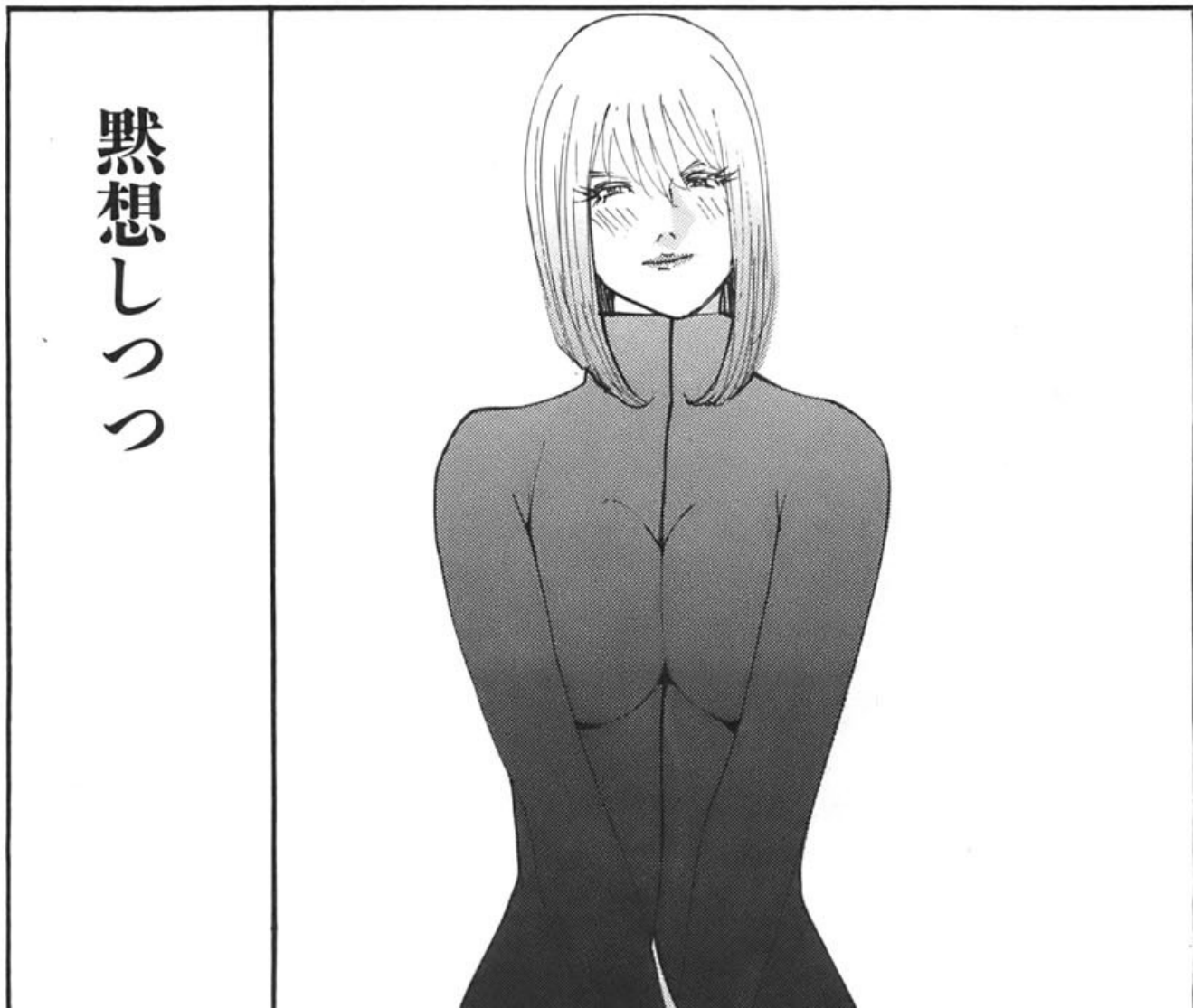


相手は
やはり白人で
なければ
……

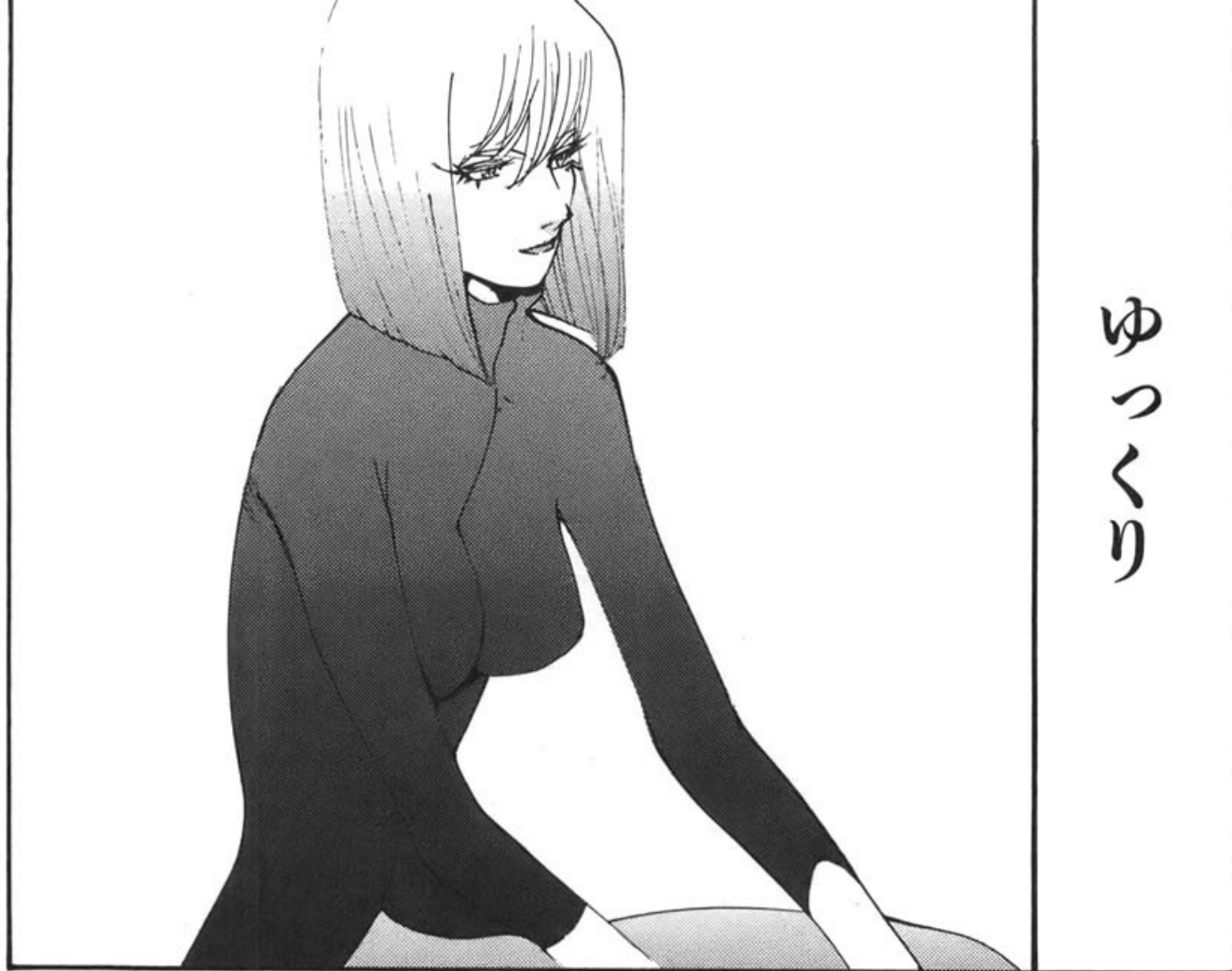




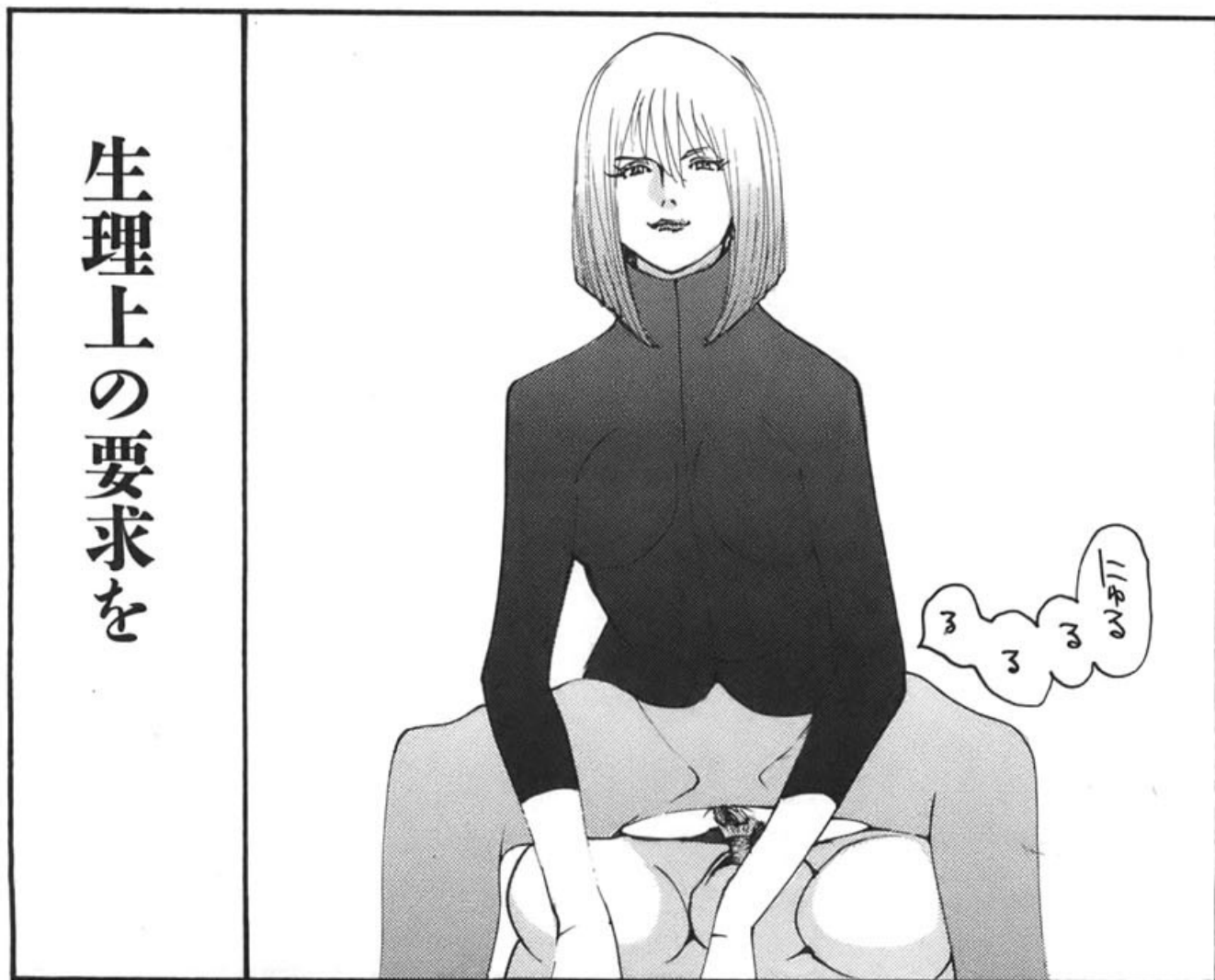
あの
ウィリアムの
ような……



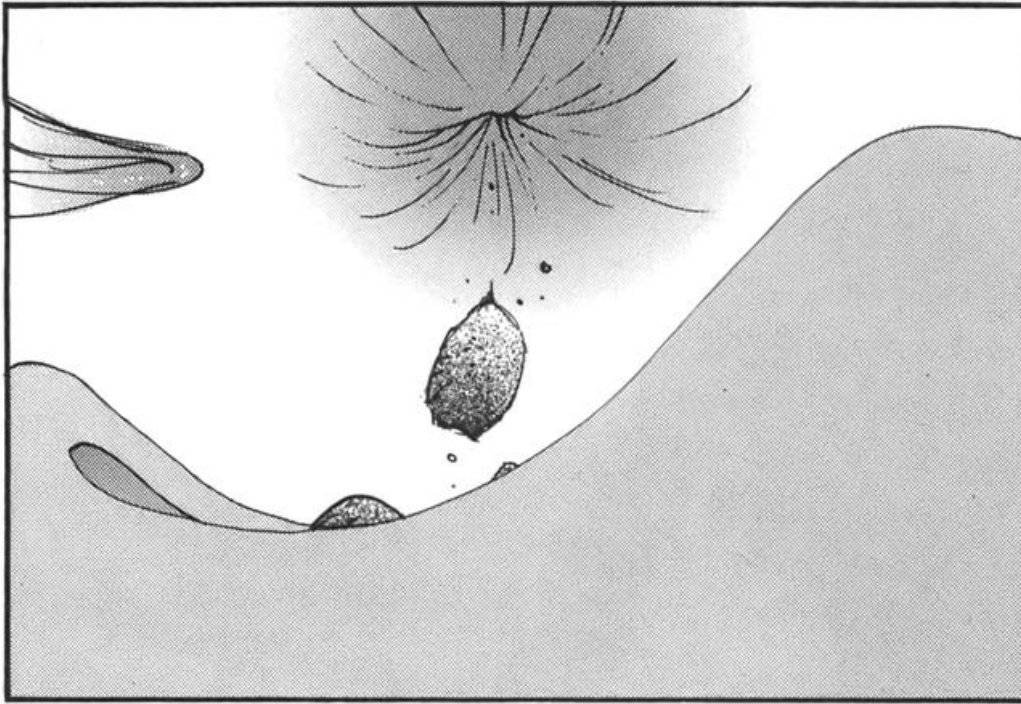
黙想しつっ



ゆっくり



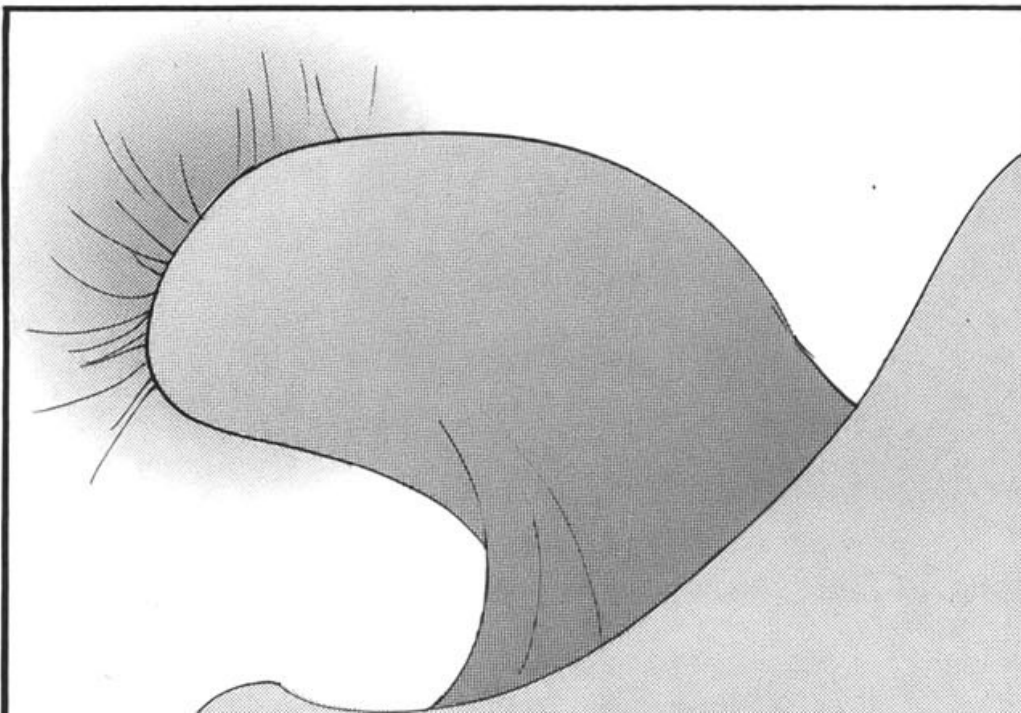
生理上の要求を



済ませた

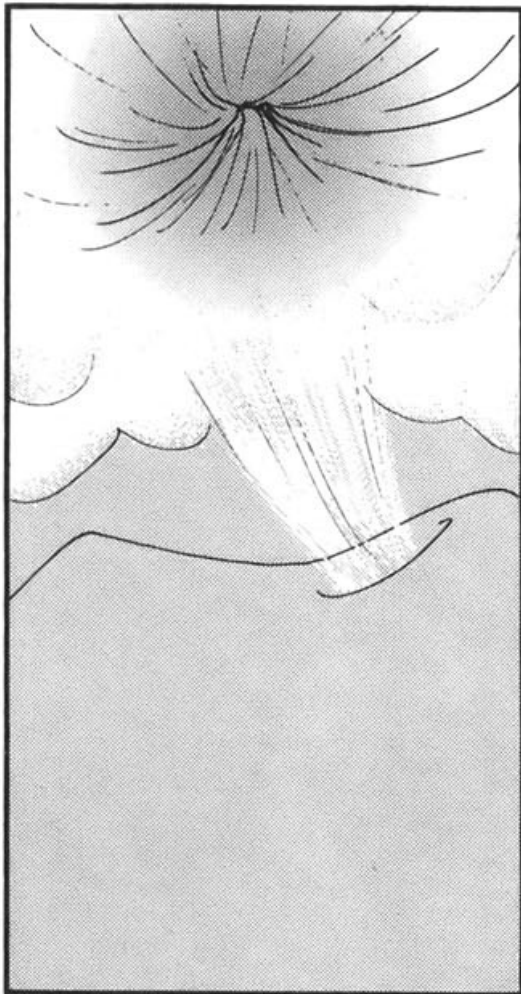


彼女は

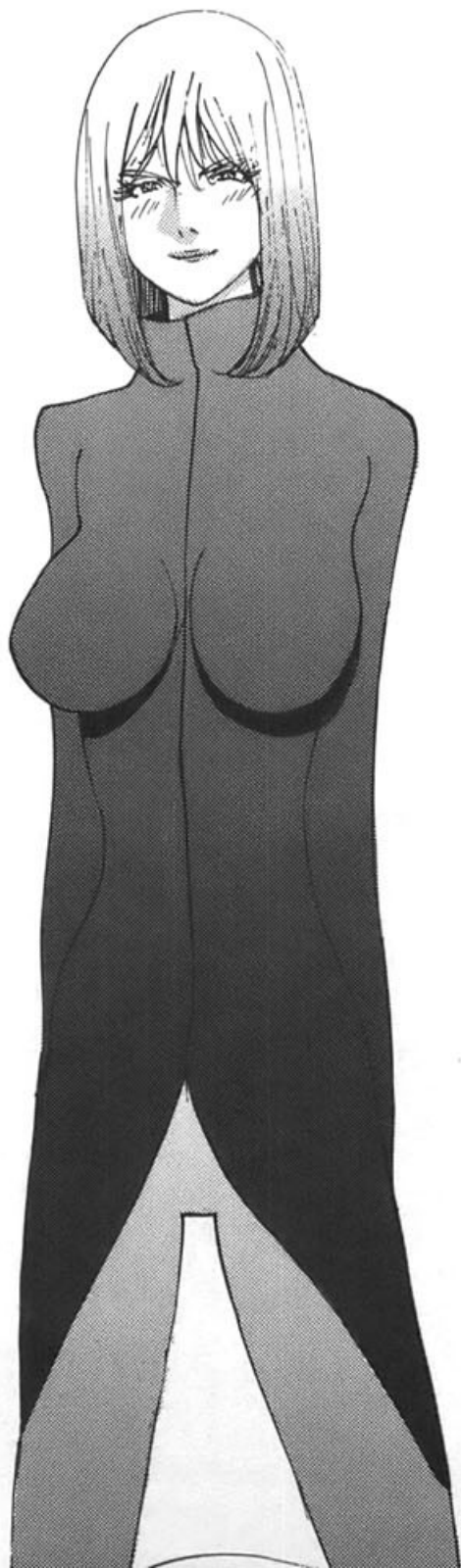


拭^{ぬぐ}われ

乾かされるのも




急いで
立ち上った



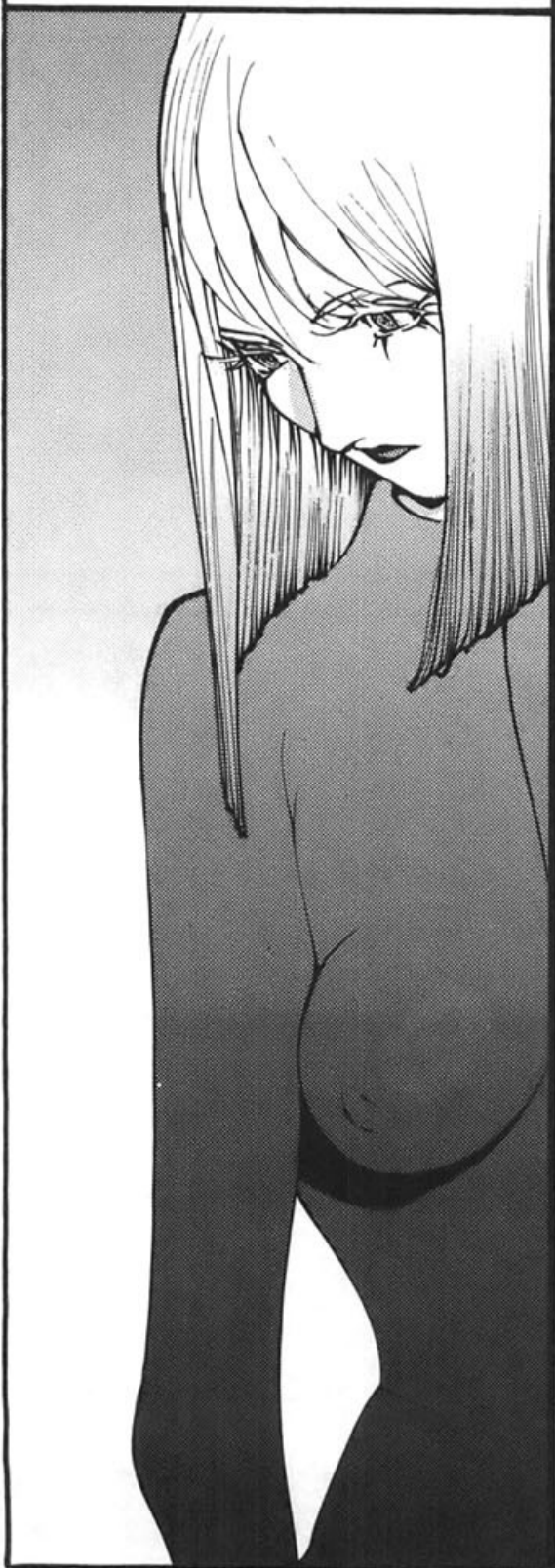
そこそこに



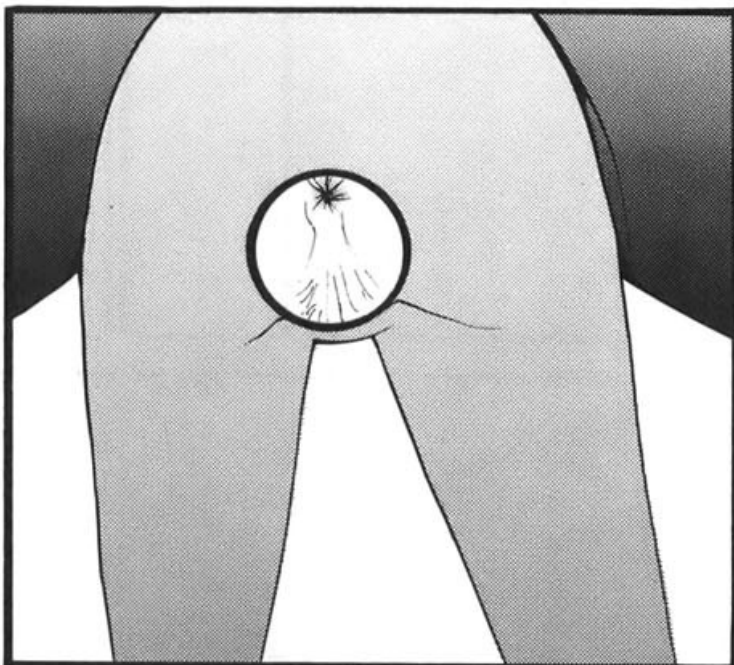
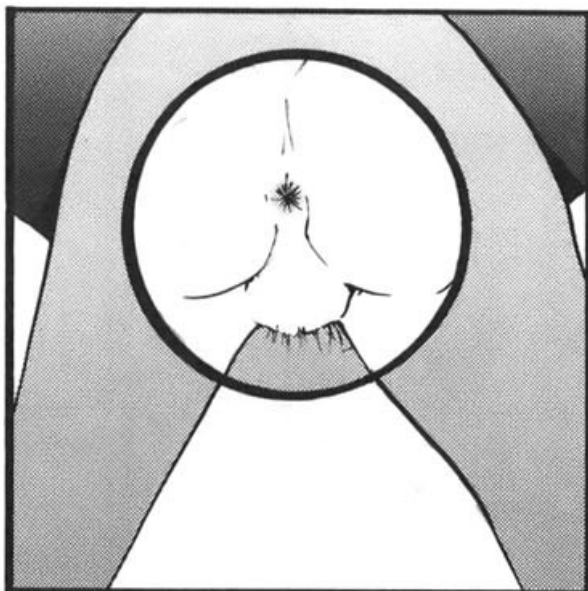


— そうだ
ウイリアムが
隣室でさぞ
待ちくたびれて
いることだろう

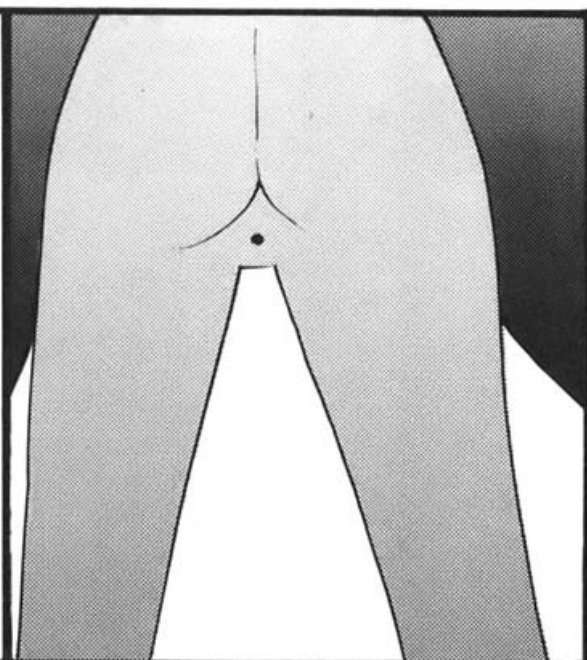
下を見ると



ホルボグン
孔釘が

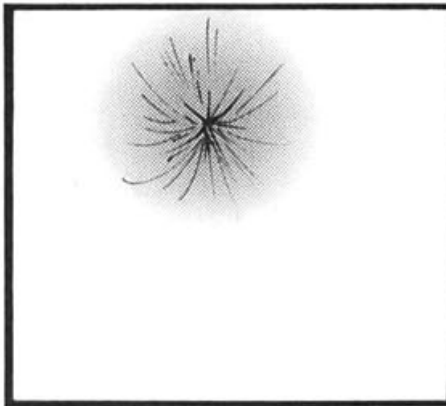


閉じた

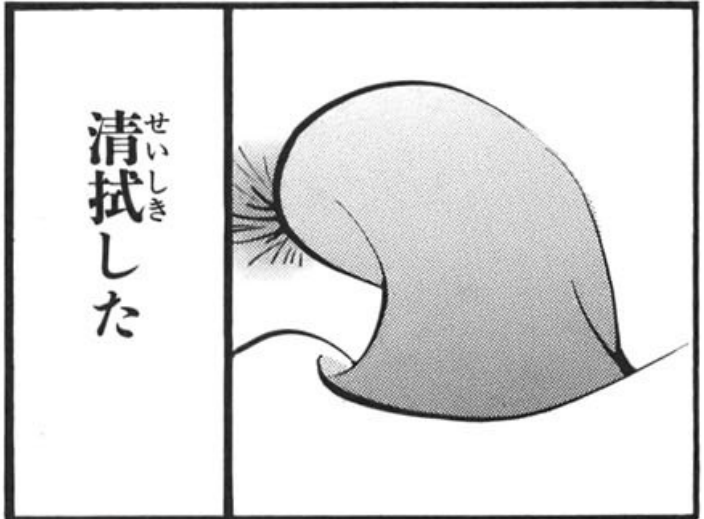




ばかりの口が



食器を



せいしき
清拭した



金色の毛が鼻の孔の上に
載ってそよよいでいる

舌なめずりを
している



第十二章 水晶宮の上階と地階で
— 第三話 —

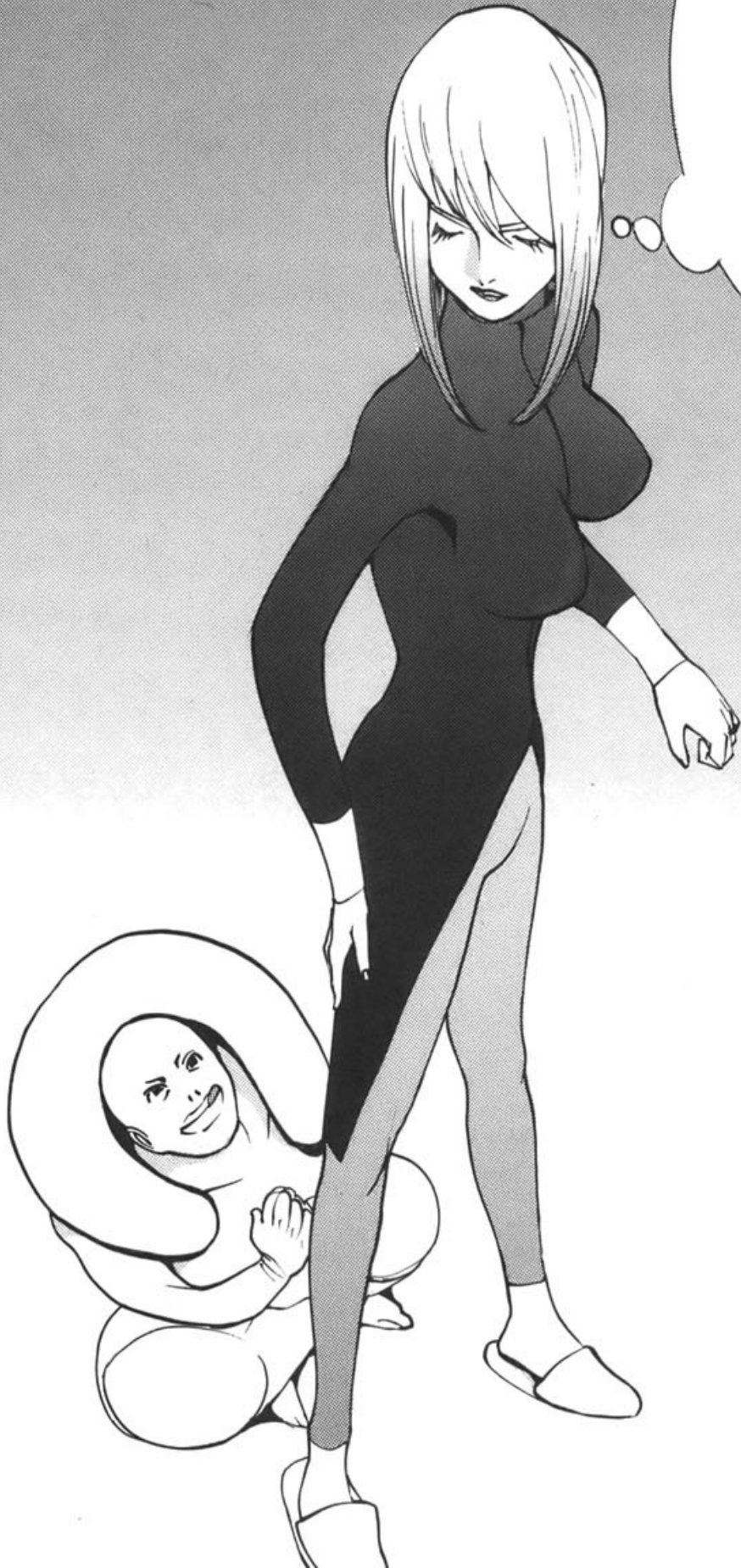


——^{あたし}妾が
今まで
食べたものは
イース人とは
違うから

こいつ
味が変わだといつて
驚いているのかも
しれない



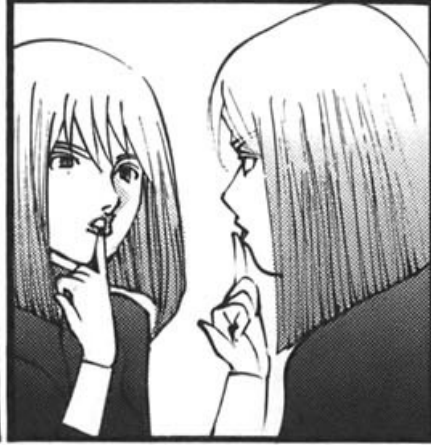
それとも
か
噛まずに
の
燕みこんで
しまうのかしら
……



とりとめも
ないことを
考えながら



化粧機に
よって
ちよつと
顔を直すと
クララは



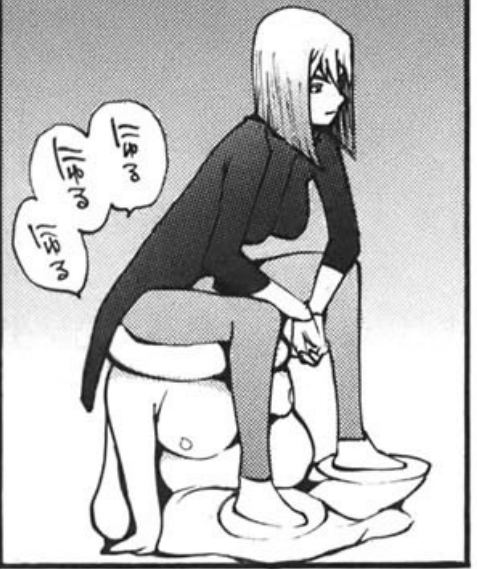
ふたたび
先ほどの
応接室に
自動椅子を
駆って行った



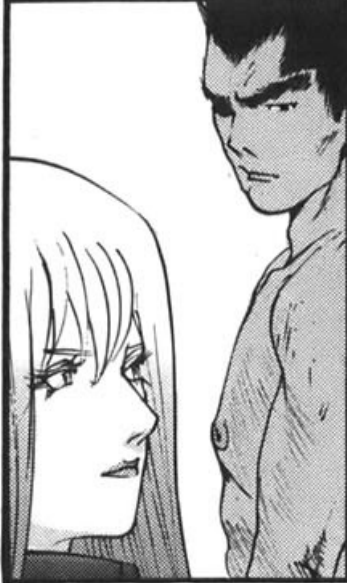
お待ちとおさま
ウイリアム



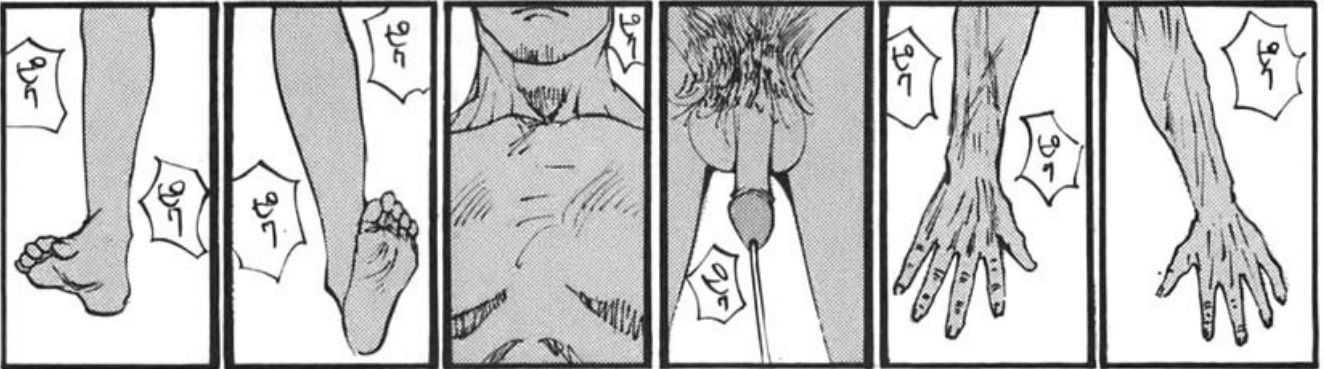
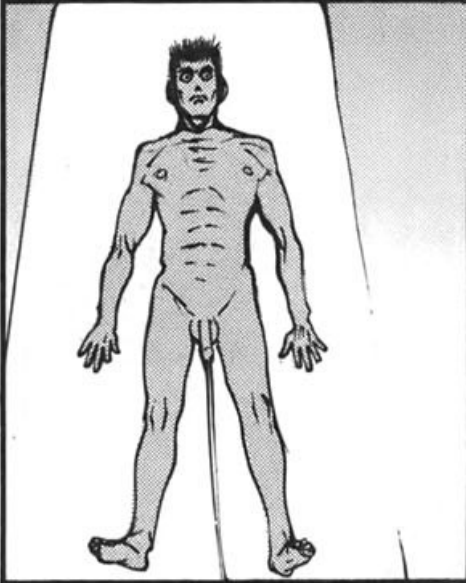
ちやうど
クララが
セツチンに
跨またがって



鱗一郎との
関係を
あれこれ
思いめぐらして
いたころ



獣医科手術室の
寝台に
横たわっていた
鱗一郎は



にわか
に五体が
回復して
きたの
を感じた



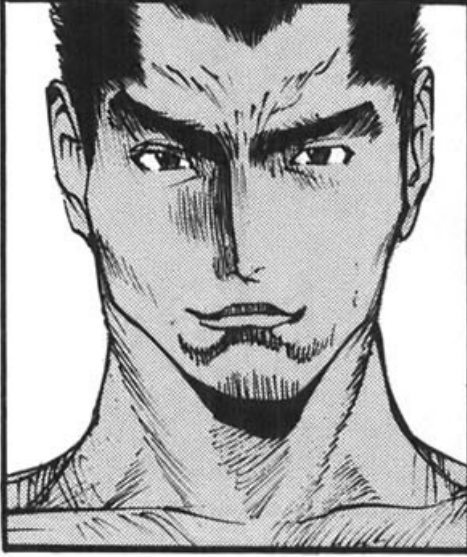
獣医が
注射針を
ブルブル
震わしたことが
かえって
幸いして



薬のまわりを
促進したため



注射後
十分あまりで
毒が緩解して
しまったのである



麟一郎は
半身を起して



自ら
カテーテル
導尿管を
抜き去った





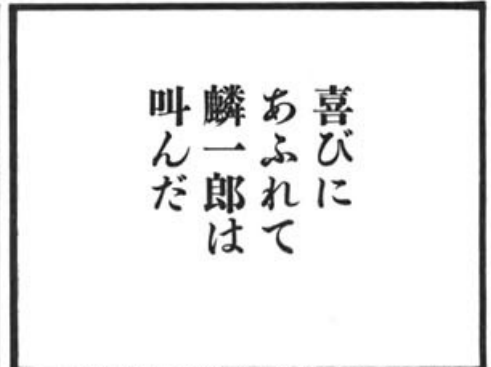
クララ
直った
動けるぞ！



何時間
ぶりかて
自分の体が
動かせる



あつ
ヤプーが……



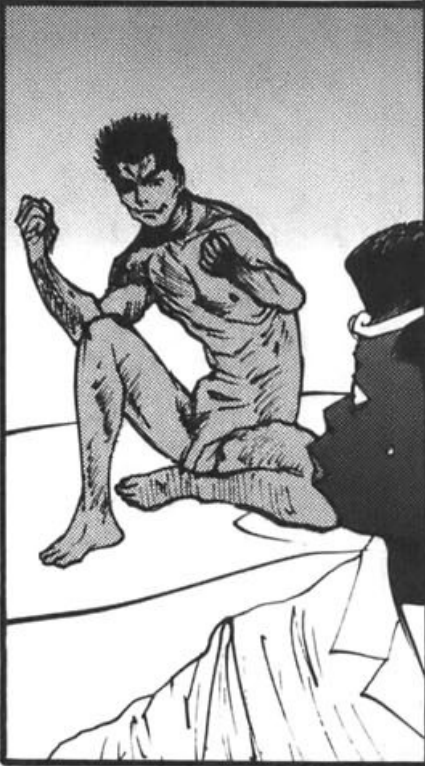
喜びに
あふれて
麟一郎は
叫んだ



十四分三十秒に
タイム・スイッチを
かけて
安心していた
ジムは



ヤプーが
寝台から
むっくりと
起き上ったの
を見て



突然の大声とともに

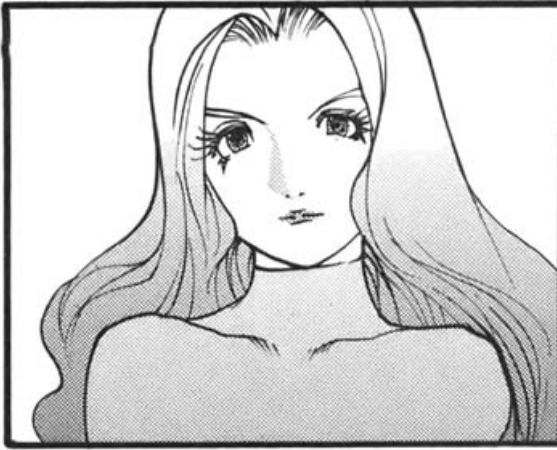


仰天して
しまった



予定より
五分も早い

さつき
ポーリオン
だけが来て
クララが
来なかったのに



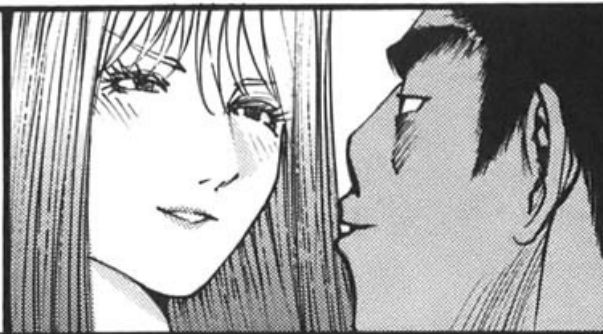
不安を
感じていた
麟一郎は



一刻も早く
恋人に
出会って



無事を
確かめたかった



しかし
不案内な
この広大な
屋敷内

一人では
捜せない



それに第一
素裸じゃ
困る



円盤の中へ
素裸で
はいったのが
今度の苦難の
原因だったんだ



まず
着る物を
手に入れて



と
鱗一郎は
思った



獣医に
向って
頼もうと
したが



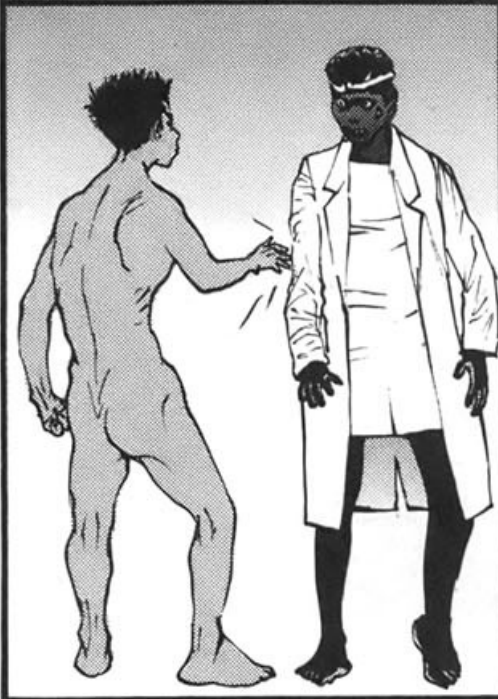
英語で
話すのは
いっこう
不得手な
鱗一郎



とっさの
際とて



とだけいって
獣医の着ている
手術着を
引っ張って
みせようと
したところ



なお
言葉が出ずに



クロース
着物
……
クロース
着物
……



獣医は
動転している
際とて

何か
危害でも
加えようと
するのだと
誤解してか

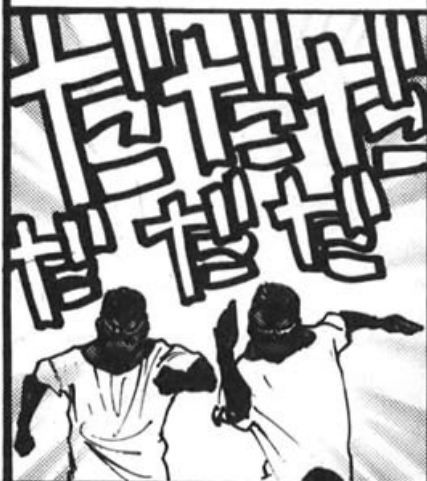
いきなり
その手を
振り払って
助けを求めた



麟一郎は

叫びを聞いて
奥の控え室から
二人の船員が
駆けつけて来た

来てくれ
ヤプーが乱暴する
……



ということを伝えようとしたが



自分は
乱暴するのでは
ない



着物を
求めているだけ
なんだ

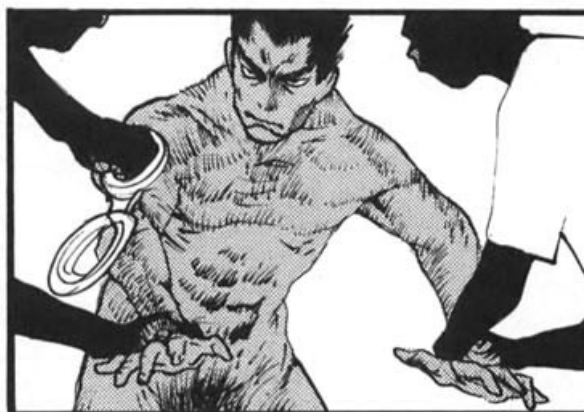
冗談じゃない



彼らは
耳を貸そうとも
せず



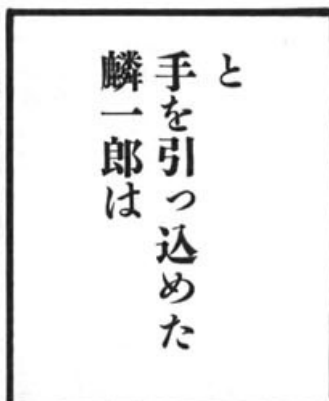
いきなり
手錠を
持ち出して



彼の手を押え
枷かせを掛けようと
するのだ



喧嘩けんかせずに
こちらの
希望を
わからせたい



と
手を引つ込めた
鱗一郎は



との
一念から



笑いかけ
ながら

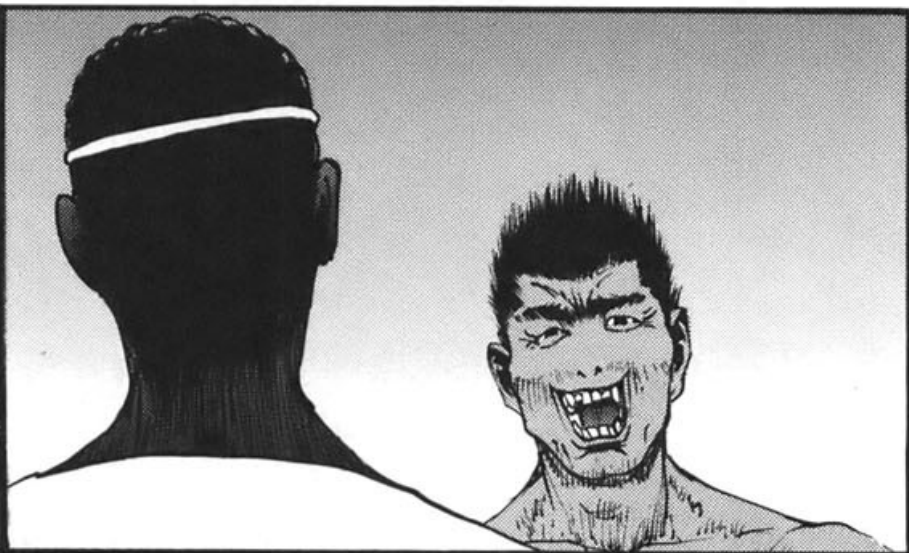
腹の虫を
抑えながら



一人に

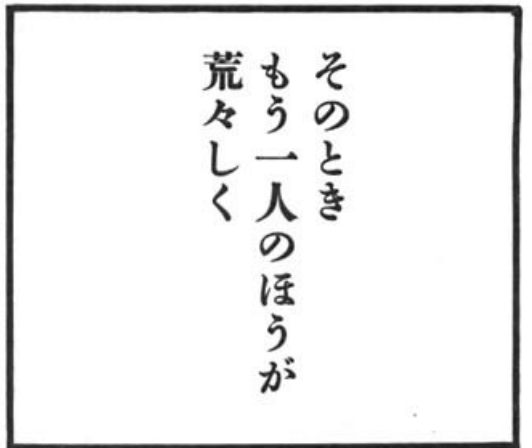


何とか
言葉を
搜そうとした

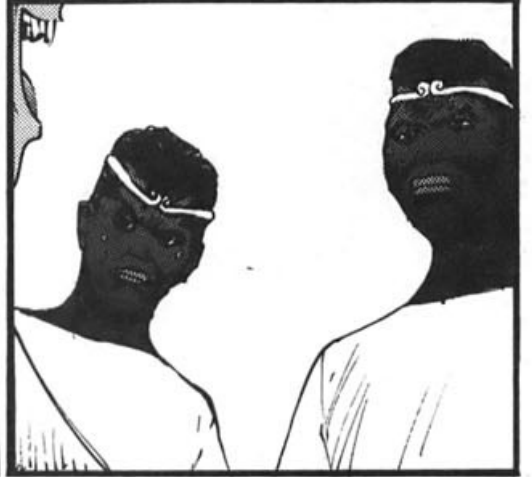




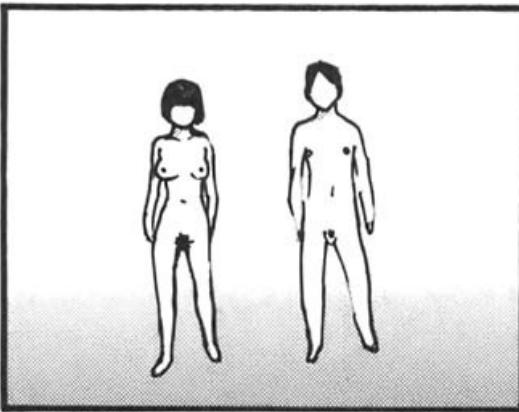
ヤプー
おとなしく
せんか!



そのとき
もう一人のほう
が
荒々しく



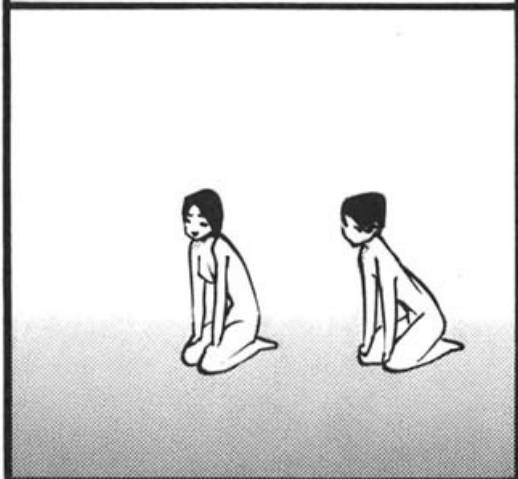
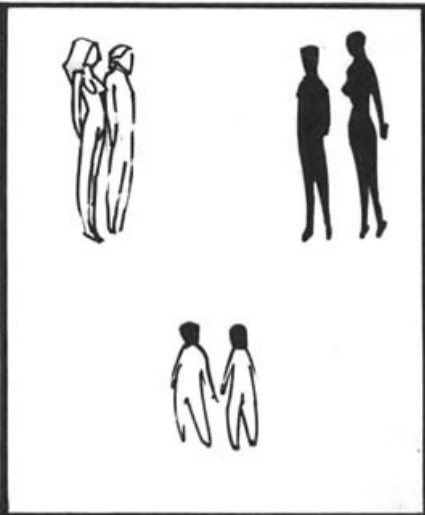
とい
うなり
いきなり
拳骨げんこつで頬ほおを殴りつけた



普通の
原ヤプーが

ヤプーは
服従本能の
旺盛な動物
といわれ

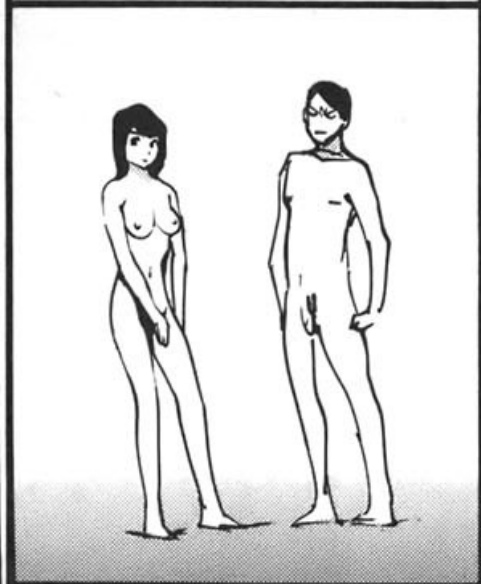
人間や
半人間に
反抗するなどと
いうことは
決してない

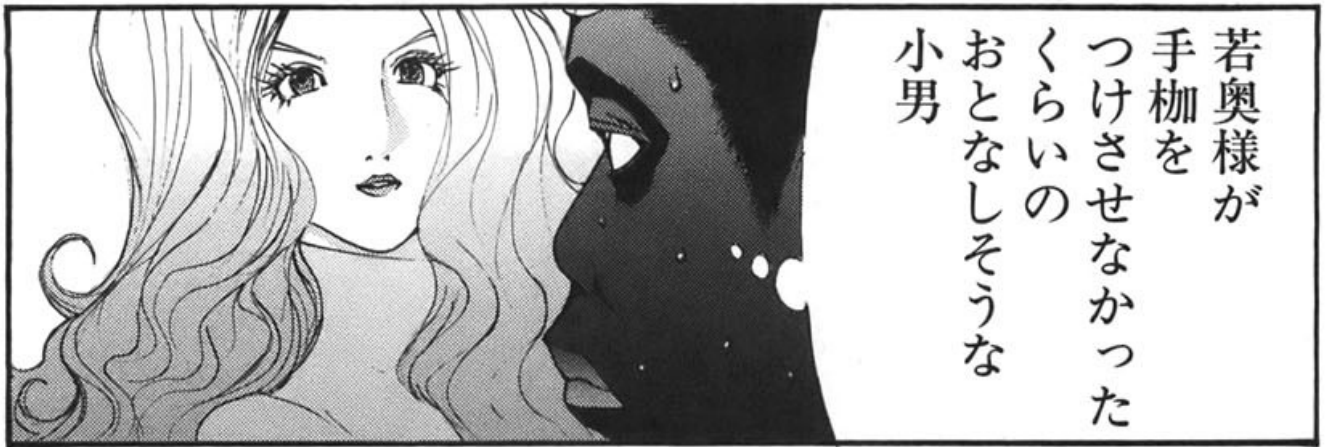


それを
知らぬでは
なかつたが

殴つたりすれば
怒ることは
当然である

しかし
未調教の
土着ヤプーは
別物で





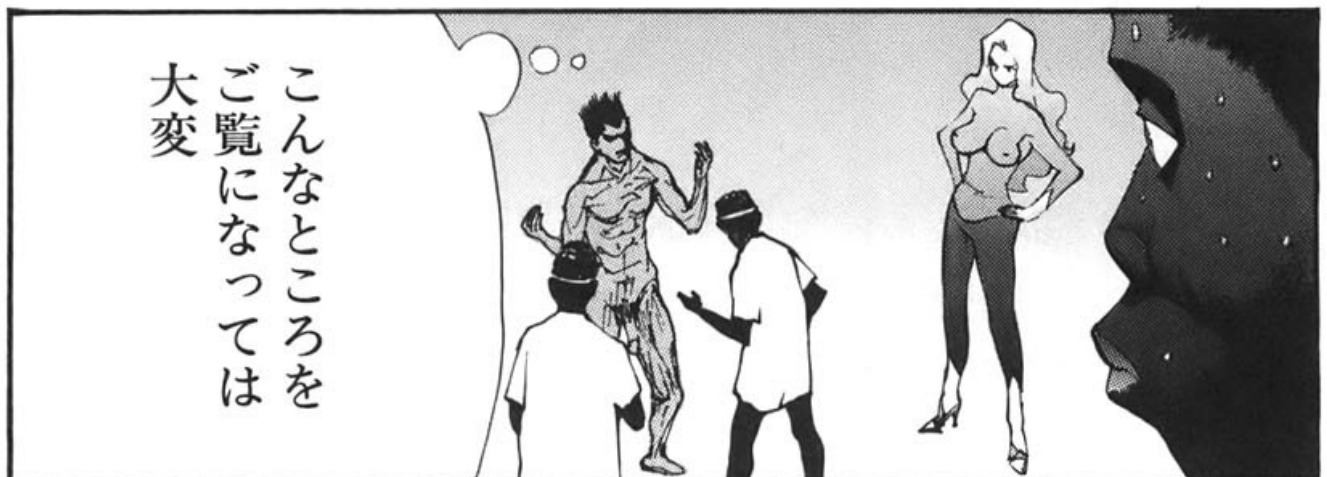
若奥様が
手枷を
つけさせなかつた
くらいなの
おとなしそうな
小男



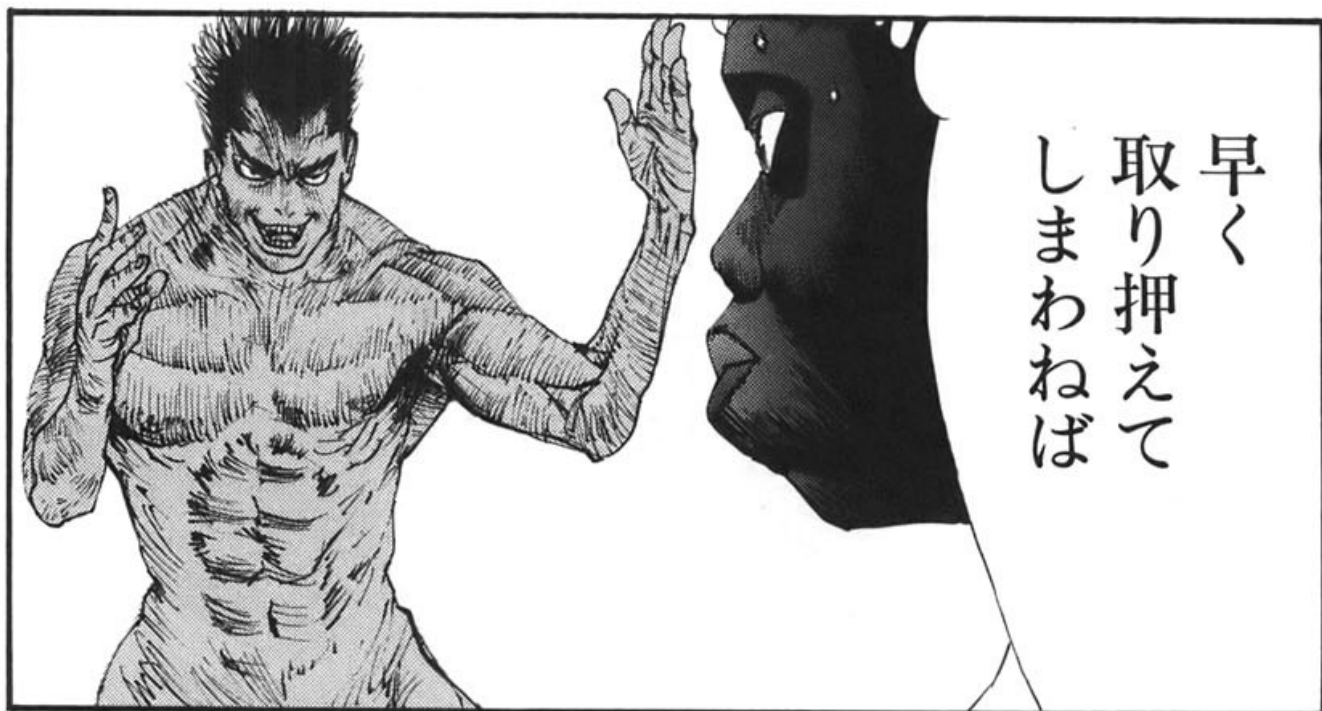
暴れたって
何ほどのことが
あろう



ぐずぐず
しているうちに
若奥様が
お見えになって



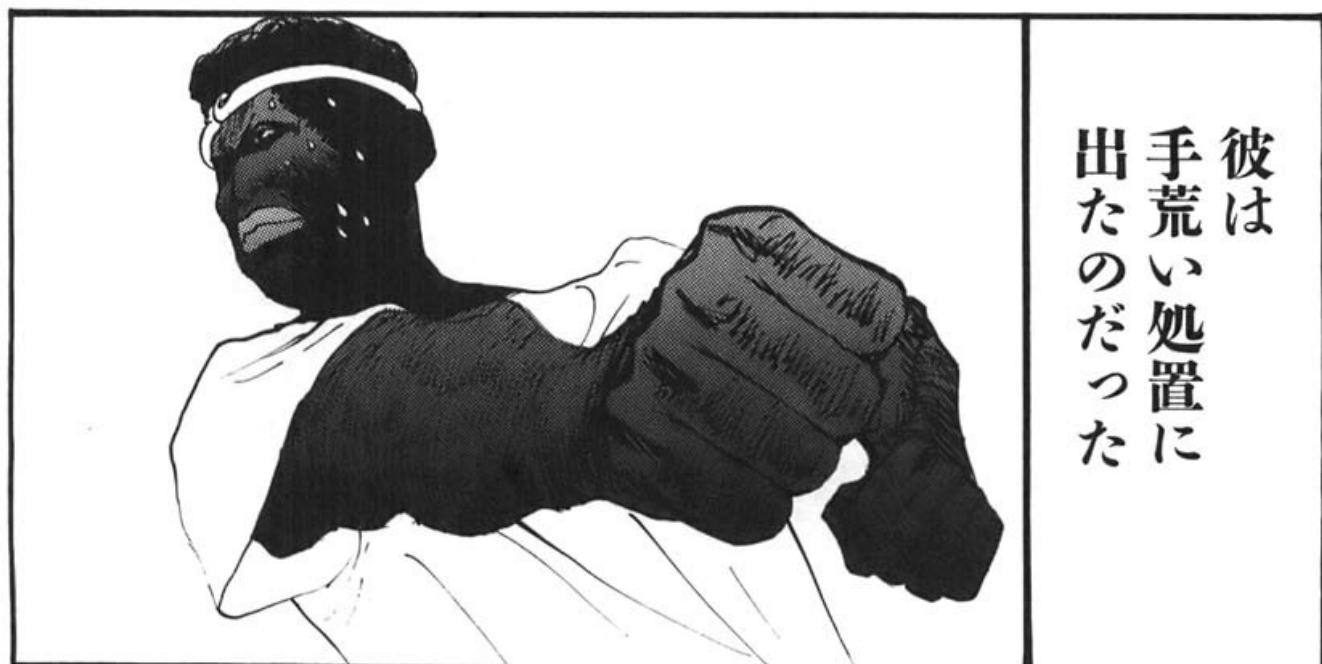
こんなところを
ご覧になっては
大変



早く
取り押えて
しまわねば



あせ
焦りから
と
いった



彼は
手荒い処置に
出たのだった

鱗一郎は
憤怒に
自制力を
失った

円筒形の
船倉で

この二人から
言語に絶する
焦熱地獄の
拷問を
受けたことは



忘れようと
したって
忘れられる
もので
なかった



恨みかさなる
奴らだったが



クララに
会いたいばかりに
下手に
出ていたのだ

それを
何事ぞ

手錠ちようちやくだの
打擲うちやくだの

怒鳴ると
彼は



小兵こひょうながら
高校時代から
学生柔道界に
知られ



今段つた8号に
つかみかかった

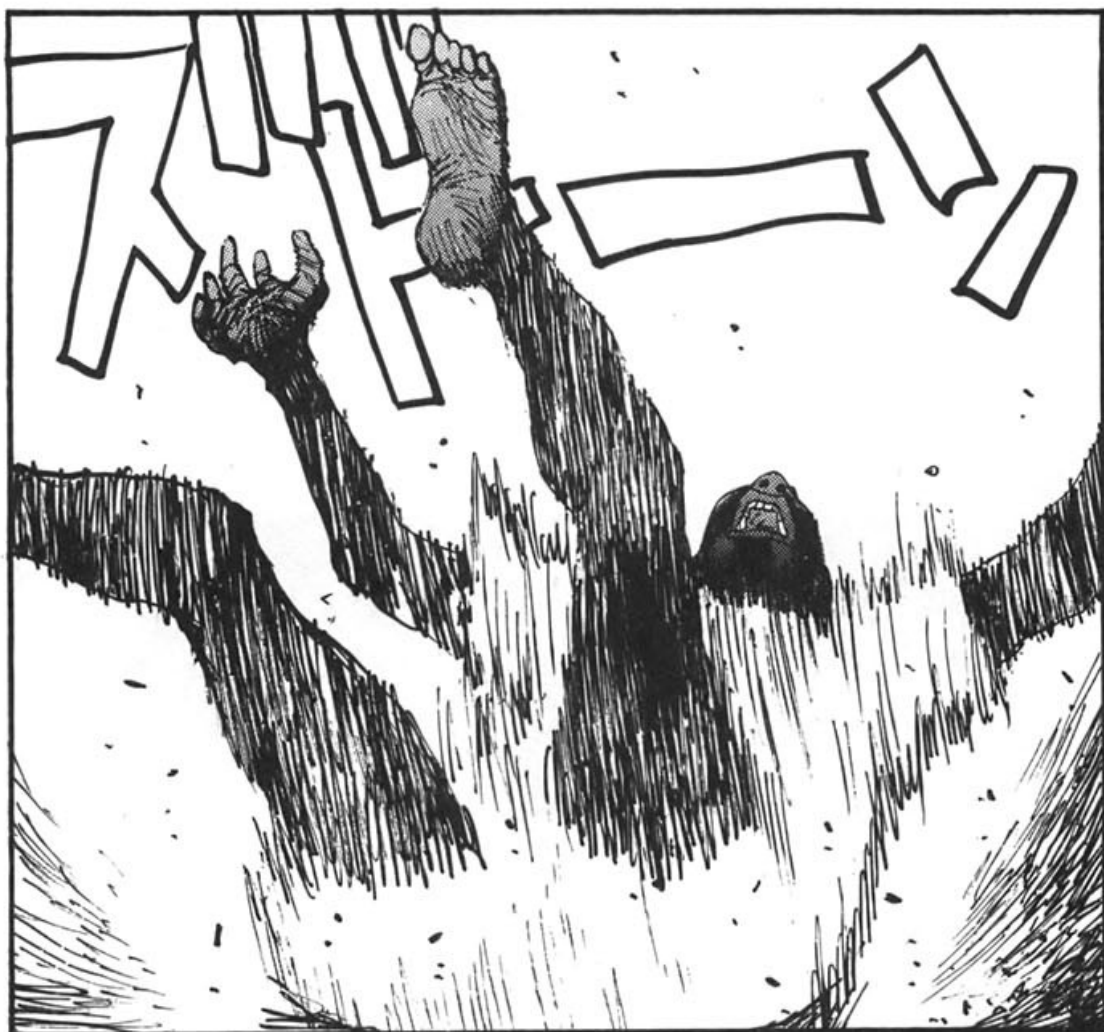


華麗な投げな技わざで
鳴らした
柔道五段の
鱗一郎である

大きな黒いG8号の図体が



地響き立てて床に落ちた



途端に13号が
後方から襲いかかったが



危うく
身をかわして



あざ
鮮やかに
決った



腰車
いっせん
閃



二人とも
受身を知らないから



骨を痛めて
起き上れないところを

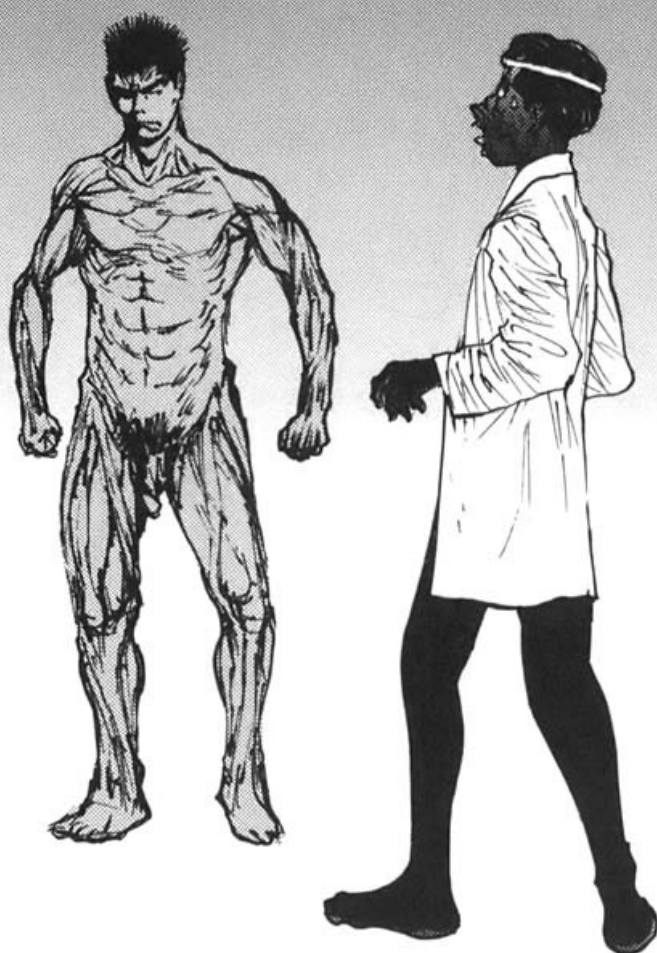
あてみ
当身で気絶させた



獣医の
黒い顔から
血の気が
引いた



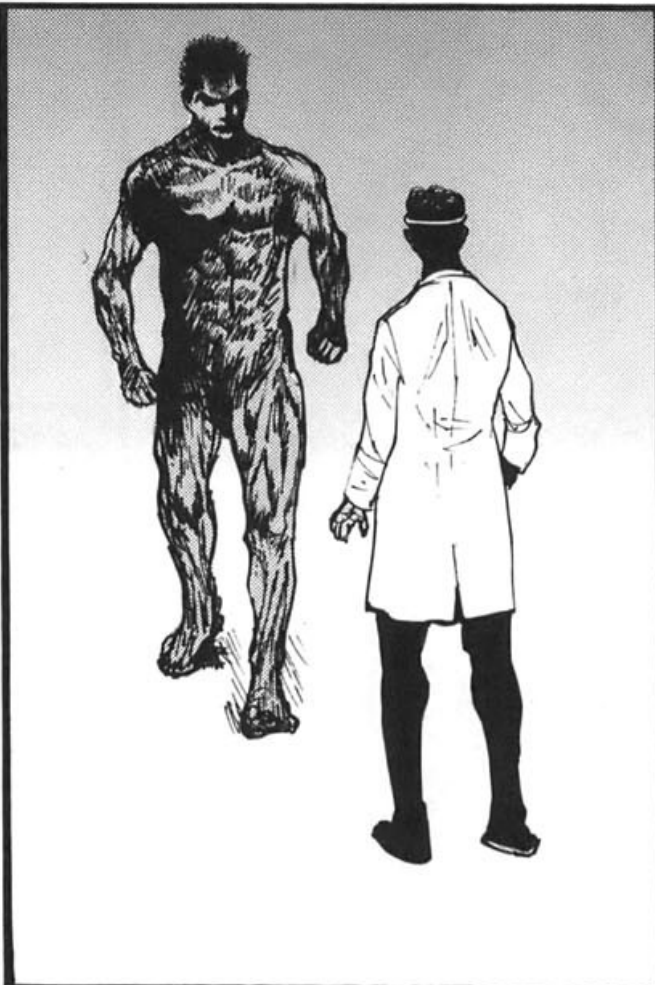
この狂暴な土着ヤプーの前に
ただ一人立つ恐怖……



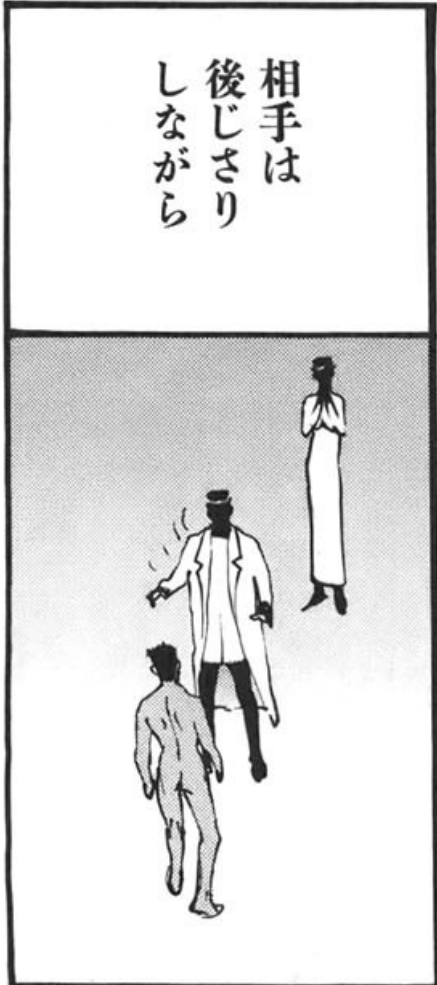
背後では看護婦も
震えていた

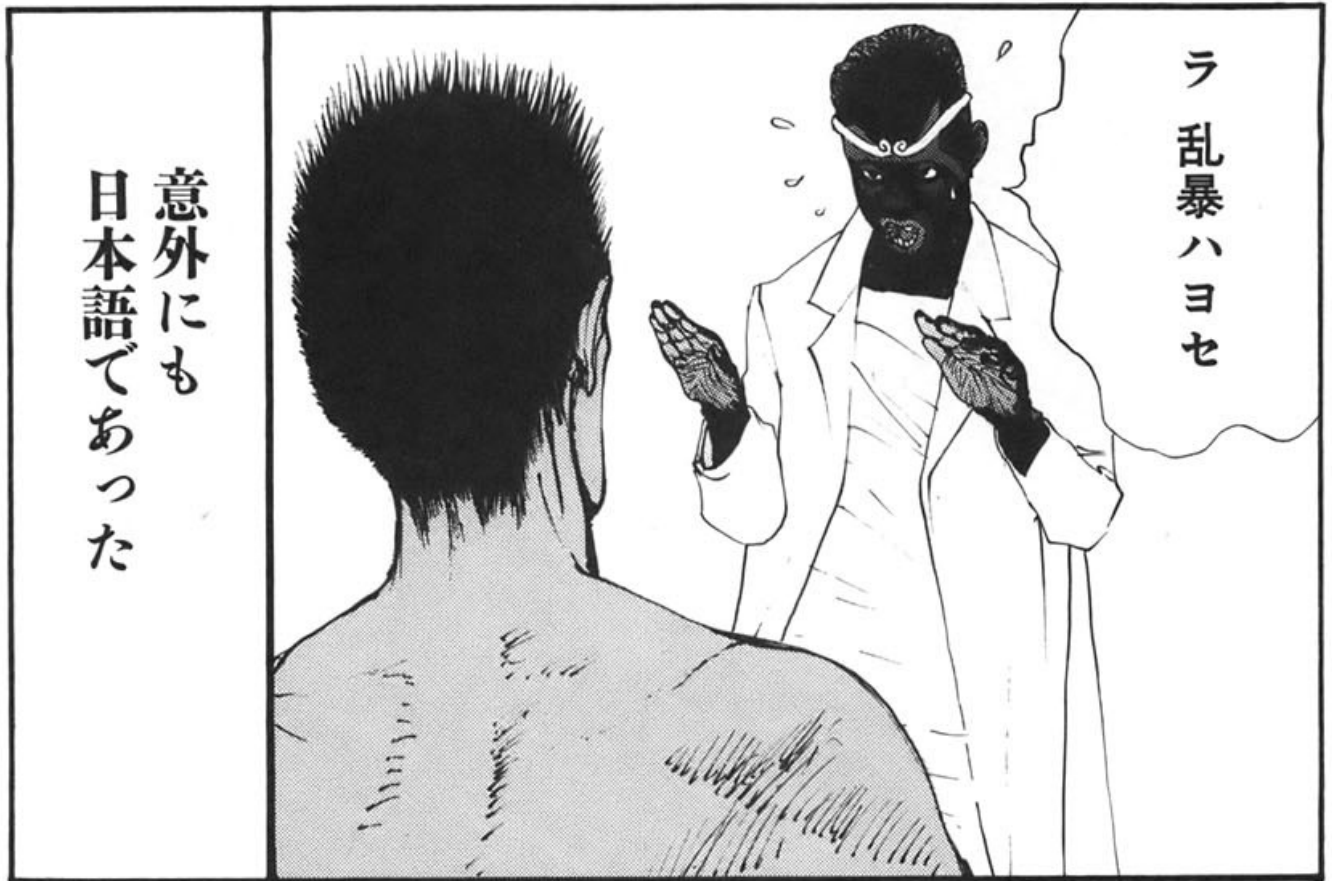


麟一郎は
獣医のほうに詰めよつた



相手は
後じさり
しながら



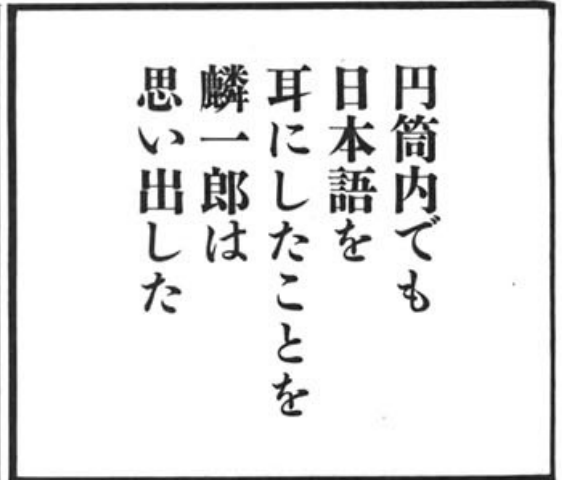


ラ 乱暴ハヨセ

意外にも
日本語であつた



そうだ
ここでは
日本語が
通じるのだな
……

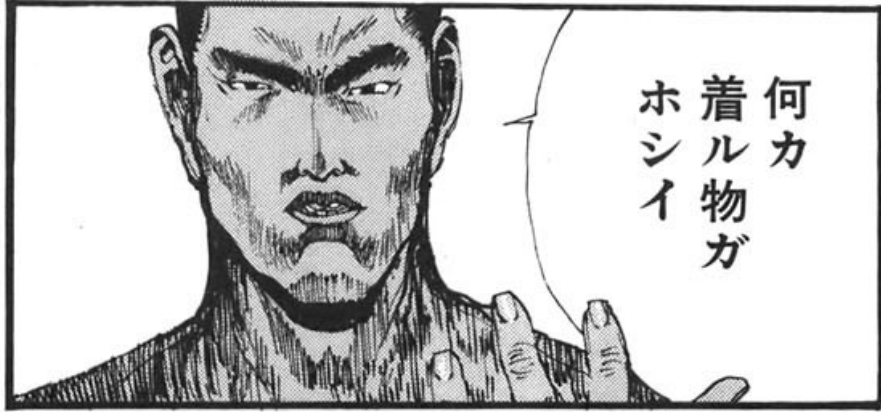


円筒内でも
日本語を
耳にしたことを
鱗一郎は
思い出した



コッチジャナイ
オ客様ノ
ゴ用ナンダヨ

何か
着ル物が
ホシイ



ジムは
どす青くなつた顔に
素^すつ頓^{とん}狂^{きやう}な
表情を浮べた

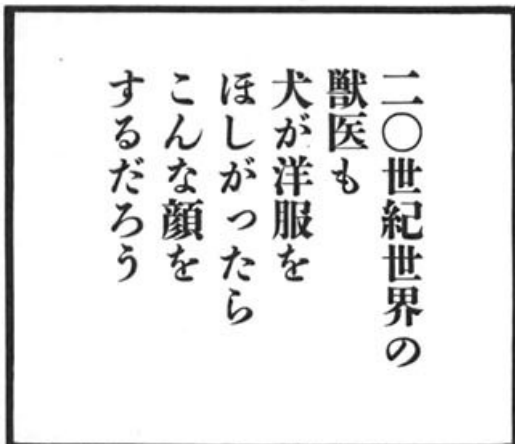
着ル物
オ前ガ?



はあ〜っ?!

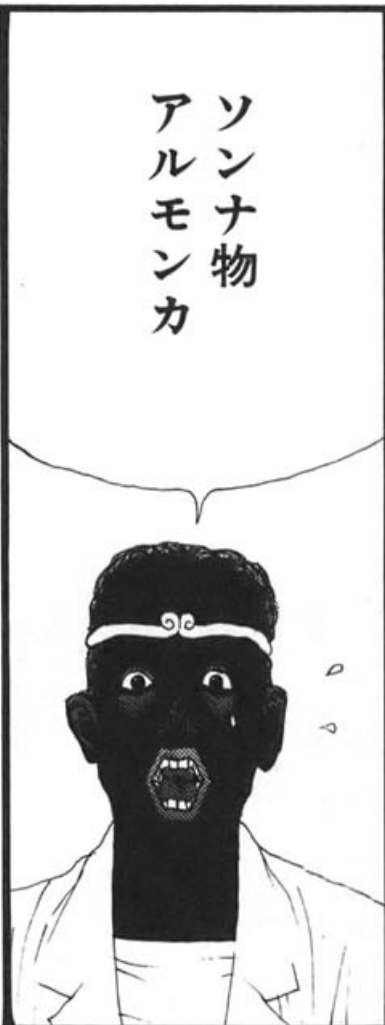


二〇世紀世界の
獣医も
犬が洋服を
ほしがつたら
こんな顔を
するだろう



何か
着ル物が
ホシイ

ソナ物
アルモンカ



ナニツ



思わず
麟一郎は
語気を荒らげたが



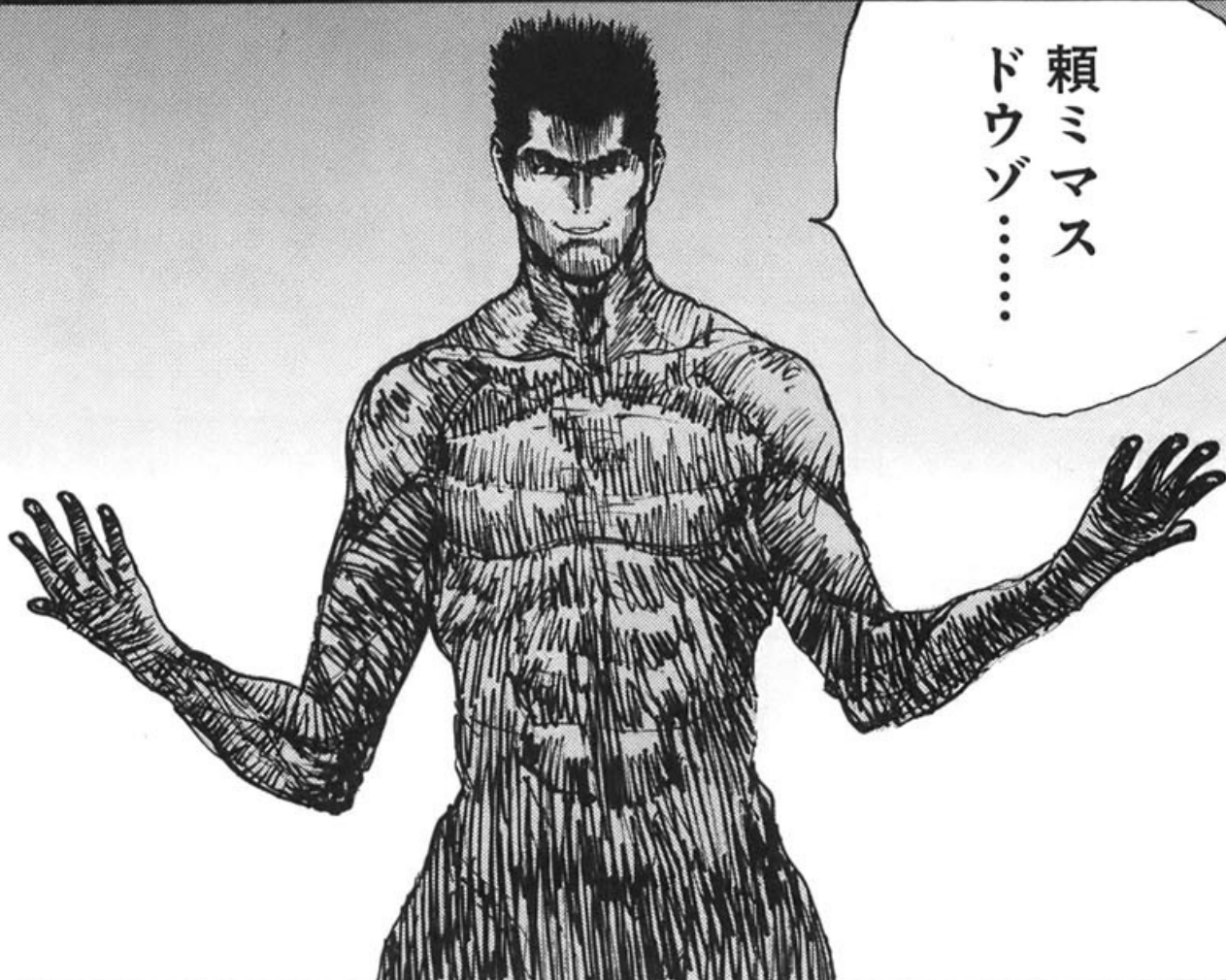
ソナナコト
イワズニ

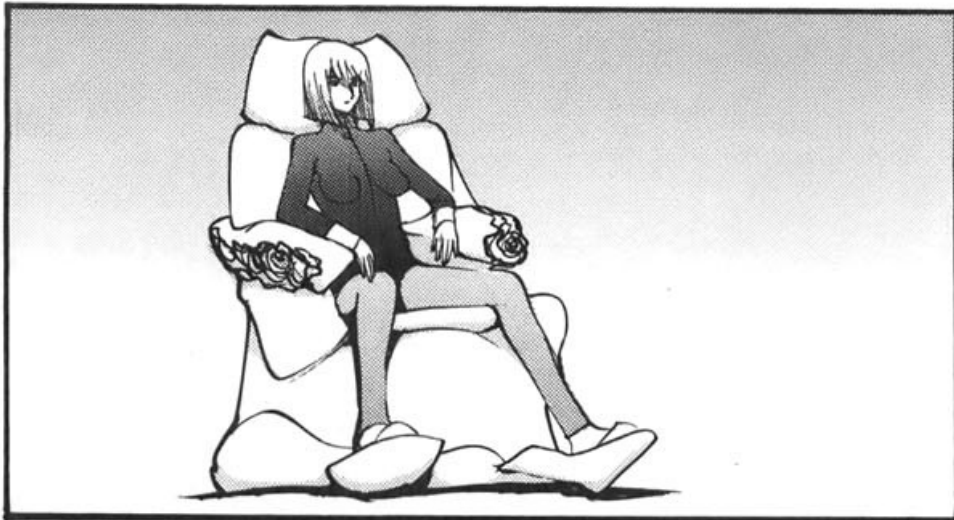


思い直して
今度は下手に
頼んだ



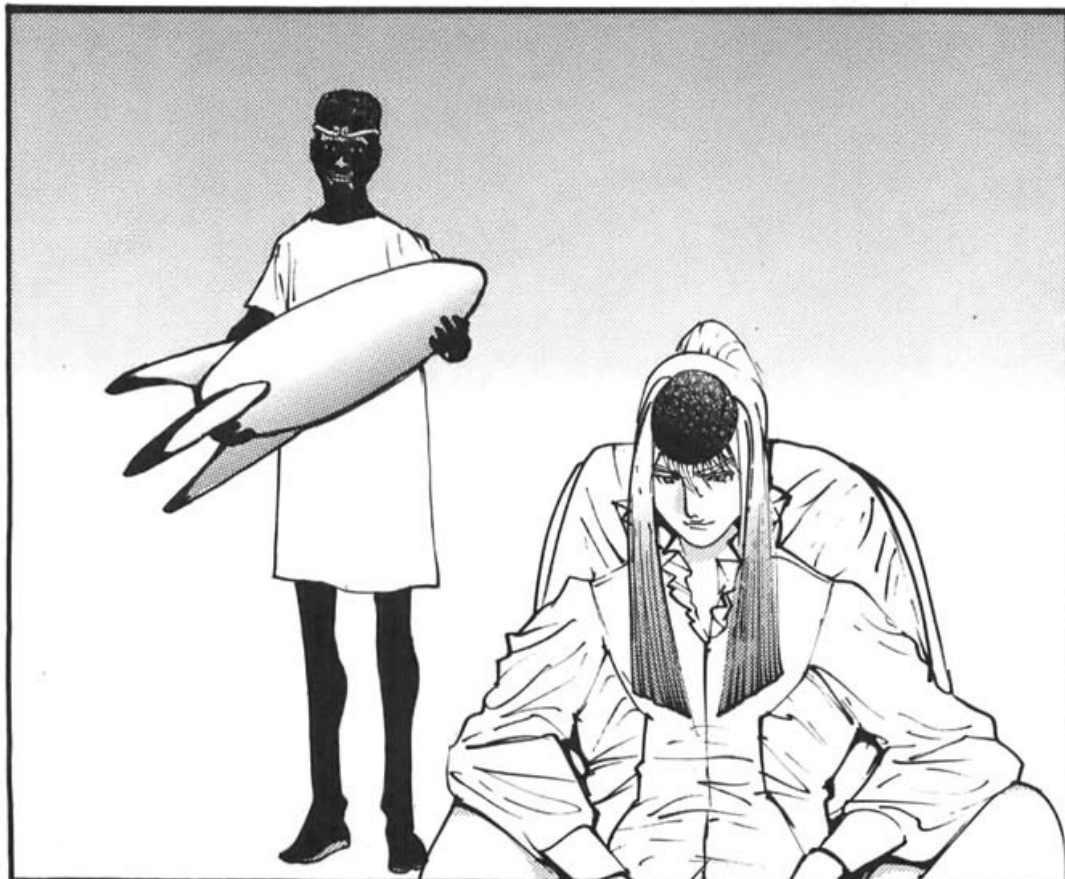
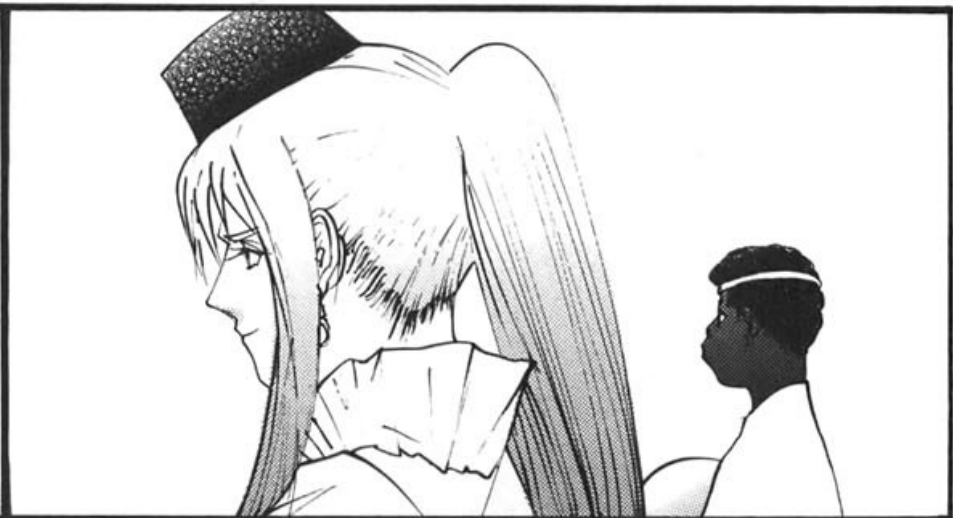
頼ミマス
ドウゾ……





オート・チエア
自動椅子に乗って
応接間に戻った
クララは

ウイリアムの横に
侍立する
従者M9号が



両手にひとかかえほどもある
宇宙船の模型を
持っているのを認めた

雑誌で
よく見た
ロケット船
だった

クララ
ビクミー・デュエル
矮人血闘では
僕の選んだ奴は
負けましたけど

勝ったら
引出物にしようと
思っていた
この置物は
あの勝負を
離れて

やはり貴女に
プレゼント
贈物したいと思って
今持ってきてさせた
ところですよ



立派な
宇宙船の
模型だことね



宇宙船としては
いちばん旧式な
ロケット船
ですがね



宝船トビキネダンといつて
枕元に置くと
幸福が来る
というんです

作画 **江川達也** 原作 **沼正三**

発行・幻冬舎コミックス 発売・幻冬舎

BIRZ COMICS

POO, THE HUMAN CATTLE

gawa Tatsuya Numa Shozo

家畜 人

かちく
じん

毎月30日発売 ● 490円 (本体価格467円)

月刊コミックバースにて

絶賛連載中!!

○幻冬舎コミックスHP▶ <http://www.gentosha-comics.net>

●D693円 (本体価格660円) ②~⑥ 620円 (本体価格590円)

(一)~(六)

絶賛発売中

衝 撃 の コ

西暦196X年、将来を誓い合った恋人同士であるドイツ人・クララと日本人・麟一郎。

二人が乗馬を楽しんでいたそんなある日、

突如見た事もない飛行物体が目の前に墜落する。

それに乗っていたのは、完璧な美貌を持つ白人女性・ポーリーン。

彼女は日本人が生体手術により、生体家具、肉便器などあらゆる「物」に加工され、

宇宙帝国イースを支える家畜「ヤブー」として生きる

二千年後の未来世界からタイムドライブしてきたのだった。

船内で気を失ったポーリーンを助けてしまったクララと麟一郎。

恋人同士の輝く未来は、この時を境にあらゆる方向へと流れ出す……！

異才・沼正三が放った
戦後最大のタブーに
鬼才・江川達也が挑む!!

バースコミックス

家畜人ヤプー⑥

2005年9月24日 第1刷発行

著者

えがわたつや
江川達也

ぬま しょうぞう
沼正三

発行人

伊藤嘉彦

発行元

株式会社 幻冬舎コミックス

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7

電話 03(5411)6431(編集)

発売元

株式会社 幻冬舎

〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-9-7

電話 03(5411)6222(営業)

振替00120-8-767643

印刷・製本所

大日本印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致します。幻冬舎宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

定価はカバーに表示してあります。

©Egawa Tatsuya, Numa Shozo, GENTOSHA COMICS 2005

ISBN4-344-80623-9 C9979 Printed in Japan

幻冬舎コミックスホームページ <http://www.gentosha-comics.net>

この本に関するご意見・ご感想をメールでお寄せいただく場合は、comics@gentosha.co.jpまで。

本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などには関係ありません。

